
歌姫の結婚 【レディガンナーは歌う/Stage 2】

トキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌姫の結婚 【レディガンナーは歌う / Stage 2】

【Nコード】

N9797J

【作者名】

トキ

【あらすじ】

芸術の都でその名を馳せる、歌姫アンネリーゼ。女たらしで有名な劇場支配人の息子フランチとの結婚間近に、「君をさう」と、ある男から誘拐予告をされる。

それを阻止しよう依頼を受けた、凄腕ガンナー（銃の使い手）の”少女”エディ。しかし、彼女が頼りとする相棒は歌姫に魅入られた様子の上に、彼女自身も依頼人のフランチから言い寄られる始末で……！？ シリアス多め・時々コメディ

「レディガンナーは歌う」の第二部ですが、ストーリーは独立して

います。こちらだけ読んでも大丈夫、なはず。（大した描写はありませんが、念の為にR15指定を追加しました）—— 完結しました—— が、現在「エディの名を語るニセモノ現る!？」的な番外編を更新中です。

第1話（前書き）

こんにちは、もしくは初めまして。

この話は、「レディ・ガンナーは歌う」の第二部となっていますが、ストーリーは独立してますので、どちらから読んで頂いても問題ありません。

（でも念のため、後書きのほうに簡単な登場人物紹介を載せようと思います）

第1話

眩い明りが頭上から降り注ぐ。

息を吞んで、舞台上の「彼女」を見つめる観客たち。

「彼女」は、歌う。

声が遠くまで届くように意識して。

手を空に差し伸べて、歌う。

やがて、会場に弾ける拍手喝采。総立ちの人々。

それに、「彼女」は輝かしいばかりの笑顔を向ける。

歌姫。

あれが、私の夢。

なのに――。

なんでまたこうなってるの!?

「僕の婚約者を守って欲しい、ガンナーエディ」

あいも変わらず、依頼人がしっかりと顔を向けて伝えたのは、私に対してではない。

「いやいや、俺、エディじゃねえし。エディはこっち」

ひらひらと軽く手を振って否定したのは、縁あって行動を共にするようになったセシルという少年。その腰にも、六連発式リボルバーがしっかりと納められている。

彼は有名なガンナー、つまりは銃の使い手になるのが夢らしい。

それで、凄腕の雇われガンナーとして有名な私に目を付け、共に行動するようになったのだった。

その私の夢はガンナーで成功することじゃなくて、歌姫として有名になることなんだけど。

セシルが指差した私を見て、依頼人は一瞬、間の抜けた顔になる。

「は？ 女？」

そしてまたお馴染みの反応に、私はもうただ素直に頷くしかない。ただし、死んだ魚の目で。

「はいはいはい、エディって言うのは、私の通称なんですー。女だけれどこれでも銃の扱いには定評あるんですー。文句あるなら他行つて」

「エデルトリダ、だんだん自己紹介が雑で失礼なことになってきますよ」

私の隣で冷静に忠告するのは、相棒のアーチーバルド。

彼は、私やセシルと違い、銃を手にすることはない。一応、護身用と称して、身に付けていることもあるけれど、それは見せかけだけのもの。

彼にはちよつと人にはない能力があるものだから、私と会う前までは、色々と面倒に巻き込まれることも度々あったとか。そういうことを避けるために、敢えて銃を携えているらしい。

まあ、確かに、相手がガンナーだと思えば、自分も腕に自信のある人間じゃなきゃ手を出そうって気にはならないものね。

「へえ、女、女ねえ」

いつもなら、私が有名な「雇われガンナーのエディ」と知った相手は、文字通り目を丸くして驚く。と言うのも、エディなんて通称

のせいで、男と思い込んでいる依頼人がほとんどだから。

でも、今回の依頼人は違った。目を眇^{すが}めて、私を失礼なまでに、ジロジロと眺め回す。その視線にちよつと寒気がして、思わず、一歩後ろに下がった。

「な、何よ？ 不満なら、冗談じゃなく他に頼んでよね！」

背の高い相棒バルドの背後に回り、顔の半分だけ覗かせて、そこから啖^{タンカ}呵を切ってみた。

ああ、もう、我ながら、情けないったら！

でも、私がそうしたくなるのにもちゃんと理由がある。今回の依頼人は無類の女好きで、これまでも散々その関係で問題を起こしたとかいう、あまり良い噂を聞かない相手だった。

なのに依頼の内容が「婚約者を守れ」だもの。一体、どんな女性とその男と結婚するのかと思ったら、聞いて更に驚いた。

それがこの街で一番人気の歌姫だと言う。しかも、とびきりの美人。

「いや、アンタでいい。アンタがいいというべきか」

意味深な笑みを浮かべ、依頼人は、とりあえず私たちにソファを勧めた。

そこは、この街のシンボルとも言える、巨大な劇場内の一室。そして依頼人は、この劇場支配人の一人息子で、フランスという名だった。

女好き、というだけのことはあるかな。ぱつと見は、確かにちよつと整つてはいると思う。彫りの深い顔に、きつちりセットされた、肩に流れる蜂蜜色の髪。でも、私は彼の目を、たった一度見ただけ

で嫌いになった。どこか胡乱ぐわんというか、つかみ所のない不気味な深さがあるというか。

「婚約者はアンネリーゼという娘で、この劇場で一番人気のある歌姫だ」

やたらと豪勢で、華美な装飾が所々に施された部屋の中央で、フランチはひとり優雅な仕草で足を組む。それから、私のほうを意識して、前髪を掻き上げて見せた。

それに対しての私の率直な感想はこれ、「鬱陶うつとうしいなら髪を切れ」。

もちろん、声には出さないけれど。

「彼女には、数ヶ月前から、おかしい男が付きまどっていたんだ」

「おかしい男？」

セシルが興味を引かれ、訊ねる。

「時々あることなんだ、人気のある歌姫にはね。だから、さほど深くは考えていなかった。熱狂的なファンなんだろう、くらいにしかところが先日、奴は彼女に言ったらしい。結婚の前に、必ず君を攫さらう、とね」

私は、顔を顰しかめた。

「それで、それに対して彼女は何て？」

「恐ろしくて言葉も出なかった、と」

フランチはそう言っ、再び私にいやらしい感じの笑みを向ける。むしろ私が気持ち悪くて言葉も出ない、と言っ、てやりたい。

自分の感情にストレートにげんなりした表情の私に、バルドが気付く。フランチの視線を私から逸らそうと、話を振る。

「依頼の詳しい内容は、どのようになるのですか？」

その途端、明らかに舌打ちでもしたそうな苦々しい表情を、フランチは相棒に向けた。その顔にははつきりと「邪魔するなボケ」と

書いてある。

けれど、質問にはちゃんと答えた。

「婚儀が無事に終了するまで、アンネリーゼを守って欲しい」

うん、それくらいならまあ、お安い御用ではあるけれど。ちよつと依頼人がこれだとなあ。

バルドが私をちらりと見る。私がなかなか返事をできずにいるのを察し、彼はフ란ツに提案をする。

「その本人とも話せますか？ 詳しい話を聞きたいのです。それからこの依頼を受けるかどうか決めたいと思います。それでも構わないでしょうか？」

「ああ、問題ない。だが、今は無理だな」
「なぜ？」

そこでフ란ツは、これまでで一番まともな表情になった。女たらしの笑みは消えて、代わりに、劇場の支配人としての顔を見せる。厳密に言えば、その息子、なんだけど。

「これから彼女の舞台が始まる時間だ。聴いていくか？ この劇場、いや、この国の至宝とまで言われている歌姫の歌を」

第1話（後書き）

登場人物紹介

エデルトリダ（エディ）

主人公。夢は有名な歌姫になることなのに、ガンナー（銃の使い手）として有名な現実を嘆く自称レディ、もしくは乙女。十八歳。銀髪と白い肌の持ち主で、見た目はわりと良いらしい。ただし足癖は悪い。

「エディ」と呼ばれることを嫌うが、セシルに関しては、何度も注意してもきかなかったので、諦めている。

アーチャーバルド（バルド）

エデルトリダの相棒。戦闘能力は皆無だが、危険を予知したり怪我を治したりといった特殊能力を持つ。二十一歳。

珍しい能力に加え、珍しい褐色の肌を持つ。両手首に、なにやら不思議な模様の黒い刺青有り。

わりとエデルトリダの尻に敷かれているが、本人は気にしていない。

セシル

ガンナーとして有名になることを目指し、エデルトリダと行動を共にするようになる。十五歳と、一行の中では一番年下だが、時々言うことが変な感じに大人びている。

童顔であることを、実は少しばかり気にしている。茶色の髪に、濃茶の目と、見た目は至って普通。

第2話

「やっぱり金目当てじゃねえ？」

劇場の円形のホールを見渡せる個室のような空間に通されて、暫ひまじくした後、セシルが出し抜けに言った。

劇場と同じく、これまた豪華なベルベットの座席に腰を下ろし、足と腕を組んで、天井を見つめたままの姿勢を崩さずに。

「急に何よ？」

私とバルドは揃って彼を見る。

「そのアンなんとかって歌姫さ。なんで、あんな男と結婚するのかって、ずっと考えてるんだけどさ」

「まあ、確かにそれは気にはなるところだけだね。でも、依頼とは関係ないわよ、そのへんの個人的感情は」

「金じゃないとしたら、なんだと思う？」

「そうね、普通に好きだから、とか？」

私のセリフに、セシルは思いつきり鼻に皺を寄せる。それから、小さく「げえ」と呟く。

そりゃ、私だってそんな可能性は低い気がするけど、でも、好みなんて人それぞれだもの。全く有り得ないって話ではないはず。

それからまた少しの間、沈黙が落ちる。それを破ったのは、やっぱりセシルだった。

「金だよ、金」

その途端、私の脳裏にも、あのいけ好かないニヤついた笑みが浮かぶ。その顔の前で、「愛」と「お金」を天秤にかけてみる。

その結果、お金が勢いよく沈み、愛が遙か彼方に飛んで行ったの

がはつきりと目に見えた気がした。

「そうね、金よね、金」

思わずしみじみと呟くと、私につられたんだと思う、バルドまで頷いた。

「そうですね、金、ですよ」

三人揃ってブツブツと「金」を連呼する私たちは、傍^{はた}から見たらきつとかなり異様な一行^{いっこう}だったんじゃないかな。個室だったのが幸いね、誰にも聞かれないで済んだもの。

そう思つて、一人こっそり頬を緩ませた瞬間。

高い天井に、音楽が響き渡った。

観客のざわめきが朝方の霧のように引いて、舞台に下ろされていた厚い幕が、音もなく揺らめいて左右に割れる。

広い舞台の中央、シャンデリアの無数の蝋燭が落とす明りの中に立っていたのは、華奢な少女。銀と白の美しい衣装に身を包み、豊かに波打つ長い黒髪を、滝のように背に流している。そこに絡み付けた飾りが、彼女が軽く頭を上げた瞬間に光に反射して煌く。

ここからじゃ遠くて顔までははつきりとは分からない。でも、その立ち姿だけでも、彼女がどんなに美しく、そしてどんなに気品に満ち溢れているかが分かる。

あれが、件^{くだん}の歌姫。

気付くと、歌を聴く前から既に、その存在感に圧倒されている自分^{自分}がいた。思わず、膝の上の両手を握り締める。

やがて、その広い空間に、澄んだ歌声が響き渡った。それはたちどころに高い天井いっぱいまで広がって、観客達を包み込む。

高く、そして低く。
優しく、そして力強く。

時には喜びを、そして時には哀しみを声に宿らせて。
彼女は、歌う。

その歌声は、本当に不思議な響きだった。美しいだけじゃない。
人の心に直接触れるような、何かを感じる。

鳥肌がたって、私は思わず腕を抱えた。

「――ッ」

隣で、バルドが息を呑むのを感じる。

セシルも、呆然と舞台上の彼女を見つめている。

これが、この劇場、そしてこの国が誇るという歌姫の歌。

「まいったわね」

私は無意識に呟いていた。そして、唇を噛み締める。

だって、こんな歌には、私の歌じゃ足元にも及ばないもの。悔しいけど、それを痛感せずにはいられない。

舞台は、さらに他の歌人達うたびとが現れたりして、ちょっとした劇のように進んだ。

そこでの歌姫アンネリーゼの役は、敵国の王子への叶わぬ恋に苦しむ王女の役。相手役の男性を前にして、次々と見事な歌を披露する。

彼女は本当に、本物の王女のように。誰もがその世界に、強く、そして深く引き込まれる。

その夢の時間はあつという間だった。

全てが済み、魔法が解けると、観客達は皆立ち上がって惜しみない拍手を贈った。私たちもそれに倣ならう。歓声に指笛、そして次から次へと手渡される花束。歌姫は、それを丁寧の一つずつ、頭を下げ

て受け取る。

「さて」

まだ場内の興奮が冷め切らないうちに、セシルが言った。

「んじゃ、さつそく話を聞きに行くか？」

深く考え事をしていた私は、その声に現実じやんに引き戻される。

そうだ、今は、歌のことを考えている時じゃない。

「そうね。とりあえずフ란ツを探して、彼女のところそこに連れて行ってもらいましょうか」

あの依頼人とはできればあんまり顔を合わせたくないはないけれど、仕事なもの、我儘わがままばかり言っていられない。

セシルに頷いて、ゆつくりと身を翻ひるがえしたところで、私はそれに気付く。

「バルド？」

私の呼びかけに、相棒はやつとで我に返ったようで、肩をびくりと震わせた。

「あ、ああ、すみません。行きますか」

言いながらも、その表情はまだどことなく夢心地うつつで感かんじで虚ろなまま。それにセシルも首を傾げて、片眉を跳ね上げた。

「おいおい、大丈夫か？」

「大丈夫って、何がですか？ 問題ないですよ、ほら、歌姫に話を聞きに行くのでしょうか？」

バルドは早口にそう言ったかと思うと、先頭に立って一人すたすた歩き出す。

——と思ったら、少しだけ行って止まり、すぐに引き返してきた。

「で、どこに向かえばいいのでしょうか？」

いつもの彼らしくないその様子に、セシルは^{おおげさ}大袈裟に目をくるりと回して私を見る。私はそれにただ肩を^{すく}竦めるしかなかった。

第3話

彼女は、例えるなら、氷のような美しさだった。透明で、儚く、そしてどこか冷たさを感じる美しさ。

私たちが舞台裏の控え室に彼女を訪れた時、アンネリーゼは、まだあの銀の衣装を身に付けたままだった。

床に流れる裾を引き、椅子に座るその姿は、歌姫と言うよりも王女然としている。

「私だけでも大丈夫よ」

彼女がそう言ったのは、扉に寄り掛かっていたフランクに向けて。何だかんだと言ってこの場に残るかと思われた彼は、意外なことに、すぐにその言葉に従った。

「それで、私は何を話しすれば良いのでしょうか？」

婚約者が外に出たのを見届けて、アンネリーゼは私たちを順に見やった。その青い瞳が、ふと、私の背後で留まる。

ほんの数秒。だけど、確実に。

その視線を追って思わず振り返ると、バルドと目が合った。

「彼女に詳しい話を聞くのでしょうか？」

先ほどの呆けた様子はなく、いつもの落ち着いた口調で彼は私を促す。

なんかさっきから色々と気になるんだけど……まあ、いいか。

私は頷いて、単刀直入に話を切り出す。

「あなたに付きまといっている男について教えて欲しいの。いつ頃からとか、どんな様子なのか、とかをね」

アンネリーゼはそれに対して、すぐに完璧に答えた。まるで、暗記している舞台のセリフを口にするように。

「彼が私の前に姿を現したのは、今から二ヶ月ほど前でした。燃えるような赤い髪が特徴的な、若い男です。私は、彼とは面識もありませんでした。この劇場を出た時、急に話しかけられたのです。私は劇場のお客の一人だと思って、そのように接しました。それから彼は、頻繁に私を待つようになりました」

顔色を変えることもなく、淡々と続ける。

「そして私がフランスと結婚するということを公表した時から、その男の様子が変わったのです。結婚を止めるよう何度も求めてきました。そして数日前には、結婚を止めないのであれば、私を攫^{さら}う、とまで」

そこで初めてその表情に陰りがさす。瞼を震わせて、俯^{うつむ}いた。

「お願いです、どうか、私を守って下さい。どうか、どうか」

口元を手で覆って、彼女は懇願する。

私は連れの二人と、目だけで意思の確認をした。バルドもセシルも、否定はしない。

決まりね。

「分かったわ。私たちは、あなたをその男から守るようにフランスから依頼されたのよ。大丈夫よ、絶対に誘拐なんてさせないから」

「ああ、安心して、どーんと任せておけて！」

私に続いて、セシルも身を乗り出す。顔を上げたアンネリーゼは、

恐怖を目に浮かべたまま、ゆっくりと頷く。

「お願いします。私は、無事にフ란ツとの結婚を済ませたいのです」

そこで私はやっぱりどうしてもそのことが気になった。でも、そこを訊ねるのも失礼だしなあ、と一瞬悩んだ隙に。

「なあ、なんであんなスケコマシがいいイダツ！」

微塵^{みじん}の遠慮もなく訊ねちゃったセシルに、私はすかさず得意の蹴りを入れる。

その頭を背後から掴んで、「ウチの子がとんでもない失礼を、スミマセン」とかって身体を半分に折って謝りたい心境だわよ、まったくもう！

「あだだだだッ！ 分かった、悪かったって、エディ！」

——心境なだけじゃなく、実際に実行しちゃってみたい。気付いたら、セシルが私に後頭部を押さえられて身を低くし、もがいていた。

「あら」

ぱつと手を離すと、彼は弾かれたように上体を起こした。解放された頭を抱え、何やらブツブツと呟く。

それに初めてアンネリーゼが笑った。これまでの近寄り難い雰囲気が消えて、年相応の、少女らしい柔らかい笑顔を浮かべる。

「確かにフ란ツはそういうところがあります。でも、私は彼が好きだから、結婚を決めたのです」

それはさっき、セシルが「げえ」という短い一言で否定した理由だった。何て答えていいか分からずに無言でいる私たちを真っ直ぐ

に捉え、彼女は再び、はっきりと告げる。

「フ란ツを、愛してるの」

でも、そう言った彼女の目が再びバルドに向いたことに、私は気付いていた。

控え室を出て、依頼を受けるということを改めてフ란ツに伝えるに行こうと、廊下を進んだ。

「どこに行けばいいかしらね」

「まだこの辺にいるんじゃないか？」

セシルの考えは当たっていた。廊下の角を曲がったところで、彼とばったり会った。でも、彼は、一人じゃなかったみたい。

「きゃ！」

突然現れた私たちに、彼の胸にしまれかかっていた若い娘が、声を上げる。そして慌ててそこから身を引き離し、乱れた舞台衣装を直しながら走り去った。

それに反し、フ란ツは平然としたもの。私たちを目の端で捉えると、ゆっくりと、唇を舌で湿らせた。

「これはこれは、美しきガンナーのお嬢さん」

芝居がかった口調に加え、あの軽薄な笑みを浮かべて私に歩み寄る。

「お邪魔したみたいね」

自然と不機嫌な声になってしまふのを押さえられない。彼が必要以上に私に近づく前に、バルドが私の前に素早く立った。

「依頼を受けることにしました」

私を背中ですべてに依頼人の目から隠し、ただ短く、それだけを言う。するとフランツは、何の興味もないという様子で、「ふん」と呟いた。

「そうか。それは有り難い」

そこでセシルが再び、あの質問をした。ただし、今度は興味本位というよりも、怒りを押し殺した、半ば責めるような口調で。

「アンタは本当にあの歌姫を大切に思ってるのか？ 彼女はアンタを愛してると言っただけだな、アンタはどうなんだよ？」

セシルの遠慮のない問いに、フランツは喉嚨^{けんの}に目を細めた。不快感も露^{あら}わに、腕を組む。

「それはお前には関係ないことじゃないか？ ガキの口出しすることじゃない」

「俺は十五だ、ガキじゃない！」

「八も差があれば、こちらから見たら十分ガキだな。そう言われて怒るのが何よりも証拠だ」

思わず一歩前に出かかったセシルを、私は片腕を広げて制した。フランツはその様子を見て、軽く口の端を歪める。

「だが、いいだろう、これは教えてやる。僕も彼女を愛してる。だからせいぜい彼女を守ってやってくれよ」

その言葉には何の感情も籠もっていなかった。

第4話

「はあ」

今日だけで既に、何度目か分からない溜息。

時は、深夜。

場所は、寝室。

でもそこは、個室じゃなくて。

「ねえ、昼間あなたと一緒にいた人は誰？　どんな関係なの？」

「あの背の高い人、肌の感じとかエキゾチックで素敵よね。どこか遠い国の人なの？」

「あら、私はあの可愛い感じの男の子が好みだわ！　ね、あの子は歳いくつなの？」

私の溜息の理由は、これ。年頃の乙女二人の、矢継ぎ早な質問。依頼を受けた私たちは、その結婚式が終了するまで、アンネリーゼから目を離さずに、常に傍にいる、ということになった。

それはまあ、いいんだけど。

彼女はどこでどのように生活しているのかを詳しく聞いたら、劇場関係者達が暮らしている広い館があつて、そこで他の歌人達と同じように普通の生活を送っているとのことだった。

彼女みたいに頂点に立つ歌姫は、どこかもっと別の豪華な住まいが^{あて}宛がわれているものだと思ってた。でもアンネリーゼはそれを好まず、自ら進んで、こうした共同生活を楽しんでいるらしい。

「だって、自分だけの広い家があつても、そこに住むのが自分一人なんて寂しいもの」

そう言って、彼女は屈託なく微笑んだ。

今、その彼女は鏡の前に座り、腰まである黒髪を梳いている。私はベッドで枕を抱え、他の女の子達から、仲間についての質問攻めにあっていた。

「バルドの肌は単なる日焼けのしすぎで、セシルはああ見えて三十八よ」

「まさか！ 冗談はいいから、本当のところは？」

のらりくらりとした私の嘘の返答をあっさりと笑い飛ばし、己の求める真実をどこまでも追求してくる。それに観念して口を少し開いたところで、新たな質問がまた反対側から飛んでくるといふこの忙しなさ。

「あの二人って、あなたとどういう関係？ どっちがいいの？」

「どっちがいいのって、二択！？ 私に他の選択権はなし！？」

ああもつ、何度溜息を吐いたか分からないいったら！

その時、扉をノックする音が響いた。ブラシを置いたアンネリーゼが、薄くそれを開く。そしてすぐにこちらを振り返った。

「エデルトリダ、あなたによ」

私はすぐにベッドから下りて、傍らかたわに置いてあった銃を手取る。アンネリーゼに借りた薄い部屋着の上に、ガンベルトを回した。どんな時でも愛用の銃を離さないのが、既に私の習慣になっている。それが仕事であるなら、なおさらのこと。

見慣れないそれに、一瞬、女の子達の声が止む。彼女達の生きて

いる世界には縁のない、銃を腰に帯びた同じ年頃の少女の姿に、何と言ったかたぶん、違和感を覚えているんだと思う。

私はそんな二人に軽く微笑み、寒くないように長めのガウンを羽織って、すぐに廊下へと滑り出た。

そこにいたのは予想通り、セシルだった。

扉を大きく開けた瞬間、さっきの沈黙が嘘のように背後から甲高い声が上がったけど、すぐに閉めたのでそれはくぐもったものになった。

「どう？ その赤毛の男を見た？」

私が夜もこうしてアンネリーゼに付いているけれど、セシルとバルドは念のため、外を見回るということになっていた。

式までの七日間、できることなら何でもするべきだもの。今だけじゃなく後の^{のち}ことも考えて、その男に、少しばかり注意もしておきたいところだし。

「いや、今のところはまだ。この建物の周りと、劇場のほうまで一応行って行ってみただけさ。それらしい人物はいなかった」

「そう」

セシルの報告に、私は腕を組む。

「まだ初日だものね。アンネリーゼを攫^{さら}うってという言葉が本気なら、いつか必ず姿を現すはずよ」

「ああ、こっちも気を抜かないつもりだ。で、そっちはどうだ？」

背後でまだぼそぼそと聞こえる^{かしま}姦しい声に、セシルは扉に顔を向けた。私は、苦笑い。

「大丈夫よ、彼女に関しては、何も問題ないから」

「彼女に関しては？ てことは、他には何か？」

それに対してどう答えるべきか考えを巡らせた瞬間、背後から再

び甲高い声が響いた。それは、相手に媚を売る時の女の、作られた
声音。

「そんなところで立ち話って寒いでしょ、ほら、入って入って！」

「そうよ、すぐに熱い紅茶を淹れるわね！」

「え？ いや、俺はもう戻るからって、ちよ、待ッ！」

しつかり断る隙もなく、両腕を二人の娘に抱えられ、セシルはズルズルと強引に部屋に引きずり込まれて行った。

「問題は、むしろこれよ、これ」

廊下に一人残された私は、誰ともなしに壁に向かってばやく。そしてがつくりとうな垂れた。

第5話

それから三日は、何事もなく過ぎた。

私は昼も夜も、アンネリーゼに付き添った。寝起きを共にし、劇場へも送り、彼女が舞台に立つ間は、舞台袖でその様子を見守った。いつ何が起こるか分からないから、常に緊張していた。

そんな中でも、少しずつ、分かってきたことがあった。そのほとんどは、相部屋の女の子達からの情報。

まず、フ란ツについて。

彼はまあ何と言うか、これまでに見てきた行動そのままの人物らしい。とにかく、色んな女の子達との噂は絶えないし、本人もそれを隠したり、否定したりもしない。見ているこちらが呆れてしまうほど、堂々としている。そんな彼は、この劇場の一人息子で、相当甘やかされて育ったとか。

それから、彼の一族の家柄は、実は相当な名家だということも数人から教えられた。遠く離れた血筋には、王家の人物もいるとの話だった。そして彼ら一族は、それを何よりも誇りに思っているらしい。例え、今現在に直接の関わりはなくとも。

「そんな彼が、よく一介の歌姫なんかとの結婚を決めたものよね」と、ある女の子が、嫉妬心を隠そうともせずにはいたのを覚えてる。

それから、アンネリーゼについて。

彼女は言わずもがな、この街で有名な歌姫だけど、その過去は決して恵まれたものではなかったらしい。何でも、住む家もなくて、日々転々と街から街へ渡り歩くような生活をしていたとか。

そしてある時、偶然この街を訪れて、彼女の歌を聴いた街人の評

判があつという間に広がり、それがきっかけでここに雇われることになったという話だった。

本人から直接聞いたわけではないから、どこまでが本当かとか、詳しいことまでは分からないけれど。

「あゝあ、私もアンネリーゼみたいに美人で歌が上手ければ、玉の輿を狙えたかもしれないのになあ」

相部屋の女の子の一人が、舞台に立つアンネリーゼを舞台袖から眺めながら、悔しそうにぽつりと呟いた。彼女は私が一人になった時間を狙いすましたかのように、この街で一番有名な二人に関する様々なことを、いつも私の耳に吹き込んでくれる。

それこそ、そんな個人的なことまで詮索する気はない、と言いたくなるようなことまで。

「あの娘^こったら、フランスと婚約しておきながら、まだ一度も身体を許してないのよ」

へえ、そうなの。

って言うか、それに対して、私にどう答えろ！？

一度口を開けば、快く思っていないスケコマシ・フランス――

セシルが命名――に対する不満が溢れ出しそうだったから、唇を噛み締めて、軽く頷くだけに止めておくことにする。

「よく彼もそれを我慢してるものだと感じするわ」

私の背後で、もう一人の女の子が相槌を打つ。

普通だったらそこで、「よっぽど愛してるんじゃないの？」とか返したいところだけど、でもあの冷め切った口調を思い出して、私はその言葉を呑み込んだ。代わりに、それよりも少しだけ話を前に

戻す。

「でも、玉の輿ってそんなにいいもの？ お金なら、自分の努力でだつて必要な程度なら稼げるし、そんなにたくさん有り過ぎたつて遣いきれるものじゃないと思うけど。それに相手があんなに浮気する人じゃ、落ち着かないわよ」

「あなたって変わってるわね！ フランツは確かに色々と噂は絶えないけど、でも、見た目はいいし家柄も良くてお金持ちだもの。もてるのは仕方ないわよ。この街の女の子にとって、憧れの存在なんだからね」

何を言っても仕方ないと判断した私は、それを無言で受け流した。それから、再び、自分ひとりの考えに没頭することにする。

あの二人の結婚に対する疑問は、日々、膨れていくばかり。お互いにお互いを「愛してる」とは言うけれど、その口調に、その言葉通りのものが感じられない。

そして行動も、これから結婚を控えている二人にしては不自然な気がする。普通だったらもっと二人の時間を持つとかしそうなものだけど、この三日と言うもの、アンネリーゼの前にフランツは、僅かな時間しか姿を現していない。

いや、これはまあ、私個人としては、大助かりではあることなんだけど。

でも、相変わらず他の女の子と連れ立って歩いているところを見たり、先日みたいな場面に出くわしたこともあった。

その時のアンネリーゼは、すぐに顔を伏せて、身を翻した。ひるがえまるで何事もなかったかのように振る舞い、婚約者の、自分に対する侮辱的行い全てに目を瞑った。

その時ばかりは、さすがに私も黙ってはいらなかった。「どうして許せるの？」と、彼女に詰め寄った。

「彼は、私に生きる場所を与えてくれたの。彼がいなければ、私はここにはいなかった。だから、私は私にできることをするだけよ」

ただそれだけを淡々と言い、彼女は寂しげに微笑んだ。

「それであなたは幸せなの？」と、更に訊ねたかった。でも、その思いつめた表情を見たら、それ以上は何も言えなかった。

何度も色んな角度からこのことを考えてみたけれど、やっぱり何かが間違ってる気がしてならない。なのに今私にできることは、彼女を守ることだけというのがもどかしく感じる。それも、その疑問に思う結婚を無事に済ませるために、だもの。

バルドとセシルにすら打ち明けはしなかったけど、私は、依頼を受けたことを初めて後悔し始めていた。

第6話

その日の劇場からの帰り道、バルドに会った。そこは人通りの多い、街の中央に位置する広場だった。彼のほうが私たちに気付いて、足早に駆け寄ってきた。

今、バルドとセシルは私と別行動をしている。会うのは、夜に一度の報告の時だけ。

「大丈夫ですか？ 何となく、顔色が悪い気がしますけど」

太陽の日差しの下で、私を見るなり発せられた彼の一言が、それだった。

その原因として思いつくのは、毎晩繰り広げられる、同室者二人の質問攻め。ただでさえ神経を尖らせている毎日に、うまくかわすための答えをその場で咄嗟に考えなければならないことは、ちょっとした労働だった。

少なくとも、そういった類の話が得意じゃない私にとっては、だけど。

「大丈夫よ」

隣のアンネリーゼを意識して、ただ短く返す。自分の身を守るはずの人間が弱音を吐いているところなんて見たら、きっと不安になる。

それにバルドはただじつと何かを考えている様子だった。けれども束の間で、すぐに私から視線をずらした。

気付くと、彼女も、バルドを真っ直ぐに見つめていた。

たつぷり数秒、絡み合う視線……って、まるであの女の子達みたいな浮ついた表現だけど、何なのよ、どこことなく意味深なその状況は？

疲れが少しばかり溜まっていて苛立っているところもあったものだから、私はすかさず、咳払いをする。突然、理由も分からず叩かれた子供のような顔をしたアンネリーゼが、慌ててバルドから顔を背けた。

「！」

そしてそれと同時に、身を凍りつかせる。

その様子には私は眉根を寄せて、彼女の視線を追う。たくさんの人々で賑わっている広場の角^{すみ}、ここから離れた位置でも、その赤い髪は一際目を引いた。

彼をその男だと特定するのに十分な特徴に、私は目を細める。

「あの男ね？」

アンネリーゼは無言のままゆっくりと頷いた。その顔は、今にも倒れそうなほどに蒼白だった。私が腰のそれに手を掛けたのを見て、ただでさえ白いその顔から、更に血の気が引いたみたい。慌てて、私の手を押さえる。

「だめ、お願い、やめて！ 私は人が血を流すのには慣れてないの。それにいくらかおかしな男だったとしても、その死までは望んでないわ」

「分かってる、別に殺すつもりなんて私もないから安心して。さすがにこんな人通りの多いところでは撃つつもりだってないわ」

早口で囁きながらも、私の注意は、その男から逸れることはない。男は、腕を組んでただその場に立っていただけだった。でも、その様子ははつきり言ってしまうば「異常」。ひたすら真っ直ぐにこちらを窺って、身じろぎすることもない。まるで獲物を狙う動物のような緊張感を全身に漂わせ、鋭い視線をひたとこちらに向けている。

私はそつと銃をホルスターから引き上げた。敢^あえて全部抜かずに、僅^{わず}かに引き上げただけで、止めてみせる。これの意味するところはつまり、警告。

男はそれに気付いたみたい。

お互いに、お互いを凝視して譲らない。私は相手の次の行動を、瞬きせずに待つ。先に動いたのは、男のほうだった。張りつめていた意識を急に解いたかと思うと、何事もなかったように背を向けて、雑踏の中に紛れ込んで行った。

「少し外を歩きませんか？」

夜、いつもの時間に私の元を訪ねたバルドが、何の前置きもなく私を誘った。

「その間、俺が廊下で見張ってるからさ」

その隣に付いてきていたセシルも、やけに協力的に言う。

「でも」

大丈夫なの？　と言いかけて、私はちらりと背後の扉を肩越しに見やった。

私が心配してるのは、アンネリーゼのことじゃなくて、セシルの

こと。あの初日の晩、強引に連れ込まれたセシルは、女の子達の質問攻めに目を回しかけていた。

最終的にはかなり意味不明な受け答えになつてて、でも「そこがまた可愛い」なんて黄色い声で二人に一気に迫られ、更に答えにくい質問までされちゃったりして。見てた私がさすがに憐れみを感じたほどだった。

でも感じただけで、放置して先に眠ったけど。

時々、堪えきれなくなつたセシルに揺り起こされたりして、あの日は私も寝不足に陥って散々だった。

「無法者に背後から襲われた時よりも冷や汗をかいた」と、彼も後にしじみと語っていたっけなあ。

——とまあ、そんなわけだから、セシルを一人残して行くことに抵抗があるのよね。

私の視線を辿り、言いたいことを察したみたい。彼はやや苦渋の表情を浮かべたものの、すぐに明るく笑った。

「大丈夫だつて。さすがに仕事中だつて言えば、分かってくれるだろう？」

「さあ、どうかしら……」

これまでの経験からそうは思えなくて、私は言葉を濁す。

その時、背後で扉が開く音がして、思わず飛び上がりかけた。さっそくお出まし？　と思つて身構えたら、そこにいたのはアンネリーゼだった。

「ごめんなさい、立ち聞きする気はなかったんだけど、扉越しに聞こえたものだから。二人には、私からも注意するわ。だから安心して行つてきて。あまり頻繁に夜更かしするのは肌に悪いとか言えば、きつとすぐに寝てしまつたわよ」

彼女は私たちだけに聞こえる程度の小声で素早く言って、軽く片目を瞑ってみせる。

……って、そんなうまいやり方があるなら、早く教えて欲しかったんですけど!?

私の心の叫びなど知る由もなく、アンネリーゼは私に向かって微笑んだ。

「エデルトリダは、ずっと私に気を遣ってくれてるもの。たまには息抜きが必要だわ」

「そう？　なら、少しだけセシルに代わってもらおうかな」
見張りというよりも、何だか生贄を置いてくような気がしてならないけれど。でも、アンネリーゼがうまく言ってくれるなら、問題ないかしらね。

私は、その場にセシルを残し、バルドと街へ出て行った。

第7話

夜とは言え、さすが大都市。

遅くまで賑わう酒場や宿の明かりは煌々と、軒先のみならず広い通り全体を照らす。それが何軒も続くのだから、まるで光のアーケードのようにさえ見える。

私たちが目指したのは、街の中央広場から、太陽の光線のように伸びた大通りのうちのひとつ。

その一番奥には、既に見慣れたものとなっている劇場がある。さすがにこの時間には開いてはいないけれど、その建物自体が芸術的な造りのために、せめて外観だけでも一目、と訪れる旅人も多いらしい。その立派な建物の前には、ちらほらと人影があつた。

彼らに倣^{なら}つて、まるで初めて目にしたかのように、見上げてみる。壁の見事な彫刻や、至る所に据えられた歌人を象った像が、それ専用の明りを受けて、暗闇に仄^{ほの}かに浮かび上がっていた。

それは一言で言つと、幻想的。

「夜に見ると、また違って見えるから不思議だわ」

その正面で足を止め、連れに同意を求めるわけでもなく、私は呟いた。

それから私たちは、劇場前の広いスペースに造られた、それもまた芸術的と言える噴水の縁^{ふち}に腰掛けた。美しい女性の像が掲げ持った甕^{かめ}から、勢いよく水が流れ落ちている。それに空気が震え、心地よい風を周囲に作り出していた。

そこでやっとで肩の力を抜けたような気がして、私は、軽く息を

吐いた。そして大きく腕を頭上の星空に突き上げ、伸びをする。

「んゝ、なんかこういう時間って久し振り」

隣りに、常に気を張って守らなきゃいけない相手もない、そして何よりも、答えにくい質問を繰り返してくる女の子達もない。それが自分の仕事である以上、もちろんグチなんて言っちゃいけないとは思ってる。でも、こうして心身ともにリラックスする時間ができると嬉しいのも、やっぱり本音であって。

「昼間見たエデルトリダが、あまりに死にそうな顔をしていたので驚きましたよ。今回の依頼は、いつもと違う意味で難題のようですね」

「死にそうなって、そんなに酷い？」

「ええ、目の下のクマにやつれた頬、オマケに小ジ……うぐッ」

「それ以上言ったら蹴るわよ」

「……事後報告は止めて下さい」

バルドの冗談はいつものことだけど、そうとは分かっても、半分は本当のことかもしれない、と不安になった。

思わず、背後の水面を覗き込んでしまうけれど、何しろこの暗さでは、顔の細かい部分なんて分かるはずもない。

「嘘ですよ」

「は？」

「やつれた頬と小ジワって、だから、嘘だって言ってるじゃないですかー！」

さすがに二度目の蹴りは避けられた。代わりに私は、思い切りバルドを睨み付けた。

「レディに向かって小ジワとか言わないこと！ …… なによ？ なんて笑うの？」

私の真剣な様子にもかかわらず、彼は少しばかりほっとしたように笑っていた。

「いえ、やつとでいつものエデルトリダらしくなったな、と」「いつもの私？」

そこで、急になんだかおかしくなった。私も思わず、吹き出す。これまでの緊張感とか疲れを一気に吹き飛ばすように、二人して笑った。

確かに今までの私は、私らしくなかったような気がする。でも、そこであることが引っかけだった。

確かに私は、らしくなかった。でも、それを言うなら、バルドだっと思うだと思っ。

暫く躊躇ためらいして、やつのことで口を開く。

「訊きたいことがあるの」

けれど、そこで彼が思いついたのは、私が意図したものとは別のことだった。

「昼間の男のことですか？」

私は自分で質問しておきながら、一瞬きよんとして、それから慌てて頷いた。

「昼間の……そ、そう！ それそれ。あの男に、何か感じた？」
すぐに頭を仕事のことに切り替える。

相棒の能力のひとつ、私が「危険予報」と呼んでいるもの。
私は幾度となくそれに助けられてきている。あの赤毛の男が、まさかアンネリーゼを傷付けようと考えてるなんて思わないけれど、

でも念の為にバルドの意見を聞いておいて損はない。

「いえ、何も。見た感じでは、随分と険呑でしたけれどね。でも危険は感じませんでした」

「それなら少しは安心かしらね。でも、当たり前かしら？　だってあの男は、彼女を攫^{さら}うと言っているのだから」

「そうですね。なぜ、そんなことをしようとするのかは分かりませんけど」

「私もそこを考えてみたけど、やっぱり彼女のファンで、その気持ちが行き過ぎているんじゃないかと思えないのよね」

膝に肘を付いて、両手に顎を寄せたままの姿勢で私は溜息を吐く。それから、隣に座るバルドを意識しながら、もうひとつのことをどう訊ねるべきか、考えを巡らせた。

—— うん、何てことないって感じに言えば、きっと大丈夫。

「アンネリーゼには、何か感じてるの？」

口に出してから、すぐ後悔した。

うわわ、何てことないって言うか、思いつきり直接的じゃないの、この言い方！

「はい？」

今度は意味が分からない、という表情で、バルドは私に振り向いた。

「だって、こここのところのあなたの様子も時々おかしいんだもの。変にボケーっとしてたりして」

私は、言いながら顔を背ける。

「ああ、そのことですか。変なんですよ、彼女の歌を聴いたあの時に、言葉で言い表せない何かを感じた。全身の血が泡立つような、

そんな錯覚に陥ったんです。そして彼女にも、歌と同様のものを感じる。この感覚は、たぶん」

そこで突然、言葉が途絶えた。急に何かを閃いた、と言うように、バルドは目を大きく見開いたまま、私を凝視する。

「な、なによ!? また顔がどうのって言うんじゃないでしょうね?」

私は、思わず身体を引き、身構えた。

「もしかして、変な誤解を? わたしが……彼女に?」

その探るような口調や寄せられた眉は、彼が本気で驚き、そして戸惑っていることをはっきりと表している。かと思ったら、急に俯いて、両手で顔を覆う。がっくりと気落ちしているようなその様子に、私は珍しく、焦った。

「ち、違っわよ! でも、あまりに様子がいつもと違うから、おかしいと思っただけで、別にそういう意味に取ったわけじゃなくて、その」

早口に言い繕うと、その肩が小刻みに震えているのに気がついた。

これはつまり—— 笑ってる?

「ちょ、笑うところじゃないってば! どうするのよ、もしアンネリーゼもそう思っていたら!」

「アンネリーゼも、と言うことは、エデルトリダはやっぱりそう思ってたんですね」

「……!」

バルドは、変なところが鋭いと思う。私が、恥かしさと言い当てられた悔しさから顔を真っ赤にしているのを尻目に、暫く声を押し殺して笑い続ける。

さすがに少しばかり私がそれを不快に思ったところで、彼はやっつとで顔を上げた。笑ったせいで、目尻に涙が滲んでいる。

「すみません、ちゃんと説明すべきでしたね。でも、気にしてもらえていたのなら、嬉しッ……今度は拳こぶしで来ましたか」

「嬉しい、じゃないわよ！ 馬鹿ッ！」

思わず勢いよく石畳を蹴って立ち上がったところで、瞳の端に引っかけたそれに、私は気付いた。

闇の色によく映える、炎のような赤に。

第8話

その髪の持ち主は、僅か離れた位置に立ち、私たちをまるで品定めするかのように眺めていた。私と目が合っても、まったく動じない。

やがて満足したように、男はゆっくりと踵を返す。

「ま、待ちなさい！」

私の声に、男は足を止める。それから、相変わらず無機質な表情で、こちらを振り返った。

「何が目的で、アンネリーゼに付き纏うの？　もし指一本でも彼女に触れたら」

そこで私は、腰に帯びた銃を示す。

「……その無傷の手とは永遠の別れになるって覚えておくといいわ」
私の脅しに、相手は暫し何かを考えているようだった。それからおもむろに、口を開く。

「おれは、マティアスだ」

どう考えても不自然な会話の流れに、私は一瞬だけ混乱し、瞬きをする。

「別に名前なんてどうでもいい、とにかく、彼女にはもう近付かないで！」

けれど、私の言葉を無視して、マティアスと名乗った男は続ける。
「彼女に伝えて欲しい。おれは、おれ達は、絶対に諦めない、と」

「おれ達？」

バルドが、その一言を反芻する。

「達、って？」

けれど、その問いには答えることなく、男は完全に身を翻した。
そのまま早足で歩み去ってゆく。

「待ちなさいってば！」

私は、慌てて後を追った。そして、バルドも。

私たちが背後に迫っているのに気付いて、男は駆け出した。そのまま、ペースを緩めることなく、夜の街を疾走する。

やがて繁華街から、人通りの少ない住宅街の路地へ入り込む。初めて訪れた者なら明らかに迷ってしまうような細い通りを、逡巡して道を選ぶ素振りもなく、ただ真っ直ぐにどこかへと向かう。

私たちは、徐々に相手との距離を縮めながら追跡していた。月明かりに微かに照らし出される、建物と建物に挟まれた空間。夜の冷たい空気が肌を刺す。辺りは無音で、私たちの足音と息遣いが、やたらと大きく響き渡る。

やがて、逃げ切れないと悟ったのか、男が肩越しにほんの少し、振り返った。

「エデルトリダ！」

バルドが息を呑むのと同時に、私は、銃を抜いていた。

—— タン！

軽い銃声と共に、キン、と金属が弾ける高い音が耳に飛び込んだ。私が狙ったのは、男じゃなかった。

男が振り返りざまに投げた、ナイフ。

私の弾丸は狙いを外さず、短い刃物を空中で弾いた。弧を描いて

飛んだそれは激しく回転して、月光を鋭く反射させながら落ちる。

次の瞬間、思いもよらず背中に強い衝撃を受けて、前のめりに倒れかけた。突然のことに、心臓が跳ね上がる。

慌てて首を捻ると、すぐ目の前に相棒の背中があった。そこで私は、さっきの衝撃は、彼が私に勢いよくぶつかった時のものと悟る。

そして、その正面には――。

「バルド!？」

腕を広げて、私を庇っているその喉元には、細身の剣の鋭い切っ先が突きつけられていた。

――あいつ、単なる街人だと思ってたらナイフを器用に操る上に、こんな仲間がいたの!？

予想だにしなかった展開に、私は唇を強く噛み締める。

「銃を下ろして」

それは、未だに赤毛の男に銃口を向けたままの私に放たれた言葉だった。何よりも驚いたのは、女の声であったこと。頭から深くフールドを被って顔を隠していたから、そうとは気付かなかった。

いや、そんなことよりも、どうする？ 私が引き金トリガーを引くのと、

あいつがナイフを投げるのと。そして剣が動くのでは、どれが…

…どれが、一番速い？

私の考えを見透かしたように、再び、声が要求する。

「銃を下ろしなさい。あなたの弾丸タマがマティアスを撃ち抜くより先に、わたしの剣がこの男の喉を貫く」

私が迷っているのを、見ずとも察したんだと思う。バルドが前を向いたまま、静かに言う。

「エデルトリダ、従ってはいけません。大丈夫です、彼らに人を殺す覚悟はない」

「……何を根拠にそのようなことを？」

先ほどもよりも僅かに陰を含んだ声が、問う。

バルドは答えない。でも、私には分かっている。つまり彼は、こんな状況であっても「危険」を感じていないってこと。

けれど。

「わたし達が、人を殺せない？ 試してみる？」

小首を傾げての嘲笑うようなセリフの直後、軽い動きで剣が横に滑るのが、バルドの肩越しにも分かった。さすがの私でも背中に冷たいものが走るのを感じて、叫ぶ。

「だめ、言う通りにするわ！」

「それが賢い選択よ。銃を下ろして、マティアスに向かって投げて」「な……！」

「早く」

その意味は、薄々気付いていた。でも今は、とにかく従うしかないと思った。

「エデルトリダ！」

バルドが否定するように、鋭く名を呼ぶ。

でも私は振り返らず、意を決して、銃を低い位置で放った。私の手によく馴染んだ小型のリボルバーは、地面を軽く擦ってから、赤毛の男の足元に落ちる。

と同時に、男はそれを拾い上げて、道の奥へと瞬く間に姿を消し

た。バルドに剣を突きつけていた女も、そのままの姿勢で二、三步
ゆっくりと後退したかと思うと、素早く身を翻し、路地裏の闇に溶
け込んで行った。

第8話（後書き）

何だか調子よくマメにアップできてますが、このペースがいつの間
にやら落ちて、プツツリと更新停止する。それが私です。

……とか不吉なことを書いてますが、当分は大丈夫な感じがします。
たぶん。

第9話

「銃を渡すなんて」

私を振り返ったバルドの第一声はそれ。

相棒の喉元を見ると、糸のように細く血が滲んでいた。褐色の肌に浮かんたその鮮やかな色に、私は思わずカッとなって声を荒げる。

「だって、いくら大丈夫だって言われたって、あんな状況じゃ逆らうなんて無理よ！ 仲間を失うくらいなら、銃を失うほうを選ぶわ！」

己に馴染んだ銃は、ガンナーにとって、命とも言えるもの。だけど、本物の命には代えられない。

「そもそもあいつらが人を殺すつもりはないって分かっていたのなら、なんで私を庇ったりしたの？ 私は少しくらい怪我したって、あなたがいるから平気なのに！ 自分で自分は治せないんだから、無茶はしないで！」

私の視線を追って、バルドは喉元に手をやる。それから、「すみません」と短く謝った。

そこで私は、負けた悔しさからつい彼に八つ当たりしてしまっていることに気付く。そんな自分に更に腹が立って、足元に目を落とし、手を握り締めた。

「……ごめんなさい。本当は、ありがとって言うべきなのに」

つま先を見つめたまま小さな声で囁くと、頭にぼん、と手が置か

れる。驚いて顔を上げると、バルドはもういつものように笑っていた。

「わかってます」

それに何だかほっとして、私も少しだけ頬を緩ませる。子供扱いされたようなのは、若干気にはなっただけ。……まあ、いいか。

「バルド。本当に、あいつらには人を殺せないって思っの？」

私には、相棒みたいな能力はない。決して彼の能力を疑っているわけではないけれど、いくら口で「大丈夫だ」と言われても、自分の目に映ったその状況が……怖かった。そして、その感情に従って動いてしまった。

私の改めての問いかけに、バルドはしっかりと頷く。

「ええ。彼らには、いつもエデルトリダを狙ってくるような相手が放っている殺気というものを、全く感じないんです。剣を突き付けてきたあの人物からさえも。剣を動かして見せたのも、単なる脅しで、本気ではなかった」

「そう」

確かに、もしもあの二人が私たちを確実に殺そうと考えていたのなら、バルドは私を庇った時点で斬られていたはず。

それに投げられたナイフだって、咄嗟に弾き飛ばしはしたものの、その軌道は私よりも少し外れていたような気がする。バルドの言うように、人を殺すつもりがないのだとしたら、それは意図して、ということになるのかもしれない。

「でも、困ったことになりましたね」

「そうね。今回の仕事は単純に変態から歌姫を守ればいいだけだと思っていたけど、どうも違うみたいだわ。おまけに銃まで取られた」

あのマティアスという男が去ったほうへ顔を向けて、私は腰に手をやった。そこにいつも納まっているものの重さがないと、身体の一部が抜けているような、妙な感覚を覚える。

「どうします？　状況が状況ですし、依頼を断りますか？」

バルドの提案に、ちよつとだけ考える仕草をして見せる。

けれど、私はその案を受け入れる気にはなれなかった。こうなってしまう以前にも、この依頼を受けたことを後悔したことだってある。でも、それでも――。

「それはだめ」

首を横に振って、きつぱりと言いつ切る。

「一度受けると言ったのだから、最後までやり通すべきだわ。それに、またあのマティアスとかつて奴になんとしても会って、私の銃を取り返さなきゃ！　けど、とりあえずは明日、この街に銃を扱う店がないか探してみる」

言いながらも実は、ほとんど期待はしていなかった。だってここは、そういった類たぐいの物とは無縁にさえ思える華やかな芸術の都だもの。あつたとしてもきつと旅人が護身用に持つ簡単な短剣とか、その程度かもしれない。

もし私の手に合う銃が見つからなかった場合は、また何か他の方法を考えるしかない。私の銃なしで、あの只者ではない男達からアンネリーゼを守り通す方法を。

「お、帰ってきたな。どうだった？」

床に胡坐をかいて、扉によりかかった姿勢で愛用の銃を手にしていたセシルが顔を上げた。やけに愉たのしそうにニヤニヤしている彼に、

私はひとつ頷き、あつたことを報告する。

「ナイフで刺されそうになったわ」

「剣で斬られそうになりました」

「ちょ、デートに出てって何やってんの!？」

「はあ!？ デート!？」

私はセシル以上に驚いて、素^す頓^{とん}狂^{きやう}な声を上げた。それから慌てて口元を押さえて、扉に注目する。いけない、アンネリーゼ達はどう眠っているはず。

中で誰かが起き出した様子がないか耳を^{そはだ}敬^{そはだ}てて確認してから、私は、答えを求めるようにバルドを見上げる。

「いえ、あの、別にそういうつもりではなかったんですけど」

下からの二つの視線に苦笑して、彼は頭に手をやった。

「なんだ、違ったのかよ、俺はてつきりそうだとばかり」

独り言のように呟きながらセシルは、起こした上半身を再び背後の扉に落着かせた。私はほっとしたようなそうでもないような、複雑な心境になる。

そう言えば、この街へ着く少し前、バルドがそんな約束を私にしていたんだっけ。でも結局依頼を受けてそれどころじゃなくなつて、これまでその話すら出ていなかった。

約束したからと言って、それを恋煩いの少女のように心待ちにしていたとか、そういうことじゃない。ただ、軽くあっさり否定されたことが、なんとなく引かかった。

あのスケコマシ・フランツならともかく、バルドはまさかそれを忘れているとは思わなければ……。

そんな私の胸裏^{きょうり}を知る由^{よし}もなく、セシルが改めて首を傾げた。

「で、何なんだ、その剣とかナイフとか。二人で派手な喧嘩でもしたのかよ？」

その質問に、重要な問題へと引き戻される。

—— そうだ、今は、それどころじゃない。

「いつから私が剣を扱うようになったって言うのよ。違うわよ」

「それにその状況じゃ、喧嘩を通り越して殺し合いですよ」

「だとしたら、今頃ここにいるのはエディだけだな」

にやりと笑みを浮かべてのセシルの軽口に、私は目を細め、両腕を胸の前で組んだ。

「そんなの当然でしょ」

「うわ、否定しねえの！？」

私が自分の唇に素早く指を当て、扉に向かって首を少し傾けると、セシルは慌てて口を引き結ぶ。

冗談はさておき、私とバルドは交互に、つい数刻前に起こった出来事を語ってゆく。合間合間にセシルが疑問を差し挟むと、バルドが更に細かく補足した。

一通り話が済んだところで、私は空のホルスターに手をやった。

「それから、私の銃を持っていかれたわ」

その報告にセシルは目を剥いて、手に持っていた自分の銃を取り落とす。ごとりと重い音がその場に響いた。

「何だって！ どうすんだよ、これから？」

思わず大きな声を出してしまい、再び私に注意される前に「いけね」と小さく呟いて顔を顰める。

「依頼は放棄しない。明日、銃を売っている店を探すわ。それまではセシル、あなたがアンネリーゼについていてくれないかしら？」

「ああ、うん、それは構わないけど」

すぐに頷いて、セシルは床に落ちた銃に気付き、慌てて拾い上げた。それは、彼の肘から掌^{てのひら}ほどまでの長さがあるものだった。

私の愛用のものに比べて大きさも重量も遥かに勝っている銃を、セシルは易々^{やすやす}と使いこなす。一度だけ、無我夢中で手元にあったそれを放った時があったけど、私の手には反動が強過ぎた。それこそ衝撃で手首を傷めるほどに。

とは言っても、セシルの愛用の銃が特別大きいものというわけではない。むしろ私が使っている銃が通常よりも小型の、少しばかり珍しいものだったりする。

そんなわけだから、仮にこの街にある全ての銃を集めてみたとしても、私の手に合うものを見つけられる可能性はほぼ皆無に等しいかもしれない。

それを思い、私はひとり眉を曇らせた。

第10話

「これで、全部、か」

店の広いカウンターに並べられた商品を眺めて、私は肩を落とす。

「ささ、こちらにどうぞ！」

翌日、街中のそれらしき看板を掲げた店という店を渡り歩いた。その中でも一番品揃えが良い店でさえ、銃の在庫はたった二挺という有様だった。

セシルのものよりも少しだけ小型のリボルバー、それから遠距離射程の、どちらかと言えば狙撃向きのライフル。たったそれだけ。

「いやあ、こんな無骨な店ですみません、まさかあなたのようなレディが足を運んで下さるなんて……」

一縷の望みを賭けてリボルバーを手にしてみるけれど、やはりこの大きさは、どう考えても私には厳しい。

「どうだ？ エディ」

セシルが不安顔で私の手元を覗き込む。

「やっぱりダメね。これじゃ、両手で支えて撃ったとしても一撃で限界だと思っわ」

首を振り、重い黒の塊をカウンターに戻す。

「かと言って、このライフルじゃ……」

「ちよつと持ち歩きには向いてませんね」

バルドのもつともな意見に、私は頷く。

「ねえ、本当にこれしかないのよね？」

後ろを振り返ると、そこには、アンネリーゼに椅子を勧めてお茶を振舞う店主の後ろ姿があった。

「こんなもので歌姫様のお口に合うかどうか……あ、でも、他国から取り寄せた一級品なんですよ！ 妻が午後の茶にはこだわっておりましてね」

長剣やら何やらが、まるで宝物のように飾り立てられている壁の前にゆつたりと座り、アンネリーゼは困惑気味に微笑んでいる。

普通の女性なら、まず興味の無いであろう買い物に彼女を付き合わせるのも悪いと思ったのだけど、アンネリーゼ自身が一緒に行くと言って今に至る。本人曰く「普段自分ひとりでなら絶対に足を踏み入れる機会のない店を覗いてみるのも、きっと面白いから」とのことだった。

それは別に構わない。

けど、何かしらね、同じ「有名人」でも、この周りの扱いの違いって。

歌姫として有名なアンネリーゼは、街中を歩くだけで、それはもう注目の的。至るところで人々が彼女を憧れの目で追い、時には突然のプレゼントを手渡されることもある。

対してガンナーとして有名な私は、注目の的どころか、場合によっては本当に本物の「的」として狙われる。時には突然の襲撃を受けたりして、ああ、比較すればするほど悲しくなってくる。

「あの、もしもし？」

私が呼びかけても、店主は気付く様子さえない。有名な歌姫を前にすっかり舞い上がり、腰を低くしつつも「高級なお茶」について長広舌を振るっている。

「ちよつと、店主さん？」

再び大きく呼びかける。でも、返事なし。

「ねえってば！」

私の四度目の呼びかけに、店主はやつとのことで面倒そうに顔だけをこちらに向けた。

「それがなけなしの在庫だってさっきも言っただじゃないか。こっちは忙しいんだ、なんなら好き勝手に、試し撃ちでも何でもしに行つてこい！」

客を前に全く商売をやる気のない言葉に加え、まるで追い払うような仕草で手を振ってみせる。それに私はただ無言でカウンターに向き直った。

—— そう、試し撃ちしてもいいのね。

目の前のライフルを引つ掴み、セシルとバルドが止める間もなく、手にしたそれを振り上げ狙いを定める。それまでの時間は、多く見積もっておよそ三秒。

ダパン！ と、店内に炸裂音が響き渡る。と、同時に、店主の持っていたティーポットが粉々に砕け、床に陶器の破片が散らばった。紅茶の濃厚な香りが辺りに広がり、鼻腔をくすぐる。

小さな悲鳴を上げて目を丸くするアンネリーゼに、硬直して動かない店主。それを尻目に、私はたった今放ったそれをくるりと一回転させてカウンターに戻した。

「やっぱりライフルは扱いが難しいわね。やめておくわ、携帯も不便だし」

ガチガチと歯を鳴らし、ゆっくりとこちらに身体を向けた店主に、破顔一笑してみせる。

「わざわざ倉庫の奥から探してきて下さってありがとう。でも、どちらでもないわ」

店主は、今や取っ手だけになったポットの残骸を震える手に握り締め、掠れた声で答えた。

「……………へい、まいど」

私たちは固まったままのアンネリーゼを促し、店の出口に向かう。戸をくぐりかけたところで、セシルが何かを思い出したように不意に立ち止まり、店主に向き直った。

そして自分の鼻を指して、無邪気に言う。

「おっさんおっさん、洩^{ハナ}垂れてるぜ？」

第11話

翌日の夜、私たちは依頼人に、再び劇場の一室へと呼ばれた。

スケコ……もとい、フランツとこうしてちゃんと面と向かい合うのは、依頼を受けた初日以来、二度目のことだった。そして彼が隣に誰も侍らせていないのも、同じく二度目。

今日はどうやら重要な用件がある模様で、例の不快な笑みはさすがに、その見た目だけは整った顔の皮の下に引っ込んでいる。

いつもそうしていれば良いのに、と思ったけれど、私もそれを面におもてには出さない。

「さて」

私たち、つまり私とセシルとバルドが揃い、フランツはソファの背凭れに深く身を沈めて、足を組んだ。

「式はいよいよ明後日だが、今のところ我が花嫁は無事だ、おかげさまでね」

フランツは、「今のところ」をことさら強調した。まるで、残るあと二日のうちに、私たちが失敗でもするとも思っているような口調だった。

「だが、問題はこれからだ。相手も、式の前に彼女を攫うと言った。それも必ず、と」

思わせぶりに、私たちを一度見回す。私は頷いて、先を促した。

「そこで、念には念を入れるべきだと思っ
てね。式を延期することにした」

「延期？」

思いもしなかった話に、私は瞬きをする。セシルとバルドも、意

味が分からずに、お互いに顔を見合わせた。

「それでは余計に、相手に猶予を与えてしまうのでは？」

バルドが、私たちの疑問を代表して問う。それにフ란ツは、面倒そうに顔を顰めた。

「それだけじゃない、まだ続きがある。予定していた式は行っただ。花嫁は別人を使っただね」

「別人を使う？」

私は更に混乱し、首を傾げた。

アンネリーゼではなく、他の娘と結婚するということ？ まあ、この依頼人なら、突然の心変わりとかあっても不思議ではないけれど。

「要は、替え玉を使って相手を騙すんだ。式を執り行う司教も、その権利の無い人間に演技をさせる。だから式を行ったところで、それは正式な誓いにはならない。見せ掛けだけの、大掛かりな結婚式ごっこことでも言おうか」

そこでやつとで私たちにも、彼の考えが分かった。

「つまり、もし式までの間に何も起こらなかった場合は、式当日に彼女が攫さらわれることを想定して、偽装結婚式を行うということね？」
「そしてもし実際に何かあったとしても、それが替え玉であれば問題ない、と」

私の後を、セシルが継いだ。

それに対してのフ란ツの答えは、満面に浮かんだ笑みだった。

「ご名答。奴はどうやら、式の前に彼女を手に入れることにこだわっているらしいからな。偽ニセの式で奴を釣って翻弄しておき、その間

にアンネリーゼと正式に結婚をするという計画だ。こちらの式は場所も日時も一般には明かさずに、近日中に行く。隠れてのものだけに、地味なものになるが」

説明をしながらも、流れ落ちた髪を掻き上げる。

だから鬱陶^{うつとう}しいなら切ればいいのに、と思っただけど、それはまあさておき。

私は視線を彷徨わせ、その計画が果たしてうまくゆくのかどうかを思案する。そこでひとつだけ、気になることがすぐに見つかった。

「待つて、その計画には問題もあるわ。その替え玉は？ 彼女に危険が及ぶかもしれないのよ」

「ああ、だからお前達を呼んだ」

私たちを……そうか、アンネリーゼではなく、当日はその替え玉となる彼女の身を守れてことね。

納得して、頷きかけた時、フ란ツの口から更に予想だにしないかつたセリフが飛び出した。

「その替え玉を、エディにお願いしたい」

「なんですって!？」

思わず声を上げた私に、フ란ツはしごく真面目な目を向ける。

「冗談で言っているんじゃない。始めはもちろん、他の娘を使うことも考えた。だが、あんたが一番適役だと思えてね。ガンナーとして世間に名を馳せるほどだ、多少の危険には慣れているのだろう?」

反論したくてもできない説得力のある言い分に、大きく身を乗り出したのはバルドだった。

「それはできません、お断りします！」

断固とした拒絶に、けれど、フランツは小馬鹿にするように鼻を小さく鳴らす。

「僕は、彼女に頼んでいる」

その短い一言に、その場の全員の視線が私に集中した。

バルドだけじゃない、セシルも自分の顔の前で手を振って私を説得する。

「エディ、やめとけ！ 例え偽装でも、こんなスケコマシの嫁になんかなったら一生の恥だ！」

「おい、待て、このガキ」

「そうですよ、セシルの言うとおりです、珍しく！」

「珍しくって、それ俺に失礼だつての！」

私は、周りの騒ぎも耳に入っていなかった。ただ、じっと膝の上の両手に目を落として、考え続ける。

もちろん、偽装とは言え、フランツの隣を花嫁として歩くのなんて死んでもお断りというのが本音だった。けれど私は、銃をあのマティアスとか言う男に取られている。それを取り戻すためには、どうにかして、またあいつと接触するしかない。

それに、アンネリーゼを守るといふ依頼を受けているのに、代わりの銃も見つけられなかった今の私には、何もできることがない。相変わらず常に彼女の傍らに控えてはいるけれど、それは形だけの護衛でしかない。実際は、結局のところずっとセシルに任せきりになってしまっている。

彼は「仲間なんだから気にしなくていい」と言うけれど、仲間だからこそ、役立たずでいる自分がもどかしかった。セシルには銃が

あり、バルドには万が一の時の能力がある。でも、銃を失った私は、何も無い。ならせめて、自分にできる方法で、アンネリーゼを守るべきなのではないか――。

そうして悩んでいたのは、きつと数秒。顔を再び上げた時には、私の心は決まっていた。いや、覚悟ができていた、と言っべきね。

両手を握り締めてから、眉を顰^{ひそ}めたバルドとセシル、それから無表情で私の答えを待つフ란ツを順に見やった。

「分かった、私がその替え玉の役を引き受けるわ」

第12話

「馬鹿なことを！ わたしは認めません！」

私の答えに対し依頼人が何かを述べる前に、バルドが素早く反撥はんぱつした。

「馬鹿とはなんだ、馬鹿とは。彼女が引き受けたと言ったんだ。お前には関係ないことだろう？」

それにフ란ツは、勝ち誇ったような笑みで応酬する。

バルドは一度私に視線を走らせてから、再びフ란ツに目を向ける。と言うよりも、睨みつけていると言ったほうが正しいかもしれない。

「関係なくありません。わたしはエデルトリダの相棒です。彼女が受ける依頼は、わたしが受ける依頼でもあるんです！」

「だが今回は、必要なのは彼女だけだ」

咄嗟とつとに言い返せず、バルドは一度開けた口を閉じた。それから、再び勢いこんで言う。

「彼女がそんなことをする必要はない！ 彼女がするくらいなら、

わ……」

「わ？」

—— ちょっと、まさか勢い余って、「わたしが代わりに」なんて言うんじゃないでしょうね？

私の脳裏を、そんな不安が過ぎった。私だけじゃない、セシルとフ란ツも同じく予想したらしく、固唾を吞んで、バルドに注目す

る。

そんな中、すい、とバルドの人差し指がセシルを示した。

「わたしは、代わりにセシルを推薦します！」

「お前はアホかーッ！」

しごく真面目な調子で放たれたセリフに絶叫したのは、当然、セシル。これにはさすがのフランツも、なんとも表現し難い、苦々しい表情を浮かべている。

「なんでそうなるわけ！？　なんで俺！？　そりゃー俺は男にしちや小せえよ！　でもまだ伸びるから、これからだからッ！」

半分涙目のセシルに、バルドは胸座むなぐらを掴まれ、ガクガクと揺さぶられている。

「エディよりもセシルのほうが、女らしいじゃないですか、名前はね、セシリー？」

「ね、じゃねえよ！　セシリーって呼ぶなつての！」

放っておいたらいつまでも続きそうな二人の言い合いを、フランツの咳払いが止めた。目尻をひくつかせながら、何とか冷静を装っているといった様子だった。

「心臓に悪い冗談はそれくらいにしておいてくれ。ではエディ、明後日はよろしく頼む」

「なんであんなことを引き受けたんだよ？」

部屋を出るなり、不機嫌を隠そうともしないセシルに詰め寄られた。

「私にもできることがあるなら、すべきだと思ったからよ。それに、私が替え玉になってあの男に狙われれば、銃を取り返すチャンスだってできる」

言って、無意識に、今は何も携えていない腰に手を伸ばした。それを目で追い、セシルは深々と溜息を吐く。

「取り返すのはまあ、いいけどさ。言っただじやないか、役立たずだなんて気にすることないって」

「そうだったわね、ありがとう」

セシルのその言葉を本当にありがたく思っている私は、素直に微笑んだ。

「銃がなくなつて、エディにはまだ足という凶器がつて、危ねッ！」
私の拳を顔面すれすれで避けた彼に、引き続き笑顔を向ける。ただし今度のは、表面だけのもの。

「そうだったわね、腕もあるわよ」

踵を返し、歩き出して暫くしてから、再びセシルが納得いかない様子で唸った。

「なあ、やつぱりこれって無理してエディがしなきゃいけないことか？ 代わりを搜したほうがいいんじゃないか？」

「じゃ、セシル。やつぱりあなたが代わってくれる？」

「だから気色悪いこと言っただけ！」

セシルの悲鳴に、私は声を上げて笑う。そこでふと、そのことに気付いた。いつもなら絶対何か意見を言うはずのバルドが、あの後、一言も洩らさない。

「おい、バルドからも何か言えって」

セシルも違和感を覚えたらしく、隣に行く彼を促す。

私は一度足を止めて、バルドを振り返った。真っ直ぐに私を見下ろしていたのは、これまで仲間には向けられたことのない、怒りを露わにした険しい顔だった。

さっきまでセシルと馬鹿を言い合っていたことが信じられないほど冷たい目を向けられ、私は思わずひやりとして、一步、後退る。

「わたしとセシルは反対しました。けれどそれを受けるとエデルトリダが言ったのだから、今更何を言っても仕方ないでしょう？ あとは、無事に明後日を乗り越えられるようにするのみです」

その抑揚は落ち着いていて、言っていることも尤もなことだった。けれど、いつもの穏やかさは微塵もない。突き放すようなその口調に、私は彼を説得しようとして口を開きかけた。けれど。

「今日はもう遅いですから、休んだほうがいいでしょう。ではまた明日の夜に」

私と言葉を交わすのを避けるように、バルドは私の横を足早に掠めて行つた。その場を去る彼の背中を見送り、セシルは小さく呟く。「いや、まあ、何か言えとは言ったけどさ。あんなに怒ることもないじゃんか。大人気ないな」

セシルの独り言に曖昧に頷きながら、私は内心で戸惑っていた。

そう言えば、依頼を受けるか否かでバルドと意見が分かれたのは、これが初めてだった。

うつん、それだけじゃない、この街に着いてからというものの、彼と考えがすれ違ってばかりいるような気がする。こんなことは、一

緒に行動をするようになってからというもの、今まで一度もなかったのに。

一体、私たちは、どうしたのだろう？

第13話（前書き）

今回この話をアップするのの際し、R15指定を追加しました。
詳しくは、活動報告に載せておこうと思います。
途中からの変更、申し訳ありません。

第13話

それはまるで、雪のようだった。真っ白く、ふわふわで、美しく。
て。

結婚に憧れる娘なら、一度は夢見るウェディングドレス。それを今、私は纏まとっていた。それも相当豪華な、思いつく限りの贅を凝らしたドレスだった。

さすが街で一番有名な花嫁のために用意されただけはある。素材も一級品の絹で、たつぷりとしたスカート部分には、華奢で繊細なレースがふんだんに使われている。ところどころにちりばめられた、白い光沢を放つ大粒の真珠に、透明な輝きの宝石。

肌が露わになっっている肩越しに振り返ると、身の丈近くもある裾が、深紅の絨毯を敷き詰めた床に整えられ、美しい模様を描いていた。

再び身を動かすと同時に、緩やかな黒髪が肩にさらりと流れ落ちる。頭に被っているのは、アンネリーゼと同じ髪の色ウィッグ。式の際には、更に薄いベールで顔も被ってしまうことになっている。そうしてしまえば、遠目に見る分には、まさか別人だなんて思わないはず。

その広い部屋に備え付けられた巨大な鏡に映る私は、姿ばかりは幸福の絶頂にいる花嫁だった。けれど当然のことながら、その顔は幸せに紅潮してもいなければ、微笑んでもいない。むしろ死刑を待つ罪人のような面持ちに近いと言っても、過言ではないかもしれない。

式は明日に迫っていた。今夜、こうしてドレスを着ているのは、

サイズの確認のため。元々はアンネリーゼが着る予定だったものだから、もし合わない部分があるならば、急いで簡単な手直しを入れなければならない。

そう言われて試してみたところ、もちろん別人なのだから多少の違いはあったけれど、奇跡的にほぼぴったりだった。

私の衣装合わせが済んで暫くした頃、突如、扉が大きく開かれた。何の前触れもなく響いた音に、驚いて身を翻した……^{ひるがえ}……つもりが、まとわりついた長い裾に足を取られ、身体のを半分変えるので精一杯。私は思わず舌打ちをしそうになり、慌てて堪えた。

開け放った扉の前にいたのは、あまり会っても嬉しくない相手、つまりフ란ツだった。私の周りにいた使用人たちは、彼に気付くやいなや、すぐに膝を折り頭を下げる。フ란ツはそんな彼らを一瞥し、軽く手を振り、出てゆくように命じた。結果、私は彼と二人きり、部屋の中央で向かい合う形になる。

「ドレスのサイズは大丈夫みたいだな」

私の全身をくまなく眺めてから、フ란ツはひとり、満足そうに頷いた。

「ええ、特に問題ないわ」

私は必要以上の感情を込めず、淡々と答える。

すぐに出て行くかと思った依頼人は、なかなかその場から動こうとしない。かと言って口を開くわけでもなく、ただ無言で私をジロジロと眺め回している。

私は思わず肩に力を入れた。

「な、何よ？ まだ何か用事でも？」

「いや。明日、自分と式を挙げる相手をじっくり見ておきたいと思っ
つてね」

「式を挙げるとは言っても、あくまでも偽装なのよ。それに、あな

たにはアンネリーゼというれっきとした花嫁がいるじゃない。こんなところで私を、じゃなくて、彼女を見つめているべきだわ」

相変わらずのセリフに、私は顔を逸らしてにべもなく言い放つ。

本来なら、彼女が着るはずのウェディングドレス。そして彼女が共に歩くはずの相手。彼女は今、どんな気持ちだろう。普通の花嫁ならきつと、今頃は胸に抱えきれないほどの幸福感に酔いしれているはずなのに。

この場にいない花嫁に考えを巡らしていた私の真横に、突然フランツが迫った。驚いて身を引いた瞬間、裾に足を取られてよろめいた。

慌てて背後に手を伸ばしたけれど、その先には身体を支える壁も何もなく、そのまま床に倒れこむ。

「……っ！」

すると最悪なことに、この馬鹿依頼人、私を助け起こすどころか――覆いかぶさってきた！

ちよ、ちよつと、何よ、この状況！？

「どいてよ、大切なドレスが皺になるわよ！」

パニックに陥りそうなのを必死に堪え、私は叫ぶ。

「ドレスなんかいくらでも皺になっても構わない。また整えればいいだけの話だ」

その答えを聞く間にも押し退けようとした腕を捕らえられ、私は顔から血の気が引いてゆくのを感じた。

一体、どういっつもりなわけ！？

表情で私の言いたいことを察したらしい。フランツは口の端を歪

める。

「アンネリーゼの代わりに、本当にあんたを嫁にもらってやってもいいな。抱き心地が良さそうだ」

私は、これまでになく間近に迫ったその顔を、怯^{ひる}まずに真っ直ぐに見上げる。冗談で言っていることを期待して目を覗き込むけれど、残念なことに、本気らしい様子だった。

この馬鹿スケコマシに、常識的に迫ったところで効果はない。となると、こういう場合に残された手段はひとつ。

「蜂の巣にされたいの？」

そう、実力行使。

でも、口にしてから肝心の銃がないことを思い出した。それは相手もそうだったみたい。いつもなら銃があるはずの位置に、一度わざとらしく目を向けた。そしてまるで意味のない滑稽^{こっけい}な脅しに、片眉を上げて見せる。

「銃もなしに、か？　できるものならやってみろ」

ああ、もう、こいつも馬鹿だけど、自分もお馬鹿だった！

私は思わず苦悩の呻きを洩らす。

「アンタのこういう行動で、アンネリーゼがどれだけ傷ついてるか知ってるの！？」

効果は全く無しということは分かっているけど、それを叫ばずにはられない。

彼女は口にこそしないけれど、フランクが他の女の子といるところを見て、いつもそつと柳眉を下げ、顔を背けた。それでも非難もせずに、「彼を愛してる」と言う。私には、彼女の気持ちなんて全く、これっぽっちも理解できない。ただ分かるのは、同じ女として

これ以上、彼女に傷ついて欲しくないということだけ。

けれど、この馬鹿から出た言葉は、まさに最悪なものだった。

「彼女の気持ちを考えて、なぜ僕が気を遣わなければならない？

そんなことは関係ないね」

「か……！」

カケラもいいところない、この最低男ッ！

さすがに自分自身の身の危険を感じ、焦りも限界に近付いてくる。できるだけ冷静を装って穏便にこの場を収めたいと考えているのに、じりじりと、恐怖が身体を蝕み始める。

黙っていると大変なことになりそうなので、とにかく何かを言わなければ、と必死に言葉を探した。

「あ、アンタみたいに有名な人がこんなことしたら大問題なんじゃないの！？ 雇った女に無理矢理手を出した、なんて話が広まった」

「世の中にはな、金で解決できないことはないんだ。それに僕に言い寄る女はいくらでもいる。もしお前がそんな話をしたとしても、逆に僕に振られた腹いせに嘘をついているとしか思われないう」

「な……！」

どれだけ自信過剰よ！？

そう食ってかかるうとしたけれど、舌が固まったようで、動かなかった。気付けば、口の中もカラカラに乾いている。

「街の人間が、一体どちらを信じると思う？ 地位のある僕と、所詮どこの出自かも分からない雇われガンナーの女と」

侮辱されたことに対する怒りと、この男に対する呆れとで、頭が真っ白になる。もはや逃れるための言い訳も思いつかない。

私が黙った隙に、大きく衣擦れの音がした。今までドレスに包まれていた左足が、際どい部分までひやりと冷たい空気に晒される。それから、素肌を這い上がる固い手の感触――。

瞬間、これまで何とか保っていた理性が、どこかへと吹き飛ぶのを感じた。

「……ッ、銃がないからって、弱くて簡単な女と思ったら大間違いよ」

噛み締めた歯の隙間から、唸る。

「私は！ 銃がなくなつて、アンタなんかよりは強いんだから！」

第14話

部屋の中央にひとりで呆然と座り込んでいたら、忙しない足音が聞こえてきた。そして、急くような、強めのノックが数回。

「エデルトリダ？」

それは、耳に馴染んだ声だった。

私は安堵に胸を撫で下ろして、「どうぞ」と言おうとしたけれど、声が掠れて出ない。何度か試してもうまくいかず、答える代わりに扉を開けようと考え、立ち上がるうとした。けど、足も感覚を失ったようで、動かない。

更に数回のノックの後、私の返事を待たずに、扉が開かれた。半分ほど開いたその隙間から中を窺ったのは、バルドだった。それにその背後には、セシルの姿もある。

力なく座り込んでいる私を見るや、相棒は駆け寄って何かを言おうとしたけれど、それを呑み込んで、代わりに軽く目を見張った。その背後のセシルも、揶揄するように短く口笛を吹く。

「馬子にも衣装ってこのことか」

いつもなら売り言葉に買い言葉で、私もそれに反論するところだけど、さすがに今はそんな気力も無い。

無言でつい、と目を逸らしただけの私を、バルドが手を貸して助け起こした。

「なにかあったんですか？　そこでフ란ツとすれ違ったんですけど、その……」

きっと傍^{はた}から見たら滑稽^{こっけい}に思えるほど愚鈍な動作で、私は相棒を見上げる。

「何もないわ」

「そんなわけないだろ。だってあいつ、すっげえ顔腫れてたぜ？」

セシルの報告に、再び視線を、くしゃくしゃになった純白のドレスに落とした。

「あれ、エディがやったんだろ？」

「つまり、そうしなければいけないようなことがあったってことでしょう？」

私は、また口を開かない。それにバルドは少しだけ怒りを含んだ声音になる。

「エデルトリダ、わたし達に隠し事はしないで下さい」

「本当に何もなかったわ。ただ、ちよつと……危なかっただけ」

「危なかったって、まさか」

「何もないってば！ その前に、殴り倒したもの！」

そこで、押さえていた感情が爆発する。

「あいつ、私がドレスの裾に躓いた時にそのまま伸^のし掛かってきたのよ！ やめるように色々と言^い得^えてみたけど、聞く耳なしだった。それに、酷く侮辱もされたわ。だから殴^うったの、そうするしかなかったのよ、依頼人を殴^うるなんてどうかしてるとか言^いわないでよね。私だって必死だったの、怖^こかったんだから！」

一気にまくしたてたら、今更ながらに身体が小刻みに震え出した。止まらなくて、思わず自分で自分を抱きしめる。

そう、本当に、怖かった。

前にも似たような不快な思いをしたこともあるけど、あの時は銃もあつたし、セシルも近くにいた。それに相手だって、本気で私自身をどうにかしようとしていたわけではなかった。

でも、今回は違う。身を守る銃もなく、助けを求められる仲間もいなくて――。

その二人にも、また「エディに手を出そうとするなんて命知らず」とか軽く流されるのだろうと思って、唇を噛み締めて俯いた。

二人は、私が本気で殴った後のフ란ツの無様な顔を見てしまっている。客観的に見たら、私は事なきを得ている上に、傷付いたのは相手だもの、笑い話にすらなりかねない。

いや、それ以前に「ほら見たことか」と、「だから断れと言ったのに」と責められても、反論のしようだってない。二人の反対を無視した結果がこれなのだから。特にバルドの昨夜の様子を思い出し、覚悟して身構える。

なのに、今度は彼らが黙り込んだ。その空気に耐えられなくて、私は自棄^{ヤケ}になつたように声を荒げる。

「い、いつもみたいに、からかつて笑えばいいじゃない!」

一度勢いを増した感情は、抑制が効かない。

私が鋭い声音で叫んでも、バルドもセシルも、何も言わない。何も言ってくれない。

「なんで黙ってるの!?　なんで、なんで……お願い、何か言つてよ」

最後のほうは、声が霞んでしまっていた。

ぐしゃぐしゃな気持ちに押しつぶされそうだった。いつもみたいに、馬鹿なことを言って、笑ってくれたほうが何倍も気が楽だった。黙っていられると、不安になった。

もしかしたらもう何も言えないほど、呆れられたのかもしれない。このまま何も言わずに、背を向けられるかもしれない。

沈黙に堪え切れずに俯いた刹那、強く身を引き寄せられて、息が止まりそうになった。何が起こったのかすぐには分からなかった。気付いた時には、バルドに抱きすくめられていた。

驚いて、目を見張る。

いつもなら慌てて振りほどくところだけど、今回ばかりは、私もそんな強がる気にはなれなかった。躊躇^{ためら}いながら、その背中に手を回し、胸に頬を押し当てる。

途端、身体中にふたつの安堵が^な縋^ない交ぜになって広がり、目に涙が滲んだ。緊張と恐怖から解き放されたことと、仲間に見捨てられなかったことに対する安心に、再び身体中の力が抜けてゆくを感じる。

バルドは、抱きしめられた私が痛いほどに腕に力を籠めた後、何かを小さく呟いた。よく聞こえなくて、瞬きをする。

—— え、今なんて、殺……？

かと思ったら、突然私を解放して、素早く身を^{ひるがえ}翻す。腕を伸ばし、セシルの腰にあったそれをホルスターから引き抜いた。

「え、ちょ、なに!？」

セシルもうつらえて、バルドを見上げる。

「借ります。あの節操なし……殺してやる!」

吐き捨てるように言い、大股で部屋を出て行った。

「殺してやるって、お前、キャラ変わり過ぎじゃねえ!？」

私とセシルは一度、無言で顔を見合わせ、慌てて後を追う。長いスカートを両腕に抱えた状態では、早く走ることなんてできなくて、バルドの遠い背中を必死に追うので精一杯。それも見る間に距離が離れてゆく。

余裕を持って私の隣を早歩きで行くセシルに、助けを求めて叫ぶ。

「セシル、お願いだから早く止めて!」

「なんでだよ？ 襲われかけてもまだ、あんな奴を庇うのか？」

「違うわよ、私だって、できるなら自分の手で殺してやりたいくらいなもの！ 私が心配なのは、バルドだってば!」

「え、なんで」

「人を殴っただけで、自分も手にダメージを受けるほどの暴力不向きなのに、それが銃なんか使ったらどうなると思う!？ 手首を痛める程度で済むとは思えないわ！ そもそも使い方だってちゃんと知ってるかどうか」

私が最後まで言い終わらないうちに、セシルもことの重大さに気付いたみたい。眉を寄せて渋面になったかと思うと、バルドに向かって全力で駆け出した。

第15話

何とか二人に付いて行こうとして、もう一度、腕のスカートを抱えなおす。そうこうしているうちに、セシルの後ろ姿も、長い廊下の角に消えた。

「ああ、もう、歩きにくいわね！」

見た目は優雅だけれど、身動きするには不便極まりないそれに、一人その場で深い息を吐く。

長く、その分重い裾を引き摺りながら、やっとで角を曲がる。二人がどこまで行ったか、首を伸ばして確認しようとした時だった。

突然、背後から口元を覆われた。そしてそのまま、明りのない部屋に強引に引き摺り込まれる。

咄嗟にフランツの顔が瞼に浮かんで、全身の肌が泡立ち、心臓が早鐘を打ち始める。言葉にできない嫌悪感に吐き気を覚え、身震いした。その腕から逃れようと、必死に身体を擦る。

けれど、耳に飛び込んだのは、思った人物の声ではなかった。

「頼むから暴れないでくれ。おれだ、マティアスだ。迎えに来た」

フランツの声ではなかったことにはほんの少しだけ気持ちが緩んだ。——と同時に、やはり背筋が凍りつく。

なぜこの男がこんなところに、という疑問が脳裏を掠める。けれど、アンネリーゼを攫う機会をずっと狙っていたのだろうから、この館に忍び込んでいたとしてもおかしいことはないかもしれないと、一瞬の後に思い直した。

こういう状況で暴れるな、と言われて、はいそうします、と素直に従う人間なんてあまりいないはず。もちろん私もそうだった。

腕を持ち上げようとして、ふと指先に、固い金属質のものが触れたことに気付く。すぐにそれが何かを感じただけで察した。半ば本能的に、手を伸ばす。

男の腰のベルトに無造作に差してあったのは、間違いない私の銃だった。素早く引き抜いて、撃鉄ハンマーを起こす。私が引き金トリガーに指をかけるのと同時に、苦痛の滲んだ囁きが男の口から発せられた。

「アン、皆のところに帰ろう、復讐なんて馬鹿なことはもう」

声と重なって、タン、と軽い音が弾けた。私の口元を覆っていた手が外れ、大きな物音とくぐもった声が、薄暗闇の中に空ろに響く。

「今……今、なんて？」

肩で息をしながら背後を振り返って見下ろすと、男は床に倒れこんでいる様子だった。扉の隙間から漏れる薄明りしかないから、その輪郭は、はつきりとは分らない。

本当は、相手が身動きを取れなくなる程度の傷を負わせるつもりだった。けれど、寸でのところで聞こえたその言葉に、私は思わず銃口を逸らしていた。

呻いているところを見ると、完全には狙いを外し切れなかったみたい。どの程度の負傷なのか確かめようと身を屈めたら、当然のことながら、手を振り払われた。

かと思えば、次の瞬間には二の腕を強く掴まれ、引き寄せられる。薄暗がりの中、お互いの鼻の頭がぶつかりそうなほどの距離で私を認め、相手は愕然と呟いた。

「あんた……アンじゃない、あの時の」

相手が倒れているとは言え完全に緊張を解いたわけではない私は、その左胸にぴたりと銃口を押し当てる。

「そうよ、私はエデルトリダって言うの。残念だったわね。腕を離してくれる？」

男は、自分の身体に突きつけられたそれに目を落とし、くそ、と呟いた。ゆっくりと、私の腕を離す。

「ありがとう。それから、さっきのはどういう意味？ 復讐って？」
訊ねても、口を引き結び、無言で鋭い視線を私に向ける。その目に浮かぶのは、激しい警戒心、そして拒絶。

「答えないと撃つわよ」

もちろん、これは本気じゃない。けれど、言いながら更に強く銃を押す。大抵の人間なら、この時点で喚くなり怯えるなりして、あっさりと口を開くはず。けれど、この男は違った。

「いいや、あんたは撃たない」

言って、己の命を奪うかもしれないそれを掴んだ。傷を負った部分を押さえていたのだと思う、その手は血で汚れている。

「始めから本気で撃ち殺すつもりなら、わざわざ弾丸^{タマ}を逸らしたりなんかするものか」

不適な笑みを浮かべ、挑発するように、握った銃を軽く自身に引き寄せてさえみせる。

私は内心で呻いた。行動を見透かされている。

この相手は、油断ならない。

「どうかしら？ さっきのは気まぐれかもしれないわよ」

自信に溢れた口調は崩さずに、私は素早く思考を巡らせていた。

私はこの男を、もとから殺すつもりなんか一切ない。

そして今、聞き出したいこともある。

相手の手に凶器はなく、こちらが優位な状況。

なのに、相手は私の行動を読み、言葉が上辺だけであることも知っている。

そして私は次にどう動くべきか、決められないでいる。

これじゃあ、まるで……追い詰められているのは、銃があるのに相手を撃つことができない私のほうだわ。

引き寄せられた銃に視線を落としたその時、廊下から私を呼ぶ声がした。セシルの声に、私は目を上げる。

この早さだと、バルドを止めるのに間に合ってたってことね。

ここにいる、と声を上げようとした時、急に体勢を崩して思わず言葉を呑み込んだ。男が、銃を握った手をそのまま強く引いたらしいと気付いた時には、遅かった。

「悪いが、あんたにも一緒に来てもらおう」

「……っ!？」

瞬きをする暇もなかった。鳩尾に鈍い痛みを感じたと思った途端、視界がぼやけ、そこで私の意識はふつつりと途絶えた。

第16話

初めに感じたのは、身体の重さだった。

手も足も何もかもが、感覚を失ったように重い。

瞼をゆっくりと持ち上げる。その途端、これまで遮断されていた光の渦が押し寄せて、ズキリと頭が痛んだ。

視界が落ち着いてから、ゆっくりと身を起こす。

そこは、粗末な木製の、傾きかけた小屋だった。天井から吊るされたランプに火が灯つているところを見ると、どうやら今は夜、ということらしい。

意識が朦朧^{もろう}として、どうして自分がこの場所にいるのか、よく分からない。

「バルド？ セシル？」

無意識に、見慣れたその姿を探す。けれど、この狭い空間に閉じ込められているのは、自分だけ――

そう、私はここに、閉じ込められている。

そのことで、記憶が戻って来た。

私は、あのマティアスとかいう男に殴られて……！

慌てて立ち上がると、流れるシルクが足に絡みついた。剥き出しの肩から、何かが滑り落ちる。けれど、それに注意を払う前に、小屋と同じく傾いた扉に飛びついた。

予想通り、押しても引いても開かない。きつと外側から門^{かぬき}か何かが掛けられているんだと思う。

ひとしきり扉を揺すったところで、私は改めてその小さな空間を見渡した。そこで、意外なことに気付いた。

私が寝かされていたのは硬い地面ではあったけれど、剥き出しの土に直接というわけではなかった。隅にきちんと折りたたまれた布の上で、更には薄い毛布まで丁寧に掛けられていた様子。さっき肩から落ちたのは、その毛布だった。

そして驚いたことに、布の端には、私の銃が置かれていた。

「どうして……？」

それを手にし、呟く。

手荒な方法で攫^{いた}っておきながら、なぜ、こんな気を遣った扱いをするの？　そして、銃まで手元に残しておくなんて、一体、どうして。

その行動の矛盾に首を傾げるけれど、むろん、答えなんか出るはずもない。

突如、背後で物音がして、弾かれたように振り返った。

扉が数回揺れ、ゆっくりと開かれた。

私は、銃を構える。

「——！？」

けれど、現れたのは、あの赤毛の男じゃなかった。

痩身で手足の長い、背の高い女。つんと尖った形の良い鼻に切れ長の目が印象的な、不思議と人目を惹き付ける雰囲気的人物だった。私を見ると、嬉しそうににこりと屈託なく笑う。肩の上で切り揃えられた亜麻色の髪が、ふわりと揺れた。

「良かった、気付いたのね！」

まるで向けられた銃など目に見えていないような反応に、私は戸惑う。

「長いこと目を覚まさなかったから、心配してたのよ。とにかく、喉が渴いているんじゃないかと思って」

そう言って、手にした、ワインらしき瓶と陶製のカップが揃えられた木のトレーを私に差し出す。

けれど私はまだ警戒を解かない。一見、無害に見えるこの人物をまじまじと見つめる。

「あなた、誰？　ここはどこ？　私はなぜ、ここに連れて来られたの？」

テーブルなどないから、地面にそれを下ろして、女はゆっくりと答えた。

「わたしの名は、カヤ。ここは、古い採石場跡地の小屋。あなたがここにいる理由は、それよ」

「それ？」

カヤと名乗った女が示したのは、私の銃だった。

「分かるように答えて」

私は言葉に警戒を含めたまま、再び訊ねる。

「あなたにフランチ側にいてもらうと都合が悪いのよ、わたしたちにとってはね」

そこで、私はその声に聞き覚えがあることに気付いた。

あの晩、バルドに剣を突き付けていた女……！

「あなた、あの晩の……！」

ますます油断ならない状況に、私は銃を握り直す。

「お願い、怒るのは分かるわ。でも今は、わたしは剣を置いている。」

だからあなたも銃を置いてくれないかしら？ マティアスがあんなやり方であなたを連れて来たことは謝るわ。あの場から無事に逃げするには、そうするしかなかったのよ」

私は、少しの間だけ、無言で彼女を見据えていた。やがて、ゆっくりと、手を下ろす。とりあえず今は、相手が私を傷付ける気はないらしいと判断してのことだった。

銃口が完全に下を向くまでを慎重に目で追い、女は満足気に小さく顎を引いた。

「ありがとう。でも、結局、大変だったのよ。あなたのお仲間達に追いかけられちゃってね」

「バルドとセシルが？ 二人は無事なの！？」

「ええ、彼らもここにいますわ。大丈夫、怪我なんてないから。先に彼らと話をしようとしたけれど、あなたの無事な姿を見るまでは、^{かたく}と言って、頑なに会話すら拒んでる」

私は、扉に顔を向けた。

そう、二人も、ここにいるのね。

「なら、二人に会わせて。それから、その話とやらを聞くわ」

女、カヤは微笑んで頷いた。けれど、私を案内する前に、条件を出すことを忘れなかった。

「一つ、約束してくれるかしら？ 話を聞いた後にどうするかはあなたたちの自由。けれど、決してフランスの元にだけは戻らないでほしいの」

「なぜ、そんな条件を？ 目的は何？」

「わたしたちは、凄腕のガンナーエディを敵に回したくないだけよ。その理由だって単純、自分の命が大事。あなたに撃ち殺されたくないだけ。ただそれだけだわ」

それが昨日までの私なら、首を縦に振ることを拒んだはず。けれど、今の私には、再びあの最低男の元にわざわざ戻って依頼を完了させる気など、さすがになかった。

この力ヤとマティアスを信用しているわけではない。でも、それを約束することによって起こる問題は何も無いように思えた。

強いて気になることと言えば、数日を共に過ごしたアンネリーゼのこと。個人的な友達になったとか、そういうことはないけれど――彼女というのは仕事だったから――彼女にもしものことがあったとしたら、さすがに心穏やかというわけにはいかない。

マティアスが、私を私と知らずに洩らした言葉から察するに、その心配も杞憂きゆうに過ぎないような気もするけれど、全てを知るまでは慎重過ぎるくらいがちょうどいい。そもそもアンネリーゼは、マティアスを「知らない」と言っていたのだから。

私は暫くの間、じっと目の前の女を見つめた。彼女は、落ち着いた様子で、私の答えを辛抱強く待っている。その目は真っ直ぐで、濁りがない。

「なら、あなた達も約束して。アンネリーゼには一切、危害を加えないと」

私が出した交換条件に、力ヤは一瞬、呆気にとられたようだった。それから、さも可笑しい冗談おかを聞いたとでも言わんばかりに、満面に零れそうな笑みを必死に押し殺す。

「なんだ、そんなこと。もちろんだわ」

「それなら、私も約束する。絶対に、ス」
「す？」

ついうっかり「スケコマシ」と言いそうになって、言葉を呑み下した。一度咳払いをして、言い直す。

「絶対に、フランスの元には戻らない」

その名前を舌に乗せただけで全身に鳥肌が立ったのは、当然のことだと思う。

第17話

外に出ると、突き刺すように冷たい空気が肌を撫でた。思わず身震いして、腕を肩に回す。

いつまでもこの格好というのも実用的ではないし、肩も寒いから、すぐにでも着替えをしたい気分だった。

でもそう思ったところで、その換えの服も、そして何より弾丸を詰めたガンベルトをあの館に置いてきてしまっていることに気付いた。

と言うことは、今使えるのは、銃に残っている四発のみ。当面は、弾丸を無駄にしないように、慎重にならなければいけない。

前に行くカヤの背を追い、小屋を後にして、暫く押し黙ったまま歩く。

辺りは鬱蒼とした森のようだった。顔を上げると、正面に、かつて石を切り出していたのだらう高い崖が見える。あの小屋は、きつと石切職人達が道具を置いたり、寝泊りしていた小屋ね。

やがて前方に明るい空間が広がった。

木々が途切れた小さな広場のようなそこには、大きく火が焚かれていた。その傍らに座り、爆ぜる炎に見入っていた人物が私たちに気付く。

「起きたのか」

抑揚のない静かな声。それは、マティアスだった。
焚き付け用らしい細い木の枝を手にしたまま、身動ぎすることもなく私を見上げる。私も相手を睨み返す。暫し続く、視線でのぶつき合い。

「まあまあ、二人とも穏便に……って言うのも無理かもしれないけどね。お互いにお互いのせいで痛い思いしてるんだから」

カヤの仲裁に、マティアスは顔を再び燃え盛る火に向けた。よく見ると、その脇腹の辺りに血の痕が残っている。その位置から察するに、弾丸は深く身体を貫くことはなく、掠めた程度で済んだらしいということが分かった。

「二人はどこ？」

私は、何よりもまず先にそれを口にした。この場にいるのは、マティアスだけだった。

それに答える代わりに、カヤがマティアスに軽く頷いて見せる。

「今、連れてくるわ」

マティアスが無言のまま腰を上げ、木々の間へと姿を消した後、カヤが私を振り返った。

「そんな顔しないで。心配しないで、さっき言った通りに彼らは無事だから。あなたを連れて逃げられると困るから、別の場所にいてもらっただけよ。見張り付きだけどね」

微笑み、私を火の傍へと手招きする。けれど私はその場に立ったまま、マティアスが去った暗闇を見据えて待った。

大した時間にもかかわらずに、複数の足音と、下生えを分ける音が辺りに響いた。先頭にいたのは、見たことのない男だった。

そして、その背後には。

「エディ！」

「良かった、心配したんですよ！」

カヤの言葉の通りに、怪我もなく元気なセシルとバルドが現れた。駆け寄ろうとして、足が、今はもうだいぶ皺くちゃになったスカートに阻まれる。咄嗟に両腕に邪魔なそれを抱え込もうと身を屈めるけれど、それは無駄だった。私が足を前に出すよりも早く、二人が私の元へと駆けつけた。

「無事で良かった！　どこか痛むところは？　酷い扱いをされたりは？」

バルドは早口に訊ねながらも、すぐに一步下がって、私の頭から爪先まで怪我の有無をチェックする。相変わらずのその様子に、私はほんの少しだけ肩の力が抜けて、笑顔を作って見せた。

「私は大丈夫よ、そっちこそ大丈夫だったの？」

二人は、攫われた私を追いかけたと聞いた。その途中で、何かあった可能性も十分に考えられる。大人しく捕まるような二人じゃないもの。

まるで私の心を読んだかのように、セシルが答える。

「こっちも見ての通り元気だ。エディを盾にされちゃ、下手に撃つわけにもいなくてさ。仕方ないから、こいつらの言う通りに従った」

ああ、なるほど。私は意識がない間、マティアス達にとって有利なように最大限に利用されていたってことね。

そう思った途端に、再びマティアス達に対する不快な感情が心の中で頭をもたげた。けれどそれ以上に、迂闊なミスで仲間の足を引っ張った自分に腹が立った。

「そろそろいいかしら？」

カヤの声に、私たちは揃って彼女を振り返る。火の傍には今、カヤとマティアス、そしてもう一人の男が集まっている。

「全員揃ったところで、こちらの話を聞いてもらいたいんだけど、構わないわね？」

私はバルドとセシルに、目で確認をする。二人も、躊躇いがちにではあるけれど、頷いた。

「いいわ」

短いけれど、はつきりとした肯定の言葉に、カヤは満足気に微笑む。マティアスともう一人は表情を微塵も崩すことなく、ただじつと私たちを見据えていた。

「まずは、わたしたちのことから」

カヤは言いながら、自分の仲間である二人を順に示す。

「マティアスは、知ってるわね。こっちはハンス」

ハンスと呼ばれたその青年は、三人の中では一番年上のように見えた。相変わらず無言ではあるけれど、マティアスのように敵意や警戒を露骨に曝け出しているわけじゃない。ただ、感情に流されずに冷静を保ち、私たちを正確な判断で見極めようとしている。そんな様子だった。

「わたしたちは、街から街へと、自分達の芸を見せて周ることを仕事にしているの。マティアスはナイフ投げ、ハンスはフィドルの演奏、そしてわたしは剣舞」

全く思いもなかった話に、私は瞬きをする。

えっと、フィドルって確か、弓で弾く弦楽器よね。いつだったか、街の酒場で吟遊詩人が弾いているのを見たことがあったっけ。って、それはさておき。

「ナイフ投げに、剣舞？」

私は、気になったそれらを口にした。

「そう。わたしたちの技は、観客に見せるためのもの。だから、それを人に向けたことはなかった。あの晩を除いてね」

「ちょ、ちよつと待って。えーと、要は、あなた達は別に戦いを仕事にしてる剣士とかじゃなくて、むしろそれとは無縁な旅芸人ってこと？」

「まあ、一言で言えば、そうだな。けどあの時は、仕方なかった。どうしてもあんたから銃を奪っておきたかった」

相変わらず不機嫌そうな表情でマティアスが答える。

「私から銃を？ それは、自分達が撃たれないように？」

カヤはそう言っていた。私に撃たれたくない、だから、あのスケコマシの元には戻らないで欲しい、と。

「そうだ。フラッツが、こちらの邪魔をするために凄腕のガンナーを雇ったと聞いた。そんな相手が四六時中アンの傍にいるんじゃ、彼女と話すことすらできない。だから、あんたから銃を奪うことを考えた。もう一人、ガンナーが仲間にいるとは知らなかったけどな」

自分のことを指したその言葉に、セシルは眉間に皺を寄せて、首を傾げた。

「そもそも彼女を攫って、どうする気だったんだよ？ 有名な歌姫を、仲間に引き入れようってことか？」

これまでの話の流れだと、そういうことならすんなりと納得がい
く。

彼らは、戦うことを仕事としているわけじゃない、そして私たち
を傷付ける気などなかった。これでバルドが危険を一切感じなかつ
たということにも説明がつく。アンネリーゼを狙ったのも、有名な
歌姫を手に入れるため——そう考えれば確かに、これ以上ないほど
完璧につじつまが合う。

けれど、私はマティアスの苦痛に満ちたあの言葉を聞いている。
そんな単純なことではないはずだわ。

セシルの問いにカヤは、悲しみとも怒りとも取れる複雑な表情を
浮かべた。

「たとえ仲間にした相手がいなくても、そんな強引なことはい
ないわ。それにアン……アンネリーゼは、元からわたしたちの仲間
だったのよ。あの娘は、殺された姉の復讐をしようとしている。そ
んな馬鹿なことを止めさせたいの」

第18話（前書き）

そろそろ派手に暴れたくなってきたのですが、もう少し、シリ
アス展開続きます。

なおかつ今回は残酷ネタ有りですので、苦手な方はご注意下さい。
相変わらず人として問題有りなネタに転ぶ転ぶ（汗）

第18話

「復讐？ 殺されたつてのは、ス……えっと、フランスに？」

更に予想外な話の展開に、セシルが再び訊ねた。その声には、驚きが含まれている。

確かにとんでもない男ではあるけれど、まさか人を殺すような人間とまでは、私もさすがに考えてはいなかった。

セシルに答えたのは、マティアスだった。

「手を下したのは、奴じゃないけどな。……異端狩りの伝説を知ってるか？」

「異端狩り？」

聞き慣れないその言葉を、私は反芻^{はんすう}する。再びマティアスが説明をする前に、青ざめた表情のバルドが、呻くように声を絞り出した。

「人と違う能力を持つ人間を異端者と呼び、危険視し、殺害する。かつて大昔に行われた、差別的な殺人です。今ではそれは古い言い伝えとしか思っていない人も多いようですが、実際に起こった惨劇です」

まるで自分で見たかのようなバルドの言い方に、少ばかり怪訝な表情をしながら、マティアスは続けた。

「アンの姉エルゼには、弱いものだったが、人と違う能力があったんだ。伝説で、魔法とか魔導とか言われているようなものに近いのかもしれない」

私はそこで、意識せずにバルドに目を向けていた。セシルもそう。私たちにはもうすっかり当たり前になっているバルドの能力。あまりに馴染みすぎていて、それがどんなに珍しく、そしてどれほど貴重な存在であるかを、ついすっかり忘れてしまっていた。

私だって、実際にこの目でその能力を見るまでは、魔法なんてものは伝説とか、お伽噺ときばなしの世界のものでしかないと信じていたということ、今更ながらに思い出す。

まさか目の前にその伝説の存在がいるとは知る由もなく、カヤが継いだ。

「その能力を活かし、エルゼは占い師をやっていたわ。妹のアンにも、多少なりともその力があるのかもしれないわね。彼女の歌は、不思議なほどに人を惹き付けるの」

——不思議なほどに人を惹き付ける。

その言葉を、私は唇の動きだけで繰り返し、囁いた。瞬間、これまでに霧がかかったように不明瞭だったことが唐突に、形を帯びた、確かなものとなる。

どんな歌人うたびとも適わないアンネリーゼのあの歌声。

バルドが彼女に抱いたという、彼曰く「全身の血が泡立つような」感覚。

そして、バルドとアンネリーゼが、どこかお互いを意識している様子だったのも。

それはつまり、二人が「同じ」だったから？

全ては、彼女の持つ能力の影響だったってこと……？

「その能力を理由に、フ란ツがアンネリーゼの姉を？」

バルドが、硬い声音で問う。

この場の誰にとつても気持ちのいい話ではないけれど、特にバルドにとつては辛いものだろうということは、想像に難くない。

一度、大きな溜息を吐いてから、カヤが憂いを含んだ瞳を細めた。

「そう。まさか、あんなことになるとは思ひもなかったわ。あれはまだアンもマティアスもほんの子供だった頃のこと。アンの姉のエルゼは、そうね、今のあなたくらいの年齢だったかしら。アンと同じく、美人だったわ」

そう言つて、セシルを見て微笑む。それに対しセシルは、どことなく居心地が悪そうに軽く身動きみじろしたけれど、真つ直ぐにカヤを見返して続きを待った。

「フ란ツも、その頃はまだ行動も派手ではなくて、少しはマトモに見えたものよ。その頃の私たちは、他の旅芸人たちの元で働いていたの。ハンスも私もマティアス達よりは年上だけど、まだ二十にも満たなかったからね。その一座が、あの街に暫く滞在することになって、間もなくエルゼとフ란ツは出会い、すぐにお互いを想うようになったわ」

それつて、スケコマシにしてみたら遊びよね？　と思つたけれど、口には出さないで、頷くだけにした。けれど、私たちの表情にその疑問が大きく浮き出ていたらしく、カヤが苦笑する。

「少なくとも、エルゼにとつては本気の恋だったわ。フ란ツも、今よりは若いぶん、純真だった部分も少しはあるんじゃないかしら？」

カヤは「少しは」という部分を強調したけれど、セシルが本気で嫌な顔をし「信じられねえんだけど」と呟いた。

「そうね、確かに、今のフ란ツからしたら、信じられない話ね。でも、二人は本当に結婚の約束まで交わしたのよ。まだお互いに大人になりかけの年齢で、冷静な判断ではなかったと思うけど。でも恋愛ってそういうものだわ。周りの人間も、自分たちを取り巻く状況も何もかもを忘れてしまう。それは仕方のないこと。誰にも責められないわ。だけど」

カヤは、俯いて唇を噛む。私たちは誰も身動きもせず、彼女が再び話し始めるのを待つ。火の爆^はぜる音が、夜空の下に響いた。

「フ란ツの行動が、彼の父親の逆鱗^{げきりん}に触れてね。大騒ぎになったのよ。彼の一族は、自分たちに流れる王族の血を、何よりも自慢にしている。それがこの馬の骨とも分らない娘と、ってね。そこでフ란ツは彼女を庇うどころか、とんでもない嘘をついた。自分に非はない。エルゼが自分に、彼女を想うように呪^{まじな}いをかけた、と」

「なんて嘘を……他人の気持ちを操る呪文なんて、聞いたこともない！」

たまらずバルドが声を上げる。

「えーっと……まさかその言い分、通っちゃったの？」

恐る恐る、私も訊ねた。エルゼのその後からしたら、この質問がどんなに馬鹿げているかは承知の上だったけど、それでも訊かずにはいられなかった。あまりにも、その、子供じみた言い訳過ぎて。

「さあね。もしかしたらそうかもしれないし、そうじゃないかもし

れない。けれど、その理由を彼らは上手いこと利用した。一族にとっての醜聞を払拭するには、全てを彼女に押し付けられれば、それで良かった」

カヤの目が、険容に細められる。黙ったまま俯いているマティアスの肩が、震えたように見えた。まだ一度も口を開いていないハンスは、静かに目を伏せた。

「エルゼが、人と違う能力を持っていたことが、彼女にとって仇^{あだ}となってしまった。初めは単に婚約を破棄するための理由だったそれが、最終的には彼女の命まで奪うことになった。街全体に異端狩りの伝説が広まって、彼女の何を何も知らない人々までが、彼女を罵り、憎んだ。危険を感じた私たちは、街を出ようとしたけど、遅かった。あと少しというところで追いつかれ、エルゼは――」

カヤが声を詰まらせた。その時のことを思い出したんだと思う、瞼を震わせている。

「カヤ、もういい、おれが代わる」

マティアスがそつと彼女を労わる。カヤは小さな声でごめんなさい、と呟き、顔を覆った。

「おれは、まだ子供だったけど、あの時のことはまるで昨日のように覚えてる。エルゼは、連れ戻された。そして殺された。伝説にある通りのやり方で」

マティアスの最後の言葉と同時に、バルドが呻いて、苦しげに頂^{なだ}垂れた。私もセシルも、それが何を意味するのかまでは分からず、バルドを見、それから再びマティアスを見る。

バルドが俯いたまま、声を絞り出した。

「伝説では、異端者を完全に消滅させるには、その身を炎で焼くし

かない、とされていますね」

目を見張った私とセシルが何かを言うより先に、マティアスが冷たい口調で言い放つ。

「ああ、その通り。だから彼女は焼き殺されたよ、生きたままね」

第19話

風が吹いて、空気を含んだ炎が膨れ上がり、弾けた。気付くと、私はそれから身体を引き離すように、前に出していた足を胸に引き寄せていた。

「焼き殺された……？ まさか、そんな」

「作り話だと思うのか？ 俺たちがそんなことをして、どんな得がある？」

マティアスの相変わらず怒ったような口調に、私は何も返せずに、一度は口を閉じた。でも少し考えて、まだいくつかの疑問が残っていることを思い出す。

「でも……でも、アンネリーゼは、あんたを知らないって言うってたわ。あの劇場に来る前は、その日暮らしの生活をしていたって」

少し落ち着きを取り戻したらしいカヤが、ゆっくりと首を振った。

「アンは、突然何も言わずにわたしたちの元を離れてフランスのところへ行つたの。復讐のために、全てを投げ打つつもりなのよ。だからきつと、知らない振りをしてるんでしょ。あの娘が、マティアスを知らないなんて馬鹿げてる。二人は幼馴染みなんだから」

「過去の話だつて、半分は嘘をついてるんだろうな。確かにおれたちは家も持たずに、街から街へ転々としている。けど、そんなに悪い暮らしってわけじゃない。ちゃんと食べていくくらいは稼ぐ腕を持つてる。それに関しちゃ、あんた達雇われガンナーだって同じだろう？」

二人の答えは、説得力があつた。アンネリーゼとカヤ達のどちらかが嘘をついているのだとしたら、私から見たら、どうしたってアンネリーゼのほうだと思えない。

結婚を間近にひかえながらも、冷め切つた様子の二人。

私たちが依頼を受ける時にマティアスのことを訊ねた時も、さながら暗記している舞台の台本を口にするように、完璧に答えてみせたアンネリーゼ。

あれは、本当に自分の中であらかじめ用意しておいた作り話だったからこそ、淀みなく出せた答えなのかもしれない。

そう考えると、「フ란ツが自分に生きる場所を与えてくれた」と言う科白セリフだつて、単なる口から出任せの嘘ではなく、彼女なりの皮肉だったようにさえ感じる。だつて、あの男がいなければ、確かに彼女はあの場にはいなかったのだから。

そして、彼女は続けた。「私にできることをするだけ」と。あの時、私はアンネリーゼのことを、自分を貧しさから救つた相手を中心に想う健気な少女だと、そう思った。

でも、今は――。

一度、その場の全員を見やる。バルドとセシルも、困惑気味に、私に視線を返す。そして、カヤとマティアス、それから、ハンス。彼らが嘘をついているとは、思えない。けど、それが絶対に絶対つて言い切れる？　だつて、証拠がないのだから。

だから私は、それが真実でもなんでもないと知っていながら、あえて口にした。彼らを試すように。

「アンネリーゼは、フ란ツを愛してると言っていたわ」

「——ッ、ふざけるな！」

途端、マティアスの怒りが爆発する。

「たとえ冗談でも、そんな話は聞きたくない！」

叫びながら、立ち上がり、私を上から睨み付ける。そのあまりの剣幕にセシルが反射的に身を引き、バルドは、マティアスが私に手を出すと心配したらしく、慌てて腰を浮かせた。

私はただ真っ直ぐに、目の前の人物の怒りを受け止める。固く握り締められた拳が、小刻みに震えていた。

「そうね、ごめんなさい。今の言葉は取り消すわ」

私がそつと宥めるように言うと、マティアスは顔を顰め、そのまま踵を返した。納まらない怒りを全身に漂わせ、どこかへと歩み去る。

カヤもハンスも、止めることはしなかった。ただ、責めるような表情を私に投げ掛けただけ。

「マティアスは、アンネリーゼをただの幼馴染とは思っていないの」

「ええ、あの様子を見たら分かるわ」

私は頷く。

これで彼らが真実を話しているということを認めざるを得なかった。あの怒り方は、嘘じゃない。演技をしている人間が、あんな風に身体を小刻みに震わせて憤ることまでできるはずがない。

しばらくの間、沈黙がその場に落ちる。やっとでそれを破ったのは、セシルだった。

「それを俺達に話して、どうしろと言うんだ？」

「彼女にはもうお願いしたけれど、フランスの元には戻らないで」

「そりゃ、こんなことを知った以上は当たり前だけどさ」

それ以前にも当たり前だわ。

カヤたちの話に比べれば、客観的に見たら小さなことかもしれないけど、私だってあのスケコマシには不快な思いをさせられているもの。仮に大金積んで頼まれたって、戻る気なんかさらさらない。

アンネリーゼの姉のことは心の底から気の毒だと思っし、しこりとなって記憶に残りそうだけど。でもとりあえず、この件とはもう私たちは無関係ね。

そう思い、あのスケコマシから解放されたことには安堵した、まさにその瞬間。カヤから意外な科白セリフが飛び出した。

「それから、もうひとつ。わたしたちの依頼を受けてくれないかしら、ガンナーエディ。アンを連れ戻すのを手伝って欲しいの」

第19話（後書き）

細かい伏線回収に手こずっている最近です
o r z

第20話

「で、どうすんだよ？」

複雑な表情で髪を掻きながら、セシルが訊ねる。私たちは今、あの傾きかけた小屋に三人で集まっている。

「まさかこんなことになるとは思いませんでしたですね」

アンネリーゼの姉のことを思ったのか、バルドが眉を曇らせる。

私も、カヤたちの話を、頭の中で繰り返す。

「なぜ、アンネリーゼの正当とも言える復讐を止めるのか」というセシルの疑問に、カヤはこう答えた。

自分たちはアンネリーゼを子供の頃からよく知っている。彼女は、たとえ相手がああフランツだとしても、人を殺せるような人間じゃない。きっと、何か他の復讐を考えている。けれど、それが何かまでは分からない、と。

それに、姉のエルゼがあのような殺され方をしている以上、アンネリーゼ自身にもいつ、そのような危険が降りかかると限らない。そしてそうなる前に、なんとしてもあの街から彼女を遠ざけたい。

カヤは、そう言った。

ずっと長いこと沈黙を守っていたハンスも、初めて口を開き「頼む」と頭を下げた。

「始めに何事もなく依頼を受けていたら、すぐにでも二つ返事をするところなんだけど」

私は唇を引き結んだ。

そう、もしあのスケコマシの依頼の前に、カヤたちの依頼を受けていたら。絶対に、こんな複雑な心境にはならなかった。

「でも、アンネリーゼは、私たちに嘘をついていた」

それを思うと、すぐには首を縦に振ることができなかった。

嘘をつかれていたから腹癒せに助けたくないとか、そういう子供じみた理由じゃない。依頼を受けるということは、相手との信頼関係も大事だと、私は思っている。

でも彼女は、そうではなかった。自分の目的のために、私たちに嘘をつき、自分を心配する仲間のことさえも「知らない」と言った。

そんな彼女に良い感情を持てというほうが無理というもの。そもそも彼女は、自らの意思であの街に、フランツの元にいる。仲間であるマティアスやカヤたちはともかく、私たちまで、そこまで手を出すべきなのかどうか、正直分からなかった。

……やっぱり、ここは断るべきかもしれない。

そう決心しかけたその時、外からマティアスの声がした。私を呼んでいるらしい。

「さっきのことで、文句を言い足りなかったんじゃないか？」

半ば冗談、半ば本気とも取れる口調で言い、セシルは苦笑いをする。あの激しい怒りの様子からしたら、それも有り得る話かもしれない。私は肩をすくめる。

「どうしましょうか？」

「どうするも何も、出てくしかないわ」

どこことなく心配顔の二人をその場に残して、外に出る。小屋の前に、マティアスは真っ直ぐに立っていた。頭を毅然と振り立て、足で地面を押すように、堂々とした姿勢でこちらを睨んでいる。

「何か言いたいことでも？」

私は、真っ正面からその鋭い視線を受け止める。

このマティアスとは、始めからお互いにお互いを敵視していて、その緊張が抜けることがなかった。彼に非はないと知った今でさえも。そのせいで、おのずと叩きつけるような言い方をしてしまう。

少しばかり喧嘩腰とも言える私の問いに、マティアスは、髪と同じ赤の眉をいつそう吊り上げた。予想通り、その口から辛辣な言葉が飛び出すのだらうと、私は身構える。

なのに。

「ちよっ……、何するの！？」

私は、驚きのあまり声を上げていた。マティアスは、その場に両膝と両手を着いて、私に深々と頭を下げていた。

「頼む、力を貸してくれ！ これまでの非礼は謝る、だからアンを助けてくれ」

「やめて、そんなことしないでよ！」

私が大声を上げたものだから、慌ててバルドとセシルも駆け出して来た。地面に額を擦りこすそうなほどに頭を下げているマティアスを見、啞然とする。

「エディ、ここまでさせるって、何やったんだ？」

「いつの間にか弱みでも握ってたんですか？」

「や、違う！　って言うか、なんでそうなるのよ!？」

ひたすら頭を下げ続けるマティアスの前に、私も身を屈めた。

「お願いだから立って、変な誤解されちゃってるから!」

私の懇願にも、彼は顔をわずかに上げただけだった。

「頼む、何をすれば協力してくれる?」

そのあまりにも真剣な様子に、バルドもセシルも、さすがに軽口をたたくのを止めて眉根を寄せた。頑として動かない彼に困り果て、私は、二人に助けを求めるように目をやる。彼らも、暫く言^{いわ}うべき言葉を探しているようだった。やっとのことで、バルドが首を傾げながら訊ねた。

「でも、どうして助けが必要なんです?　アンネリーゼの護衛はもういない。なら、あなたたちだけでも、どうにかなるんじゃないですか?」

そうよ、その通りだわ!

そのもつともな疑問に、私は何度も大きく頷く。

「あいつ、フランツが、もし他の人間を雇ったら?　あんたたちを雇って警戒していたほどだ、すんなりアンを手放すとは思えない。それに、おれたちは……」

そこでマティアスは、一瞬、言葉を濁した。

「おれたちは人にナイフや剣を向ける時、情けない話だが、手が震えている。だから、あんたたちの力を貸して欲しい」

——ああ、そうか。

そこで私は、そのことに気付いた。

彼らは、刃物を扱う腕は確かだとしても、人を傷付ける覚悟まで
はできないでいる。それは、本気で武器を交える場では、何よりも
命取りになりかねないこと。戦いには、技術も必要だけど、それ以
上に心の強さ……人の命を背負う覚悟が必要だから。

黙って唇を噛み締めた私を、マティアスの真剣な目が捉えて離さ
ない。それから逃れるようにして肩越しに振り返ると、バルドが少
し逡巡した後に、でもはつきりと頷いて見せた。そして、セシルも
……わかってる。ここまでされたら、私だって断りきれない。我
ながら甘いと思うけど。それに、こんなに自分を思っ相手がいる
のに知らないふりをしているアンネリーゼにも、一言言ってやりた
い気分だった。

ああもう、これでスケコマシとは縁が切れると思ったんだけどな
あ。あと少し、辛抱するしかないみたい。

私は内心でぼやきつつ、いまだ地面に低く跪つれまづいたままのマティア
スに向き直った。

「分かった、手を貸すわ。だから」

早く立って、と言葉を続ける前に、セシルがぼそりと呟いた。

「エディのことだから、交換条件は『三回まわってワン』とか言い
そうだな」

「——さ、三……っ!？」

さすがにそれには一瞬で固まったマティアスを前に、私はゆっく
りと背後を振り返った。

「セシル」

いつもの如く蹴られることを想定したんだと思う。バルドの背後

にちゃっかりと下がっていたセシルは、私が予想に反して落ち着いていることに訝^{いぶか}しげな表情をする。

「な、なんだよ？」

傍^{はた}から見てもおかしいくらいにびくびくしている彼に、私は破顔一笑してみせた。

「安心して、ドレスが邪魔で足が上がらないから。だから代わりにほら、三回まわってワン！」

第21話

街は、お祭り騒ぎだった。建物の至るところに花やりボンなどが飾りたてられ、お店というお店は軒先にテーブルをずらりと並べている。その上にはきつと、お祝いのお菓子類や品物が溢れているのだと思う、道行く人々が足を止めて、身を乗り出し、覗きこむ。

いつもはキレイに整えられている通りも、数え切れないほどの人々でごった返し、まるで朝の市場のような賑わいを見せていた。

「うわ、なんかすっげえ騒ぎだな」

街全体を見渡せる高台に立ち、セシルが額に手を翳す。街の端から端までを、まんべんなく眺めてから、満足したように顎を引いた。「街で一番有名な二人の結婚式だもの。近隣からの見物客だって相当な数いるんじゃない？」

私は、カヤに借りた服の、自分には若干長い袖を丁寧に折り畳みながら言う。

「結局、替え玉は誰にしたんでしょうね」

言いながらも、そのあたりは大して重要じゃないと分かっているバルドは、自分たちが数日寝泊まりしていた大きな館を見やった。赤い屋根が、一際目立っている。

私たちは昨夜、偽装結婚式のことをマティアスたちに説明した。その間、アンネリーゼはおそらく、どこかに一人身を隠しているはず。一番考えられる可能性としては、あの館か、もしくは劇場の部屋の一つか――。

まさか私たちがアンネリーゼの誘拐犯側に付いたとまでは、あのスケコマシだって考えもしないと思う。彼女の護衛を新たに雇って

いたとしても、昨日の今日だもの、そんなに手こずるような相手ではないだろうというのが、私たちの予想だった。

「いつ動く？」

背後から、緊張した声音で問われた。振り返ると、身を硬くしたマティアスと目が合う。

「まだ当分先よ。式が始まってからだわ。一行が、式場に向かって少ししてからが一番いいと思う」

私が淡々と説明をすると、彼は異議を唱えることなく素直に頷いた。

昨夜のあの一件の後、まるで急に角が取れたかのように態度が軟化したマティアスに、私は少しばかり拍子抜けした気分だった。彼曰く、あんなにも警戒していたのは、私たちが義務としてではなく、気持ちまでもフランク側に付いている人間だと思っていたかららしい。

それを聞いた私たちは、当然、嵐にも勝る勢いで否定した。「誰があんなスケコマシに！」と眉を吊り上げて、怒りすら露わに叫んだら、マティアスは一瞬目を丸くした後、初めて笑みを洩らした。

「まだ時間はかなりある。休める時には、ゆっくり休んでおくほうがいいわよ」

その場に漂う緊張を解くように、私はゆっくりとした口調で、皆を促す。

マティアスたちは高台から少し離れ、開けた場所にまとまって腰を下ろした。そこには、荷を積んだ馬を繋いである。

その鞍に括りつけた袋の中からパンとチーズ、そして飲み物が入った瓶を力ヤが取り出し、地面に広げたシヨールの上に並べた。ナイフで食べ物を手早く切り分け、薄く切ったチーズをパンに乗せる。

「あなたたちもどう？」

勧められ、ものすごく空腹だったことを思い出す。

「そうね、いただくわ」

三人の傍に、私たちも腰を下ろした。

しばし、無言でひたすら渡されたものを口に運ぶ。やがて、何を思ったか、急にセシルが一口大に千切ったパンを手に、ぽつりと呟いた。

「なあ、マティアスとアンネリーゼは、付き合ってるのか？」

その唐突な質問に、飲んでいた軽い麦酒^{エール}を盛大に噴き出したのは、当然のことながら、マティアスだった。

「ごほごほと咽^{むせ}る彼の背を、カヤがさする。マティアスは、何かを言おうとしているけれど、言葉を発する前に息が詰まるようで、すぐにまた大きく咳き込む。

そんな仲間の代わりに、ハンスが答える。

「いや、マティアスは、一度アンに振られている」

ものすごい真顔でさらりと。

「は、ハンス！」

やっとで落ち着いたマティアスが、抗議の声を上げた。その顔が赤いのは、決して咽^{むせ}たせいだけではないと思う。

その剣幕に、ハンスは「ああ」と何かに気付いたように瞬いた。それから、私たちに向き直る。

「すまない。ちゃんと説明をしないと、まるでマティアスが駄目男のように思えるな。アンは、マティアスを弟のようにしか思えないと言って断つ」

「だからそれ以上言うな―ッ！　って、なんでそれ知ってるんだよ

！？」

ハンスの科白セリフの最後は、顔を真っ赤にしたマティアスの絶叫に掻き消された。ハンスの胸座むなぐらを掴んで揺さぶるその光景に見覚えがあるような気がして、私が首を傾げた時。隣りでバルドが苦笑交じりに呟いた。

「どこか親近感わきますねえ」

そこで私は気付いた。

——そうか、セシルとバルドだわ！

自分達を客観的に見ているようで、思わず、私は頬を緩ませた。
「そうね」

和解するまでは、顔を合わせるたびにしかめ面で、やけに大人びて見えたマティアス。こうやって見ると、まだセシルと大して年齢差もないように思える。

そして、年齢は二十も半ばほどに見えるハンスは、落ち着いた物腰に、いかにも誠実そうな顔立ちをした人物だった。それだけに先ほどの科白セリフは、彼のイメージを大きく覆すものだった。

冗談なんて、これっぽっちも口にしない寡黙なタイプだと思っていただけだなあ。いや、彼にとっては冗談じゃなく、素なのかしらね？

——それにしても。まさか彼らと味方同士となつて、こうして食事を共にするようになるなんて、あの銃を奪われた夜には思いもしなかった。

手の中の麦酒エールを軽く揺らし、そこに広がった波紋に目を落としたところで、セシルが私を振り向く。目の前の騒ぎが、そもそも自分の質問のせいであることは、既にきれいさっぱり忘れていた様子だ

った。

「エディ、まだ時間があるなら、今のうちに銃を教えてくれないか？」

「え、どうして急に？」

私の当然の疑問に、セシルはちよつとだけ顔を歪めた。

「俺さ。エディが攫われた時、撃てなかったんだ。けど、エディの腕なら問題なく相手を足止めできていたと思う。結果としちゃ、まあ、今はこれで良かったけど。もし、あの時エディを攫ったのが、無法者みたいな奴らだったら？　そう思うと、撃てなかった自分が許せなくて」

そこで、心底悔しそうに俯く。こんなセシルを見るのは初めてで、私とバルドはお互いに言葉もなく顔を見合わせた。

「だから、教えて欲しい。俺、どんな厳しい指導でも頑張るから！」

その真剣な眼差しを、私は真っ直ぐに受け止めた。

いつもは冗談ばかり言っているセシルだけど、銃に関しては本気を見せる。そもそも彼が私たちと行動を共にするようになった理由が、それだった。彼は「銃の腕前で有名になりたい」と言った。

——　　「はすが、後には「私たち」といってと依頼がどっさりで食いつぱぐれない」とか言う、やたらと現実的、かつ地味なものにすりかわっていたような気もするけれど。

それはまあ、さておき。

「いいわ。じゃあ、一から教えるわよ」

真摯な気持ちでひしひしと伝わって、私は快諾した。

「おうよ！」

セシルは嬉々として顔を輝かせ、バルドも、「怪我をした時には任せて下さい」と微笑む。いや、別に、教えるだけだから、そこま

ではないけど。

私はおもむろに自分の銃を、腰のベルトから抜く。いつものガンベルトじゃなく、普通のベルトに挟んでいるだけだから、少し……いや、相当違和感があった。

けれどそれは微塵も顔に出さずに、セシルの目の高さに、手の中のリボルバーを掲げて見せる。

真剣な面持ちのまま、セシルは固唾を呑み、私の言葉を待つ。

「……まず最初に」

私が^{おこそ}厳かに口を開くと、セシルも口を引き結んで頷いた。私は、ゆっくりと続ける。

「これは、銃です!」

「あ、長くなりそうだから、そこんところは飛ばして」

次の瞬間、セシルの叫びが辺りに木霊したことは、言うまでもない。

第22話

豪華な、六頭立ての馬車が街中をゆつくりと進む。

道に沿って列をなした人々が、我先にと身を乗り出し、祝福を口々に叫ぶ。飾り立てられた白い馬車の窓からは、花婿も花嫁も、わずしか見えないはず。それでも時折大きな歓声が上がるところを見ると、中の二人のうちどちらかが、観衆に向かって手を振ったりしているのかもしれない。

「いよいよ始まりましたね、大掛かりな結婚式ごつこが」

人々の列からだいぶ離れた位置で、私たちは通り過ぎる馬車を見送る。セシルが馬車の後ろ姿に向かって冗談半分で「良い式を」と小さく手を振ると、近くにいた人もつられて手を振り上げていた。

「さあ、行くわよ」

私は連れの三人を促す。

この式が行われている最中に、私とバルドとセシル、それにマティアスがアンネリーゼを連れ出すという手はずになっている。カヤとハンスは、あの館に近い場所に馬を待機させる役として、今は別行動を取っていた。

「くそ、スケコマシの顔見えなかったよ」

セシルが悔しそうに、私の隣りで軽く舌打つ。

「見えなくていいじゃない、目の毒なもの。なんで見たいの？」

「だって、こんな大騒ぎの晴れ姿に、あの腫れた顔だぜ？ どんだけ違和感だろうと思って」

ニヤリと口角を持ち上げての科白に、私もその姿を想像して、思わず苦笑する。

きつと今頃は、私が思い切り殴った左目のあたりが、酷い青痣に

なっているはずだね。

「それは確かに、興味深いものがありますね」

バルドも神妙に頷く。ただ一人マティアスだけは話に付いてこれずに、首を傾げていた。

今日の主役達を乗せた馬車から遠ざかると共に、辺りの人影もまばらになってきた。私たちが目指しているのは、あの赤い屋根の館。その自分の部屋に彼女がいるのが一番自然だと思えての行動だった。ついでに、残して来た私のガンベルトと服も回収したいところ。

やがて前方に、三階建ての、漆喰で塗られた綺麗な館が姿を現す。見慣れたそれに、今は緊張が全身に走るのを感じる。

「さすがに今日はここも静かですね」

「そうね、いつもは人がたくさんいて、賑やかなのに。変な感じよね」

門から少しだけ離れた位置で、私たちは一度、足を止めた。お城じゃないから、門番がいるわけではない。けれど、さすがに堂々と門から入るのも、何となく気が引けた。

昨夜のあの騒ぎを、この人たちがどこまで知っているかは分からないけれど、できることなら誰にも会わずに用件を済ませたかった。

「裏口はこっちだ」

こちらの考えを敏感に察し、マティアスが身振りで誘導する。

「そう言えば、マティアスは一度忍び込んでいるんだっけな」

名を呼ばれ、マティアスは、セシルに首を振って見せた。否定の意味で。

「いいや、二度だ」

「二度？」

「ああ。一度は、人に見られそうになって引き返した。その時に、街中の二人を見かけて、後をこっそりカヤと追ったんだ。その後は、

知つての通りだ」

「ずっと後を追われていたなんて、気付かなかったわ」

あの夜のことは、はっきりと覚えている。あまりにも疲れた顔をしていた私を氣遣つて、バルドが私を気分転換に誘つたんだつた。

仕事から解放されて気が緩んでいたにしても、自分のあまりの鈍さに、情けなくなってくる。便利なバルドの危険予報について頼り過ぎていたということもあるけれど、それにしても普段からもう少し、周りに注意を払うべきかもしれない。

「けど、あの時はちょっと驚いたわよ。ものすごい冷めた目でこつちを見てるんだもの」

「仲が良いのか悪いのか、よく分からないなと思つてね。判断できずに、観察してた」

「ちょ、観察て！」

まるで動物扱いのその発言に、私の後ろでバルドも苦笑いをしてる。

「なんだよ、エディたち、二人きりになつてもいつもと変わらないんだな。どうせまた蹴つてたんだろ？」

「あと殴つてたっけな」

まさか誰かに見られているなんて思いもしなかったところをじっくりと見られていたという、この恥かしさつたら！ 穴があつたら入りたいって、こういうことかしらね。

「そ、それはともかく！ なんで二度目の時には、私の銃を持ち歩いていたの？」

話題を変えようと、私は質問をマティアスに投げ掛ける。それに

彼は、ああ、と軽く頷いた。

「アンを連れ戻せたら、それはどこかに、こっそり返しておこうと思ってたんだ。まさかアンだとばかり思っていた人物に撃たれるとは思ひもなかったけどね」

決して嫌味ではなく、マティアスは言って、苦笑いをして見せる。

昨夜、私はバルドに、彼の脇腹の傷を治すように頼んだ。それから、街に戻ってから絶対には絶対に人前でその力を使わないように、ともわずかに人と異なる能力があっただけの少女を躊躇^{ためら}いもなく殺した街だもの。もし、バルドの存在が知れ渡ってしまったら、また混乱に陥って、同じことを繰り返そうとするかもしれない。

仮に、万が一にそうなったとしても、絶対に私が相棒を守るつもりではいるけれど。そうだとしても無用な面倒事は、避けるに越したことはない。

いつものことながら、バルドの治癒の魔導を目の当たりにして驚いたマティアス達の意見も、私と同じものだった。

それにしても、と私は一人そつと溜め息を吐く。こんなに華やかで明るい雰囲気^{きふく}の街に、あんな血なまぐさい暗鬱^{あんうつ}な過去があるなんて、一体誰が想像するかしら？

「ここだ」

マティアスの短い一言に、私たちは揃って足を止めた。目の前にあったのは壁で、その少し上、人の頭よりも高い位置に、小さな窓がある。

ん？ あれ、この場所って、確か――。

数日この建物で寝起きをしていた私たちには、部屋の間取りが、

外からでも少しは予測できる。そのことに気付いたのは、私だけじゃなかった。

「あのさあ、ここって、アレだよな」

「他にも入口はいくつかあったはずですが」

渋る私たちに、マティアスは困ったように頭を掻く。

「いや、おれだってこんな所から入りたくなかったけどな。他は全て鍵がかかってるんだ」

暫し、一見は何の問題もない窓を無言で見上げる私たち四人。そこは、来る者拒まずといった風情に、これ見よがしに開け放たれている。

問題は、そこを通り抜けた先にある。もし、窓の下に誰かいたら？

だって、そこは――。

考えて、あからさまに狼狽した表情の私を庇うように、バルドが当然の疑問を口にする。

「けど、エデルトリダはどうするんです？ さすがに女性をここからは……」

「ああ、そう言えば、エディは女だったな、忘れてた。どっちにしても、エディの豪快な性格なら、これくらい平気だろう？」

マティアスの、さらりとした言い分に対しての、私の答えは。

「カヤに服を借りていたおかげで、私の足は、今日は自由だった」
とだけ言っておこうと思う。

第23話

「もういい、私は普通に正面から堂々と入る！」

半ばヤケになった私は一人さつさと踵を返して、足早に正面玄関へと向かう。

「待てよ、エディ！」

慌ててセシルたちが追って来たけれど、足は止めずに、目だけで応える。

「止めないで」

昨日のことだって、こっちらしたら正当防衛だったんだもの。後ろめたいことなんて一つもしてないんだから、初めからコソコソする必要なんてなかったんだわ！

私を引き止めるのかと思ったセシルから、意外な言葉が飛び出した。

「止めない。むしろ俺も連れてって」

それに間髪入れず、バルドが続く。

「わたしも一緒にしたいです」

そして、更にマティアスまで。

「正面から行けるなら、おれも是非お願いします」

かくして私たちは、男性用トイレの小窓などと言う、万が一にもそこで捕まったら情けない侵入経路は避け、堂々と玄関ホールに続く扉を潜ったのだった。

人の背丈の一・五倍はある扉を押すと、予想通りにあっさりと開く。

もしかしたら、新たな護衛がいるかもしれない。

それを予測し、念のため銃に手を掛けながら、足を踏み入れる。けれど、それは取り越し苦労に終わった。

吹き抜けになっていて広いホールは、がらんとして、耳が痛くなるような静寂に満ちていた。いつもは誰かが楽しそうにおしゃべりに興じているスツールも、忙しく使用人が行き来している階段も、人影ひとつ見当たらない。

まるで、ここに暮らしていた人々がそっくり消えてしまったかのような光景だった。

「もしかして全員が全員、式を見に行ってるの？」

「そういうことだな、きつと。こつちとしては動きやすくてちょうど良かったな」

私の呟きに、気楽な口調でセシルが相槌を打つ。バルドは、落着かなげに、辺りを何度も見回した。

マティアスは、私がいた部屋、つまりはアンネリーゼがいる可能性のある部屋を目指し、無言で進んだ。その横顔は、これまでになく硬く強張っている。

やがて、誰に会うこともなく、その前に辿り着く。

……あまりにもすんなりと事が進み過ぎる。アンネリーゼはここにはいないのかもしれない。

ゆっくりと扉を押す。そこは、やはりと言うべきか、屋敷と同様にからっぽだった。隣りで、マティアスが明らかに落胆の色を浮かべる。

「そうがっかりしないでよ。まだ探す場所はいくらでもあるわ」

言いながら、部屋に素早く視線を走らせる。

私が使っていたベッドの上に、それはあった。使用人が整えておいてくれたのかもしれない私の服と、それにガンベルト。

ここで着替えて行く時間があるか一瞬だけ悩み、ものの数分なら問題ないはず、と結論を出す。着るのに、そんなに時間のかかるような服じゃないもの。

私はくるりと軽やかに、背後の三人を振り返る。

「すぐに済むから、ちょっとだけ待ってて」

扉を閉めると同時に、私は素早く服を取り替えた。仕上げに、ガンベルトを回し、銃を納める。腰にかかるその重みに私はひとり、ほっと溜息を吐いた。これで換えの弾丸の心配もない。

カヤから借りていた服は、軽い素材のワンピースだった。重さは気にならない程度だとしても、腕に抱えていたら、何かあった時にすぐに銃を抜けずに困るはず。

ほんの少しだけ考えた後、ベッドの下に、自分の鞆も置きっぱなしだったことを思い出す。貴重な物はバルドに任せてあったから、生活に必要な、雑多な物をいくつか詰めただけの軽い鞆だった。私はそれを引っ張り出し、ざっと中身に目を通した。

一番上にあったのは、^{しゅう}栗を挟んだ読みかけの小説。少しでも軽くするためにそれを置いてゆこうかとも思ったけれど、結局その上にカヤの服を加え、鞆を肩にかける。

「ありがとうございます、行きましょう」

廊下で待つ連れに礼を言い、私たちは再び行動を開始する。揃って、慎重に館内の部屋という部屋を風潰しに探す。けれど、それは無駄だった。

一周を終え、一階のホールに戻る。ここを去る前に、もう一度耳

を澄ますけれど、やはり物音ひとつしない。

「やっぱり劇場かしら」

無意識に、私の正面に立っていたバルドの顔を見上げると、彼は私の頭上を注視していた。咄嗟とっさに身体を捻り、彼の視線の先、二階の廊下を見やる。けれど、そこには人影ひとつない。

でも、それでも——！

「誰かいるのね？」

囁いて、肩の鞆を静かに下ろし、私は腰に手を伸ばす。

「ずっと、誰かの気配を感じてました。それも複数の」

ガチリ、と撃鉄ハンマーを起こす、二つの重い音が響く。私たちが警戒態勢に入っただのを見て、マティアスも息を殺している。

暫し、沈黙が落ちる。誰も動かず、一点を見据える。それを破ったのは、バルドの警告を発する声と——それに重なった、空気を裂く荒々しい音だった。

第24話

「マティアス！」

バルドが、彼に危険を告げる。途端に、耳を劈くような轟音が炸裂する。まるで落雷でもあったかのような地響きに、身体が小刻みに揺れるのを感じた。

気づいた時には、マティアスが立っていた場所の後方に、斧が深々と食い込んでいた。木製のスツールが、見るも無残な姿に成り果てている。

バルドの声がなければ、それは確実にマティアスの命をあつさりと奪っていただろうと思うと、背中を冷たいものが伝った。

「……いっつ」

咄嗟にその一撃を回避したものの、勢い余って床にしたたかに倒れこんだ彼が呻いた。

「マティアス、大丈夫!？」

視線は二階廊下を捉えながら、私は早口に確認する。

「ああ、生きてるよ。こんなごつい斧を投げるなんて、正気の沙汰じゃない」

ぼやく余裕があるということは、問題ないってことね。

私は心底ほつとして、そんな場合ではないけれど、淡く微笑んだ。

「ほんとに随分と手荒な歓迎してくれるわね。いい加減、出て来たら?。」

斧が投げられた方向、吹き抜けの上部に広がる二階の廊下を睨み

付ける。やがてゆつくりと、大柄の男が現れた。

がたいは良いけれど、決して無骨というわけではない。それどころか、どこか洗練された、上流階級の知識人のような雰囲気さえ漂わせている。巨大な斧を飛ばすほどの人間と言ったらもつとこう、熊みtainな、髭だらけで筋肉質なタイプかと思っただけだ。

呆氣にとられた私に反し、その姿を見たバルドは、鋭く息を呑んだ。

「あれは……アナスタージウス！ 金貨三百枚の賞金をかけられている連続殺人鬼です！」

「って、え、アナ……？ なによそれ、なんの呪文？」

一度では覚えられそうにない名前に、私とセシルは僅かに眉間に皺を寄せただけだったけど、マティアスはその難解な名前よりも殺人鬼という単語に青ざめて、小さく喉を鳴らした。

「どうしてそんな奴がここにいるんだ？」

私は銃を強く握り締めたまま、真っ直ぐにそいつの顔を見上げる。視線が重なると、アナ何とかは、唇の端を引き上げた。

「そっちこそ、どうしてここにいます？ オレは、ちゃんと依頼を受けて、その義務を果たしているだけだ。劇場支配人の息子殿から直々に、歌姫様の護衛」

「ちょ、マジで！？ あのスケコマシ、ほんと馬鹿じゃねえの！？」

アナ何とかが最後までいい終わらないうちに、セシルが仰天したかのように叫んだ。その隣りで、バルドも呆れたように額に手を置き、天を仰ぐ。

自分の科白^{セリフ}を遮られ、一瞬間をしかめたアナ何とかだったけど、

すぐに気を取り直して、尊大な口調で続ける。

「世間の風当たりの強いオレ達を親切にも雇ってくれた依頼人を、悪く言わないで欲しいものだな」

皮肉たつぷりの口調で、言っている内容とは裏腹に、感謝とかいった殊勝な感情のかけらも籠っていない。

「オレ達は、銀貨十枚で」

「はあ！？ 何そのお手頃価格ッ！ あんた、依頼の相場も知らないの？ 自分の首に掛けられてる懸賞金の額からも、ちよつとは考えてみなさいよ！」

その数字に耳を疑い、口を挟んだのは、今度は私だった。

「……お前ら、最後まで話を聞け」

ここからじゃ見えないけど、もしかしたら、こめかみ辺りがひくついているのかもしれない。声に苛立ちが表れている。

「いいか、オレ達は、たった銀貨十枚なんて舐められた額で、敢えて依頼を受けた。重要なのは、そんなはした金じゃない。預けられたのが、それ以上の値打ちのある娘だということだ」

「……！」

アナ——もう面倒だから、アナと省略——の言わんとしていることを察して、私たちに、再び緊張が走る。

「アンネリーゼに何をしたの！？ 彼女はどこ！」

「何もしちゃいないさ。これからちよつとばかり一緒に来てもらって、あの依頼人からむしり取れるだけ取ってやろうとは思っているけどな」

要は、依頼を受けた上であの馬鹿を裏切り、アンネリーゼを人質

に身代金をせしめようって魂胆なわけ！？

「なら、彼女には手は出さないのね？」

「オレは男を傷付けるのには何の抵抗もないけどな。大人しく従順な女には、手は上げない」

私は、ほんの少しだけ考えてみた。

——アンネリーゼには危害はなく、スケコマシが凶悪犯に強請^{ゆす}られる。

たぶん、バルドもセシルも同時に同じことを考えていたんだと思う。ほんの刹那、私たち三人は顔をはたと見合わせた。お互いの意見がばつちり一致していることを、疑^よう由もなかった。

満足気に大きく頷いたセシルが、人差し指をアナに向かって振り上げ、声も高々に言い放つ。

「ならば良しッ！ いいぞナス、どんどんやれ！」

「全ッ然良くないーッ！」

「って、オイ、勝手に略すな！ しかもなぜそこを！？」

私たちを代表して口から飛び出た本音に、すかさずマティアスとアナの突っ込みが飛び、ぶつかり合う。

「エディ！」

懇願するようなマティアスの叫びに、私は視線を宙に彷徨わ

せた。

「うーん……」

「うーんて！」

これ以上の悪ふざけは、マティアスの頭の血管が切れそうだと判断して、私は「分かってるわよ」と軽く手を振った。

いくらあいつがアンネリーゼには手を出さないと口で言っていたとしても、信用なんてできたものじゃない。それに、そんな犯罪を見過ごすわけにも当然いかない。

「冗談はここまでよ。私たちも、アンネリーゼに用があるの。あんなには渡さない」

スケコマシが強請^{ゆず}られるのを心の底から見たかったけど、今は、彼女を取り返すことだけを考えなきゃ！

私のきつぱりとした宣言に、アナは、楽しそうに顔を綻ばせる。

そう、本当に、まるで玩具^{おもちゃ}を与えられた子供のような笑みだった。

「相手をしてくれるのか、お嬢さん。ありがたいね、ちょうど腕が鈍っていたところだ」

まるでチェスか何かのゲームでも始めるかのごとく、アナは気軽に言う。私は無言で、銃を強く握り直した。

相手が一体、どう動くのか予測が付かない。なぜなら、あいつは今、丸腰だから。持っていたのだらう凶器の斧は、ここにある。

と思つたら、アナの真正面——つまりはこの玄関ホールを中心に、左右対象に伸びる館の反対側の廊下から、一振りの剣が投げられた。同時に、廊下の手すりを乗り越えたアナが、自身の巨軀を、軽々と空に放り出す。

「なっ……！」

驚きのあまり声を上げた次の瞬間には、アナは私たちと同じ空間に下り立っていた。その手には、既に抜き身の剣が握り締められている――！

「さて、お手並み拝見といこうか」

楽しくて仕方がないというように歪められた瞳に、残忍な光が宿った。

第24話（後書き）

登場人物の名前についての裏話を、5月11日の活動報告に載せました。

宜しければどうぞ（＾＾）

第25話

「奥に退いて下さい！ 上からも三人来ます！」

目の前に下り立ったアナよりも、見えない脅威を警戒したバルドが叫ぶ。

反射的に、マティアスは二階に目を向ける。バルドの危険予報に全幅の信頼を寄せている私とセシルは、確認することさえしなかった。すぐに身を引いて、この開けた空間を避け、バルドが示した奥へ続く廊下へと走り出す。

もし上から攻撃されたら、遮るものが何もない。このままここにいたら、私達は、いい的^{ミヅ}になってしまう！

「いいから走って！」

私は首を回らし、マティアスに短く叫ぶ。今はまだ人影のない二階廊下を訝しげに見やっただまだった彼は、その一言に弾かれたように肩を震わせた。それから俊敏な動作で、廊下入口まで辿り着いていたセシルに続いた。

一瞬、私の目の端に、床に下ろした鞆が引つ掛かった。この非常時、もちろん取りに向かうつもりはなかったけど、そのわずかな遅れがまずかった。

気付くと、私と仲間たちの間に、アナの巨軀が立ち塞がっていた。しかも腕を伸ばす余裕もないほどに間合いを詰められている！

目の前で、相手が鋭い刃物を頭上に翳すのが、おかしいほどにゆっくりと見える。

「エデルトリダ！」

「エディ！」

バルドとセシルの叫びが遠くで重なる。

「怖くて声も出ないか？」

アナが一瞬手を止めて、嘲笑うかのように言い放つ。私は、目を見開いた。

次の瞬間、痛みに呻いたのは、私じゃなかった。私は相手を目で据えたまま、その足元を狙って撃っていた。

「怖い？ まさか！」

小さく笑い、身を引き離す。

けれど、相手もそれなりの猛者だった。確実に私の弾丸が足の甲を貫いているにも拘らず、それを微塵も感じさせない動きで剣を振り回す。怒りに染まっているかと思ったその顔は、それどころか狂喜に歪んでいる。

私はそこで初めて、背にぞくりと悪寒が走るのを感じる。それは、自分の身の危険に対するものではなく、相手の歪いびつな人格に対する、底知れない不気味な恐怖。

相手に隙を見せずに、剣の切っ先を何度もかわす。アナの身体に向こうで、セシルが銃を構えているのが見える。

なかなか銃声が響かないところを見ると、動きを止めない私たちに狙いを定められずにいるみたい。ああ、やっぱり、ちゃんと銃を教えておくべきかもしれない——なんて、のんびり考えている場合じゃない。

いつの間にか、空いていたほうの左手にもあの巨大な斧を持って

いたアナが、私をジリジリと追い詰めて行く。

突如、頭上から囃し立てるような笑い声が降って来た。アナの間が私たちの闘いを、闘技場のギャラリーさながらに、高みの見物としゃれこんでいるらしい。とは言っても、私は実際に、闘技場なんて血生臭い場に足を運んだことはないけれど――。

全く、趣味悪いわね！

上に気を取られた刹那、足に何かが当たって思わず体勢を崩した。そこを狙ったアナの斧が、床のそれを打ち砕く。私の身代わりになったのは、あの鞆だった。辺りに無造作に、中身が散らばる。

私は咄嗟に屈み込み、真つ二つに千切れた本を手にとっていた。

「そんな物に気を取られている場合か！」

アナの勝ち誇ったような嘲笑が浴びせられる。けれど、私も笑った。

「――！？」

その不可解な状況に、アナは一瞬、目を見開く。私はその隙に千切れたページを数枚掴み、相手の顔面に向かって投げ付けていた。舞う紙片に視界を遮られ、アナはがむしやりに剣でそれらを薙ぎ払う。

その時点で、もう勝負は決まっていた。腕を伸ばせる距離まで一気に身を引き離れた私は、二発、立て続けに放った。両手首の自由を失った相手の手から、支えきれなくなった重い凶器がゴトリと滑り落ちる。

「その小説、いいところだったんだから！ 弁償してよね！」

私は、あの鞆の状況からして無事ではないと思われるカヤの服のことも考え、溜息を吐いた。

第26話

アナが手首を庇い両膝をがくりと付いた途端、上からの耳障りな笑い声がぴたりと止んだ。数秒の沈黙の後、喉の奥からの、怒りに満ちた咆哮が響く。

二人の男が、それぞれの得物を手に、階段を落ちる勢いで駆け下りて来た。上に残った一人が手にしているのは、長身の銃。そいつが私に銃口を向ける。けれど。

「させるか！」

背後で、セシルの声が上がった。それと同時に、重い銃声が轟く。ぐらりと男の身体が傾いで、手すりを乗り越え、そのまま一階に落下した。その衝撃で小さなテーブルに乗せられていた花瓶が倒れ、鋭い音を立てて粉々に飛び散った。

そこから目を離して振り返ると、細身の剣を振り上げた男が迫っていた。私が反射的に銃を構えようとした瞬間、相手は後ろへ身を仰け反らし、そのまま倒れた。

その腿と腕に、深々とナイフの柄が生えている。私の隣りでマティアスが、小型の鋭い刃物を数本手にし、身を強張らせていた。

「やるじゃない！」

私の弾むような称賛にも、マティアスは反応しない。その顔は緊張に引きつり、倒れた相手より上の一点を凝視し、口の中で何かを繰り返し呟いている。呪文のように。

「……を見るな、血を見るな、血を見るな」

どうやら、自分に言い聞かせている様子。そう呟く彼自身の顔は血の気が全くなく、真っ青だった。

「くそッ！」

残った一人が、半ばヤケとも言える動きで、剣を手に突っ込んで来た。私が余裕の動作でその額に銃口を向ける。すると相手は顔を凍りつかせ、武器を放り出し、悲鳴を上げて逃げ出した。

私たちは、それを追うことはしなかった。襲い掛かってくる相手がいなくなったことを、一度、ぐるりと確認する。

辺りは、酷い有様だった。破壊されたスツールに、千切れた小説のページ、二階から落ちた男に粉碎された花瓶と、散らばる花びら。そして三人の男の呻き声。

「さて」

もはや相手に戦意はないことを知りながらも、警戒の為に銃を握ったまま、私はアナの前に立った。

利き手の怪我を押さえたアナが、憎悪の眼差しを向ける。私はそれに、極上の笑みを返したのだった。

「アンネリーゼはどこ？」

彼女は、館の一番奥の、窓一つない倉庫に閉じ込められていた。アナから鍵を拝借し、アンネリーゼを助け出し、代わりにアナとその仲間二人を中に押し込む。

街の治安官にでも報告しなきゃいけないだろうけれど、それはとりあえず後回しにする。

アンネリーゼは、憔悴している様子ではあったものの、怪我はなく無事だった。私たちは、アンネリーゼを彼女の部屋へと連れて行き、少しの間、落ち着くのを待った。

マティアスの姿を目の前にしたアンネリーゼは、愕然とした後に、苦痛に顔を歪めた。そしてそれから一言も漏らしていない。

私たちは、まず何から話せば良いのか分からなくて、暫く口を閉ざしていた。

辺りに重々しい空気が満ちる。

「……なぜ来たの」

やがてぼつりとアンネリーゼが囁いた。彼女の視線は、ただひたすら己の爪先つまさきに向けられている。だけど、その問いが誰に向かつてあるかは訊ねるまでもなかった。

私もバルドもセシルも、アンネリーゼから離れて扉を背に腕を組んでいるマティアスに、顔を向ける。

「なぜ？ そんなこと、分かりきってるだろう、まだそれを訊くのか？」

それにアンネリーゼは答えなかった。代わりに、短く言う。

「私は、フランツと結婚するわ」

ゆつくりと持ち上げられた青い瞳が、挑むようにマティアスを射抜く。また怒りを爆発させるのではと予想されたマティアスは、意外にも、落ち着いていた。

「憎んでいる相手と結婚して、それでどうなる？」

「エルゼが愛した相手よ。全てが悪い人じゃないかもしれない。私

にだって、あの人を愛せるようになるかもしれない」

まだ……まだ白々しい嘘をつき通すというの！？

あまりに馬鹿げた上辺だけの科白セリフに、私たちは呆れ果てて、ものも言えない。

「アン。これ以上の嘘は止めてくれ。何を考えている？ 一体、何をする気なんだ！」

さすがに苛立ちを隠しきれず、マティアスは声を荒げた。アンネリーゼは、ゆつくりとした動作で、頬に流れ落ちた黒髪を耳に掛ける。

「何も。結婚して、普通の夫婦と同じように暮らすだけ」

「普通の夫婦だって？」

「そう。嘘じゃないわ」

疑いを隠せないマティアスの口調に、アンネリーゼはその一言を強調した。

「彼の正式な妻となって、子供を産むの。彼が自慢にしている王族の血、そして心底忌み嫌っている異端の血を引く子よ。そしてその子が、あの劇場の跡取りになる。それが私の復讐」

開いた口が塞がらないとは、まさにこのこと。私は文字通り、口を大きく開いて、そのまま固まっていた。我に返るまで、たっぷり数秒が必要だった。

「あんた馬鹿よ！ 大馬鹿だわ！」

私の蔑さげすみにも、彼女は平然としている。眉一つ、動かすことすらしない。

「ええ、そのとおりね」

あまつさえ、肯定すらしてみせる。

私はアンネリーゼのあまりの我儘さ加減に、怒りを抑えきれなかった。私の口から言うべきことではないけれど、叫ばずにはいられない。

「それが何を犠牲にするか、分かっているの？ 自分だけじゃない、マティアスもカヤもハンスも……皆の気持ちも、それに産まれてくるかもしれない、なんの罪もない命も！ 全部、全部犠牲にするのよ！？」

「そうね」

「そうねって！」

「でも私はずっと決めていたの。もしこのまま何もしなければ、あの男は一生罪の意識に苛まれることもなく、姉のことは忘れて安穩と過ごすのよ。それだけは赦せない」

感情的になっている私を押し留めるように、バルドが、肩にそつと触れた。相棒を見上げると、彼の目も哀しそうに細められている。

「けれどもし、そのことが早い段階で、フランスに知れてしまったら？ どうするんです？」

「さすがにエルゼの時と同じ手がきくとは思えないわ。二度も呪いまじなにかかるなんて、それこそ間抜けとしか言いようがないもの。それに、婚姻の契約は、そう簡単に破れるものじゃない。見栄っぱりなフランスが、自分の妻が異端だなんて事実を周囲に広められると思う？」

「それは……そうかもしれないけど」

——もし、計画通りにいかなかったら？

マティアスから聞いた話が、否応なしに思い起こされる。アンネ

リーゼの姉の最期を。それを知っている彼女だもの、自分の身に起こりうる最悪の結末だって、考えないはずはないのに！

「だからマティアス、私のことは忘れて」

私たちが黙ったほんのわずかな間を逃さず、アンネリーゼは淡々と告げ、部屋を横切つて扉に手を掛けた。

刹那、マティアスが、その手を上から強く押し留める。アンネリーゼは、強い眼差しを彼に向ける。

「アン、無理だ、それはできない。おれの気持ちは変わらない、前に言ったことは、冗談とか軽い気持ちじゃない」

「マティアス」

「だから頼む、またおれたちと」

勢い込んでのマティアスの言葉を、アンネリーゼは無言で遮った。自分の唇を、彼のそれに重ねて——ほんの一瞬、軽く触れるだけのキスで。

「……私、もうひとつ嘘をついてたわ。弟だなんて思ってない。本当は、あなたを愛してる。でも——」

さようなら、と微かに震える声が別れを告げる。呆然とするマティアスをその場に残し、アンネリーゼは走り去った。

あまりの後味の悪さに、私たちはそれぞれの表情を窺^{うかが}った。バルドは苦渋を浮かべ、否定するかのように首を左右に振り、セシルは困ったように俯^{うつむ}き、髪を乱暴に掻き回す。

——そして、マティアスは。

声もなく、ただ静かに、一筋の涙を流した。

第27話

「あいつ、立ち直れるかな」

何度目かの溜め息の後、セシルがしみじみと呟いた。

お祭り騒ぎの結婚式から一夜明け、街は、少しばかり落ち着きを取り戻していた。

とは言え、昨夜から飲み明かした人々の姿がちらほらと見受けられたりもするけれど。私たちが今いるこの宿の食堂兼酒場にも、朝方まで飲んでいたと思われる人が、テーブルに突っ伏して鼾イビキをかいている。

「相当なショックを受けてたから、きつとかなりの時間が必要よね」

昨夜、私たちはマティアスたちと別れた。

彼らから受けた依頼は、アンネリーゼを連れ戻すのを手伝うことだった。結局それは叶わなかったけれど、私たちの責任ではないと、カヤはしっかり報酬まで手渡してくれた。

代わりに私は彼女に服の代金と、あの館にいたお尋ね者の懸賞金の半分を返した。マティアスだって、見事なナイフ投げの腕で協力してくれたもの。

「アンネリーゼは、酷いことをしましたね」

——酷いことを。

バルドのその言葉に、私は眉を顰ひそめる。

本当に、アンネリーゼはマティアスに残酷な仕打ちをしたと思う。自分の本心を打ち明けた上で、彼よりもフランクを選んだのだから。

それが激しい憎しみからの行動だったとしても、重要なのはその事実であって、理由じゃない。

それに、そうするならせめて、最後まで彼を振ったフリをすべきだったんじゃないか、なんて考えてしまう。

だって、これから先、マティアスはどうすればいい？ 彼女が間違った人生を過ごしているのを知りながら何もできず、それどころか、顔を合わせることもさえきつと許されない。なのに彼の気持ちはずっと、アンネリーゼに縛られたまま。

彼女は、自分の心を見せることで、マティアスの自由を奪ったのだと思う。

——彼女は、卑怯よ。

私は深い思慮に沈み、むっつりと黙り込んだ。浮かれた様子でいる賑やかな客の中で、私たちのテーブルだけ、重苦しい空気が流れている。

「まあ、考えたって結果が変わるわけじゃないしさ」

その場を取り繕うように、セシルがいつもより更に明るい声で言う。

「俺たちは、これからどうすんだ？」

「これから……そうね、とりあえずは明日にでも、この街を出ようと思うんだけど。どうかしら？」

本当は、私の夢を叶えるきっかけが見つかることを期待して、大きな劇場のあるこの街を訪れたことを思い出す。

けれど今は、当然のことながらあの劇場に近付くのすら、良い気分がしない。それにこの街では、どうしたって歌う気になんかなれない。

私の提案に、二人も反論はしなかった。

「そうですね。先立つものは既に十分過ぎるほど得ましたし」

「ナスに、二人の仲間で金貨四百！を、分けて二百。一気に金持ちになったよな。しばらく依頼は休んで、たまには豪遊つてのもいいかもな」

努めて明るい話題を振るセシルに、私はちよつとだけ救われた気がして、微笑んだ。

「そうね、その間、みっちり銃の特訓というのも有りかもしれないわね」

「や、あの、教えて欲しいって言ったの俺だけださ、せめてもうちょつと中級者向けのコースとかねえ？」

「ない。基本を疎かにするようじゃ、上達なんてしないわよ？」

「エディのは基本とはなんか違うって！」

「違わないわよ。私だって、そこから始めたんだからね、七歳の時に」

「七歳って、俺、今既に十五なんだけど？ エディくらいまでに到達する頃には、中年のオッサンじゃなか！」

「失礼ね、私が今何歳だと思ってるのよ！ たった十一年後よ！？ 銃だけじゃなく、計算もバルドに教わったら？」

いつもながらの私とセシルの言い合いに、バルドが笑う。数日振りに戻った平穏な日常に、私も目を細める。

心の底に残ったしこりを意識しないように、自分に言い聞かせながら。

——眠れない。

毛布を頭まで引き上げて、寝返りを打つ。

その晩、早々に宿の部屋に引下がり、ベッドに入ったものの、私はなかなか寝付けずにいた。頭に浮かぶのは、やっぱり、アンネリーゼとマティアスのこと。

依頼は既に完了しているのだし、私がこうして考えたところで、もうどうしようもないということは分かってる。

でも、なぜもっと強く彼女を引き止めなかったのだらうと、今更ながらに後悔ばかりが先に立つ。考えるのを止めようとしても、難しかった。何度も何度も、この数日に起こったことを、頭の中で無駄に繰り返す。

「フランスを愛してる」と嘘をついたアンネリーゼに、「彼女を攫^{さら}う」と言って、その機会を窺^{うかが}っていたマティアス。

あの同室だった女の子達のおしゃべりも、意味もなく、ふと脳裏に浮かんだ。

自身に流れる王族の血を、何よりも誇りにしているフランス。なのに、あんなに無節操に女の子に手を出しているなんて、何を考えているのかしら？

……そこでふと違和感を覚えて、閉じていた目を開く。

そう、あの男は、呆れるほどに女好きだった。それこそ自分が気に入った相手なら、私にしたように、力ずくでも手に入れようとするほどに。

なのになぜ、婚約まで交わしているアンネリーゼには、そうしなかったの？ 彼女自身がそれを断っていたとしても、あのスケコマシが、すんなり引き下がるなんて、想像つかない。あの強引で自己中心的な性格からして、むしろ不自然過ぎる。

そのことを深く考えて、何かに気付きかけた時。

部屋の扉が勢いよく開かれた。そう言えば、考え事にばかり気を取られて、つい鍵を掛け忘れていたことを思い出す。
私はすぐに身を起こし、手を伸ばして銃を取った。

「エディ！……って、うわ、俺だよ、撃つな！」

薄暗がりの中、目を凝らすと、そこに立っていたのはセシルだった。なにやら寝起きに相当慌てて駆け付けたくらしく、髪があちこち跳ねている上に裸足だった。

「深夜にレディの寝室にノックもなく入るなんて、いつからそんな男になったの！」

「違、そんなんじゃないって！ てか普通のレディは銃を突き付ける前に、きやあとか言ったり、もうちょっと控えめな反応するもんじゃねえ！？」

両手を前に突き出して、必死に弁解しつつも、冷静に自分の意見を述べることを忘れない。その背後に、やはりセシルと同じく起き抜けらしいバルドが、普段着のシャツのボタンを掛けながら駆け付けた。

「だから危ないって言ったでしょう」

銃を構える私とセシルを見比べたあと、半ば呆れ顔で、セシルに言う。

「なに、それもアレか？ いつもの危険予報？」

「いいえ。深夜にエデルトリダのところに急に飛び込むなんて自殺行為だって、ちょっと考えれば分かりますって」

ああもう、せっかく何かが浮かびかけていたのに、中断された上にコレ！？

私は深々と溜め息を吐いて、銃を枕に沈めた。

「で、何か用があるんでしょう？ どうしたのよ、こんな時間に」
私の問いに、セシルはその用件を思い出したみたい。そうだったと呟きながらも再び焦りを露わに、窓に駆け寄った。そして乱暴とも言える手つきで、派手な音が宿内に響くのもお構いなく、勢いよく戸を開け放つ。

「外がどうかしたの？」

私はベッドから下りて、ゆつくりとセシルの背後に歩み寄った。彼が答えるより早く、その光景が視界に飛び込んで、息を呑む。

四角い窓に縁取られ、まるで一枚の絵画のように暗い部屋の中に浮かび上がったのは、赤い夜空と暗い街だった。

「あれって、まさか」

「ああ、燃えてるんだ！」

セシルが指差した彼方で、淡い光が蜃気楼のように揺らめいている。それは、この街が誇る、あの劇場があるはずの方角だった。

第28話

その豪華な建物の半分は、既に激しい炎に飲み込まれていた。見上げると、建物に嵌め込まれていた装飾付きの硝子窓ガラスは跡形もなくなり、内側から勢いを増した炎が吹き出している。

暗闇に浮かび上がるその壮絶な光景に、駆け付けた私たちは、言葉を失い、馬鹿みたいに呆然と立ち尽くす。

「なんで……こんな」

炎の熱を孕んだ激しい風に髪をなぶられながら、私は呟く。

劇場前の広場に設けられた噴水の周りには、中から逃げ出して来たらしい人々で溢れていた。皆、豪華な衣服で着飾ってはいるものの、その全身は煤で汚れ、所どころ皺になり、随分とくたびれている。

それだけならまだしも、そこに集まった中には酷い怪我や火傷を負っている人もいた。呻き声に泣き声、それに助けを求める声が混ざり合い、くぐもった叫びとなって広場に満ちている。

「歌姫様たちの結婚後の、特別公演が行われていたんだ」

隣りにいた街人らしき男が、私たちの視線を追って、教えてくれる。

「いつもなら、この時間は閉まっているんだけどな」

私は、もう一度、燃え盛る劇場に目を向けた。まだ入口付近にまでは、火の手は回っていない。けれど、劇場の中央、ドーム型の天井の建物は、亀裂や窓といった至る隙間から炎を吹き上げ、建物が軋む轟音を響かせている。

崩れ落ちるのも、時間の問題かもしれない。

辺りは、怒号と悲鳴に包まれている。

あまりの出来事に、集まった人々もどうして良いか判断つかずに、呆然と立ち尽くすばかりだった。

火事と聞いて火を消そうと集まったらしい人も、手に小さな桶を持っただけで、ポカンと口を開けて、建物が燃える様を見つめるしかできないでいる。最早、水を少しばかりかけたくらいでどうにかなるような段階ではないのだから。

そうこうしているうちに、噴水前に集められる怪我人は、増える一方だった。

「エデルトリダ」

眉根を寄せたバルドが、静かに私を呼んだ。私は迷い、ただじつと彼を見た。バルドが言いたいことは、分かっている。

でも、この街で、あの能力チカラを使うことは……。

悩む私の耳に、再び苦しげな泣き声が飛び込む。気付いた時には、私ははつきりと頷いていた。

大丈夫、と自分に言い聞かせる。

「分かった、もし騒ぎになったとしても、絶対に止めるから！
…助けてあげて」

「ああ、俺も協力するからさ。安心して治してやれって！」
私とセシルに微笑んで、バルドも頷く。

「いざという時には、お願いします。頼りにしてますから」

人の輪を何とかき分けて、バルドが全身に火傷を負っている女性の傍らに身を屈める。一目見ただけで、顔を背けなくなるほどの

重症だった。

「診せて下さい」と言う彼を医師だと思ったらしい周りの人々は、固唾を飲んで、様子を窺^{うかが}っている。

一瞬、バルドの目にも緊張が走ったように感じる。けれど、彼はすぐに治癒の呪文の詠唱に取り掛かった。

火傷の部分に翳されたバルドの掌が、淡い光に包まれる。途端^{とたん}、周囲にどよめきが起こり、私とセシルは、思わず銃に手を伸ばしていた。

バルドは、落ち着いた低い声で、呪文を続ける。光が増すと同時に、怪我人の呻き声が弱くなり、やがて止んだ。

「……どうなってるの？」

痛みはおろか、その痕さえ綺麗に消え去り、完治した彼女は目を丸くする。バルドはその結果に満足したようにほっと息を吐き、休む間もなく、すぐにまた立ち上がった。

「怪我が重い人から優先に診ます！ どこにいますか？」

一瞬、その場が沈黙に包まれる。

私は緊張に身体を強張らせて、無意識に息を止めていた。セシルと、不安な視線を交わす。けれど。

「こつちだ！」

「ここにもいる、早く助けてやってくれ！」

「この人が先よ！」

一拍の後には、バルドに助けを求める声が重なり合って、大騒ぎとなっていた。私とセシルは、安堵に長い息を吐いた。

第29話

それから、大忙しだった。

バルドが早く次の人を治療できるように、セシルと私は、まずは人の群れを落ち着かせるよう努めた。

それが済むと今度は、ごった返して足の踏み場もない噴水の周囲をどうにかしようと動く。治療を待つ人々を適度な間隔を保って並べるように、集まった街人たちに指示して回った。

そこから少し離れた位置の劇場は、いまだ火の勢いが収まる様子がない。全てを燃やし尽くすまで、止まらないかもしれない。そう考えて、数日前の夜に見た、幻想的だったその姿に思いを馳せた時。

「エディ！」

半ば悲鳴に近い叫びが、私を呼んだ。セシルではない、女性の声。「カヤ？」

驚いて、駆け寄る。カヤの肩に腕を預けて支えられていたのは、ハンスだった。

「どうしてハンスが！？」

思わずその疑問が口を突いて出る。

だって、カヤ達は絶対にアンネリーゼの舞台を観に行くはずがないもの。あんなことがあった後なのだから。

「マティアスを追ったんだ」

腕と足に怪我を負っているらしいハンスは、けれど、はつきりと

した口調で答える。

「まだ中にアンがいると聞いて、マティアスが飛び込んだ。それを止めようとしたんだが、途中で上から降って来たものに当たって、このざまだ」

「本当は、わたしたちも明日にでもここを離れるつもりでいたの。でも、火事の知らせを聞いて、それで慌てて来てみたのだけど」

ハンスの説明をカヤが早口に補足する。

「じゃあ、マティアスは!？」

「見失った」

ハンスが顔を歪めて俯くと同時に、天を裂くような凄まじい音があたりに轟く。

振り返ると、ドーム型の屋根の一部が崩れ落ちていくところだった。その衝撃で起こった風に煽られ、一瞬、炎がオレンジ色に変化して大きく弾ける。

私もカヤもハンスも、そして広場の誰もが、息を呑んでその光景に釘付けになる。

この街の象徴でもある巨大な劇場が、壊れてゆく……！

「……バルドが向こうの噴水のところにいるわ。ハンスの怪我を治してもらって」

「待つて、どこに行くの？」

「マティアスを探してみる」

「でも!」

カヤの反論を聞く前に、駆け出していた。

いくら探すと言っても、私だって無茶をするつもりはない。けれど、せめて、まだ火の回っていない入口だけでも確認してみようと考えた。

炎に包まれたそれを一度だけ見上げ、意を決して、足を踏み出す。
「——っ、すごい煙」

開け放たれた両開きの扉から中を覗くと、そこは一面、薄く白い煙が充満していた。

「マテイ……」

名前を叫ぼうとしても、瞬間に喉が塞がり、それすらも叶わない。口元を手で覆い、恐る恐る、前に進む。

わずかに奥に進んだだけで、視界が、どんどん悪くなってゆく。奥から流れてくる煙も、勢いを増し続けている。

もし、炎がここまで噴き出してきたら——。

その考えを意識して頭から締め出し、もう一度ぐるりと辺りを見回す。気付けば、真っ直ぐに伸ばした自分の指先すら霞んでしまっている。

だめ、煙の回りが早過ぎる……！

さすがに自分の身の危険も感じ始めて、引き返そうと踵かかとを返したけれど、方向すら掴めないほどの煙の濃さに、息が詰まり、気が動転し始める。

出口は、どっちだったっけ？　ほんの少ししか進んでいないはずなのに！

喉に閉塞感を覚え、咽むせる。目にも痛みが走り、何度も瞬く。

その刹那、視界の端に何かが引っかけた。白だけが広がる空間の中で、やっとで見つけたそれを逃さないようにと必死に目で追うと、長い黒髪がふわりと揺らいた。

「アンネリーゼ!？」

そう叫んだつもりだったけど、きつと声にはなっていないはず。とにかく彼女を見失わないように、手を伸ばす。

そこで私は、そのことに気付いた。

確かに、顔立ちはアンネリーゼに似ている。でも、違う。別人だわ。

哀しみの色が濃く浮かんだ青い瞳が、私を捉える。かと思うと、彼女はふいに背を向けた。

「……! 待って」

私は慌てて、その後ろ姿を追う。不透明な空間の中で、不思議なほどに、その輪郭だけははっきりと浮かび上がって見える。

指先があと少しでその肩に触れそうになり、安堵に気を緩めた瞬間。

「……んの馬鹿ッ!」

突然の大声に加え、伸ばした腕を掴まれて、強く前に引っ張られる。

少女に追い付いたと思ったのに、その姿はなく、代わりに目の前に現れたのはセシルだった。

——え、あれ、なんで？

目を丸くするけれど、セシルはそれにかまわず、私を外まで引きずって行った。煙を抜けて、新鮮な空気を肺いっぱい吸い込んだところで、待ってましたと言わんばかりに、怒鳴る。

「一人で行くなんて、自殺行為だろ！」

混乱した頭で、さっき見たことを説明しようと口を開いた時に、それは起こった。

耳を劈く轟音が頭上から降り注ぎ、身体が激しく揺れる。私たちは咄嗟に飛びのいて、頭を抱え、地面に身を伏せていた。私たちが激しい熱風に、砕けた石の破片が、周囲に無造作に降り注ぐ。

——それは、劇場が完全に崩壊した瞬間だった。

第29話（後書き）

6月いっぱいまで期間限定で、キャラクター人気投票実施中です。ばちつと一発、ぜひ宜しくお願いします。携帯も対応してます。

既に押して下さった方、ありがとうございます（^^）

現在はセシルがトップで、その後をエデルトリダ、バルド、

そしてなんとアンネリーゼがそれぞれ同点で追いかけています。

メインキャラと張り合うとは……恐るべし、アンネリーゼ（笑）

第30話

空がうつすらと白み始める。その柔らかな明かりの中、崩れ落ちた建物の全貌が人々の眼前に晒される。

かつて美しかったその劇場は今や見る影もなく、瓦礫の山と成り果てていた。焼けて変色した石の間から、細く燦^{くすぶ}る煙が立ち昇っている。

私は、マティアスとアンネリーゼのことを今でも信じている。きずに、その場にただ呆然と留まっていた。カヤとハンス、それにセシルも、無言のまま、私の近くに力なく立ち尽くしたり、うずくまった姿勢で頭を抱えたりしている。

瓦礫を一つずつ退^どかして、二人を探したいという衝動に、何度も駆られた。

でも、一体、どこから手を付ければいい？ 目の前にあるのは、途方もなく巨大な石の山で――。

「どうかしましたか？ 何かあったんですか？」

噴水前に集まった全ての怪我人を治し終わったらしいバルドが、私の傍らに駆け寄った。マティアスとアンネリーゼのことを話そうとするけれど、喉がつかえて、言葉にならない。

今にも泣き出しそうな私に気付いて、バルドは、何か深刻なことがあったらしいと悟ったようだった。真っ先にセシルに、それからカヤたちに説明を求めるように顔を向ける。けど、誰もが苦痛の表情を浮かべて押し黙ったままだった。

私はもう一度、伝えようとしてみるけれど、やはり言葉が音にならず、代わりに首を力なく落とした。

「助けられなかった」

やっとの思いで囁くことができたのは、ただそれだけ。
散々待たされた拳句に返って来た短い答えに、バルドは当然の疑問を抱く。

「誰をです？」

「マティアスと、それにきつと、アンネリーゼも」

「二人がまだ中にいたんですか！？」

私は、うつすらと首を縦に振る。それにバルドは愕然として、崩れた建物の残骸に顔を向けた。

「二人を探しに行つたけど、煙が酷くて、全然進むこともできなかった。戻る方向も見失いかけて」

そこで私は、突然口をつぐむ。

瓦礫の山の、遠く。そこに一瞬、あの姿が見えた気がしたから。
でも、軽く瞬いた瞬間には、人影など全く見当たらなかった。

「なあ、今、あそこに誰かいなかったか？」

「セシルも見たの！？」

「まさか」

カヤが虚ろな表情で呟く。アンネリーゼの姉の名を――。

けど、彼女がここにいるはずがない。それにもし生きているとしたら、今頃は、カヤと同じ年くらいのはず。あの焼け落ちる劇場の中で見た少女の面差しは、今のアンネリーゼよりも幼く見えたほどだった。

私たちはそつと顔を見合わせて、それから急いで、「彼女」が立っていた場へと向かう。不安定な足場に何度も滑りながらも、懸命にその山を登った。

目指す場に着くなり、ハンスが石に手を掛ける。私たちもすぐにそれを手伝い始めた。黙々と、重い塊を退かしてゆく。

そこに、二人がいるという確証なんてない。けれど、この場にいる誰もが、それを知っているかのように必死だった。

やがて、石と石の隙間から、わずかながらも瓦礫の中に空間が広がっている様子が見えた。

既に頭上に上った太陽の日差しの元、真っ先に覗いたのは、燃えるような赤い髪。

どくん、と心臓が跳ねる。胸に湧き上がる希望に後押しされ、通常だったら動かせないのではないかと思えるほど大きな石を、五人がかりで引き摺り下ろす。

そこに横たわる姿に、私は、目を見張った。

「マティアス！」

誰の叫びかは分からない。カヤかもしれないし、私たちの誰か、もしくは全員だったかもしれない。けど、そんなことはどうでもいいことだった。

名を呼ばれて、その瞼が軽く痙攣した。薄く目を開く。降り注ぐ陽光の眩しさに目を細めた後、虚ろな瞳がゆつくりと焦点を結ぶ。自分を見下ろす私たちを認めたマティアスは、煤にまみれて汚れた顔をごく微かに、けれどどこか誇らしげに綻ばせた。

その腕には、彼が愛する少女がしっかりと守られ、抱かれていた。

第31話

瓦礫の中から助け出した二人は、全身煤と埃だらけで、所々に小さな掠り傷を負ってはいたものの、大きな怪我はなかった。あの激しい崩壊を考えると、それがどんなに幸運なことか、本当に計り知れないことだと思う。

マティアスが身を挺して守っていたアンネリーゼは、ほとんど無傷とは言え、意識を失っているようだった。ぐったりとした彼女をハンスが抱え、私たちは二人を休ませるために、再び噴水の元へ向かった。力が思うように入らない様子のマティアスに、バルドとセシルが肩を貸す。

やっとの思いでその場に辿り着くと、まだ辺りに残っていた人々が歓声を上げて私たちを迎えてくれた。

「水を」

積もる話はさておき、カヤが、木製のカップをマティアスに手渡す。ここに集められていた怪我人たちのためにと、街の誰かが用意したらしい。

マティアスはそれを受け取ると、喉を鳴らしながら一気に煽った。

「……う」

小さな呻きが、アンネリーゼの口から漏れる。

「アン？」

カヤが呼び掛けると、彼女はゆっくりと目を瞬^{しばた}かせた。まるで夢から覚めたように、朦朧とした視線で辺りを見回す。

「マティアス？」

彼女が一番先に呼んだのは、彼だった。それから、自分がハンスによって支えられていることに気付き、首を傾げる。いまいち状況を把握しきれていないらしい。

「ここは……？　なぜ、ハンスたちが」

首を傾げたまま、ゆっくりと呟く。その瞳が徐々に明るさを取り戻す。

頬に赤みがさして生気が戻ると同時に、彼女は、身を強張らせた。そして怯えたような表情で、辺りを大きく見渡す。

「あの人は？」

「あの人？」

「フランツよ、私のすぐ側にいたの」

その名が出た途端、私たちの周りの空気が凍り付く。それを破ったのは、マティアスの静かな声だった。

「あいつは、ここにはいない」

「じゃあ、どこに？」

それに対しての答えは、沈黙が全てを物語っていた。私たちは啞然とし、身体をあの前場跡に向けていた。

今までマティアスたちのことに必死で、その存在すらすっかり忘れていたことを、今更ながらに思い出す。

それに対し取り乱すかと思われた彼女は、ただ呆然と、唇を薄く開いただけだった。

その場に力なくずおれ、目を見開き、空気を求めるかのように浅い呼吸を繰り返す。苦しげに喘ぎ出した彼女に、マティアスが身を屈めて安心させるように話しかける。

「アン、落ち着いて、深く息をして」

彼女は何度も頷き、胸に手を当てる。呼吸が落ち着いた頃に、劇場跡を真っ直ぐに見据えたまま、言葉を絞り出した。

「あの男……全てを知っていたの。私が誰で、何のために近付いたかも、何もかもを知っていたわ」

か細い呟きは、やがて荒々しい呻きとなる。
私たちは、ただじっとそれを見守る。

「それでも私を結婚相手として受け入れたのは、金のためだって、そう言ったわ。劇場一の歌姫である私が彼と結婚すれば、人々の注目を集めて、劇場の名を更に広めることになる、ただそれだけのためだって……」

一度深く息を吸い、再び、激しく感情を放つ。

「だからあの男は私に必要以上に近付かなかったのよ、私が異端の血を引く女だって、エルゼの妹だって気付いていたから！　なのに私は、私は……！」

身を震わせる彼女を、マティアスが支える。

「——アン」

言つべき言葉を探して、彼はただ名を呼んだ。けれど、彼女の苦痛の叫びは止まらない。

「フ란ツは言ったわ。今までも、そしてこの先も、お前を抱くことはない。でもお前は僕のものだ、一生、僕のために歌い続けるって！」

歌姫の慟哭が、広場に響く。

私たちと、そしてその場にいた僅かな街人は、言葉もなく顔を見合わせるしかできない。

依頼を受けた時には、お金目当てなのは、アンネリーゼのほうだとばかり思っていた。でも、真実は、逆だった。

そして、私が昨夜に気付きかけたことの答えが今、アンネリーゼの口から語られた。

フ란ツは、彼女の正体を知っていた。だから口では「愛してる」と言いながらも、婚約者に必要以上に触れることがなかったんだわ。最初から何もかもが嘘で塗り固められた結婚だったというわけね。花婿は、私利私欲のため、花嫁は復讐のための――。

私は、唇を噛み締めて俯くしかできなかった。

アンネリーゼは、言葉を切ると同時に激しく泣き崩れた。マティアスは、無言でただその細い身体を抱き締め、宥めるように背を擦る。

「ごめんなさい、ごめんなさい、マティアス、ごめんなさい」

彼女は、嗚咽を押さえることもできないまま、謝り続ける。何度も、何度も、何度も。

「私、頭がグシャグシャだった。自分の考えも気持ちも何もかも分

からなくなつて、死んでしまえば、苦痛も悲しみも、全てが消える
つて思つた。なのに、できなかった！ あなたが瞼に浮かんで、で
きなかつたの、ごめんなさい」

「そんなこと、できなくて良かったんだ。なんで謝る？」

「私は、あなたを酷いやり方で捨てたのよ。なのに、あなたを理由
に生きたいなんて、言えるはずがないわ」

「——だからフランスには、あれほど言つたのに」

突如割り込んだ震える声に、私たち全員が、その人物を振り返つ
た。

第31話（後書き）

今回ちょっと中途半端なところで切ってます、すみません。

区切りのよいところまでだと、少し長くなるかなーという感じだったので。

重めのシリアス場面が長いのって疲れるかも、なんて思いました（
^^;）

キャラクター人気投票に票を下さった方、ありがとうございます！
現在、なんと、メインの三人とアンネリーゼが、同点です。

色んな意味でびっくりです。

そしてあの人物にも一票あったのが、もっとびっくりです（笑）

同点が複数の場合を、実は考えていませんでした（^^;）

その場合、短編は……えっと、アミダくじとかで！（え）

今月いっぱいですので、まだまだ受付中です。よろしく願いします〜！

第32話

蒼白な顔をして、仁王立ちでアンネリーゼに憎悪の眼差しを向けていたのは、私たちは初めて見る壮年の男だった。

小太りで、どこにでもいるような容姿だけど、普通の人と違うのはその衣服。

かなり贅沢な生地を使った、凝ったデザインの――ただし、ゴテゴテしたものを身に付け、指という指に、大きな宝石の嵌めこまれた指輪をしている。

そのあまりにも悪趣味な着こなしに、セシルが苦々しい面持ちで、「うわ」と呟いた。

私たちがまるで見えていないかのように、男は、アンネリーゼだけを睨みつける。

「お前がやったんだろう、この火事騒ぎは！？ 私の劇場をよくも」

「って、え？ 私の劇場ってことは……」

「スケコマシのオヤジ！？」

外見は全く似ていない。でも確かに、どことなく身に纏う雰囲気と言つか、何かが重なるように思えて、私は一人首を傾げた。そして、やっとでそれに気付く。

ああ、あの目だわ。どこか胡乱うろたんな、つかみ所の無い目。

思わず「スケコマシ」と叫んだセシルを、さすがに無視はできなかったらしい。男は、一度だけセシルに怒りの視線を向けた。けれど、すぐにまたアンネリーゼへと注意を戻す。

「違うわ、私じゃない。事故だったのよ」

アンネリーゼは、弱々しく首を振る。

「短剣を持っていた私を、フ란ツが止めようとしたの。どっちみち私は、死ぬことなんかできなかったのに。その時に揉み合いになつて、フ란ツの腕が燭台に触れて、それで――」

「嘘だ！」

彼女の説明を、頭ごなしに否定する。その顔は、怒りで真っ赤だった。頭から湯気が出そうなほどに。

「お前は呪われた女だ、その身に流れる血が災いを招いたんだ！」
唾を撒き散らしながら、喚く。

「異端者め！」

それにマティアスが齒軋りをして立ち上がろうとする。けれど、それよりも早く、私が先に動いていた。

「――その毒を吐く口を閉じなさいッ！」

私の蹴りをマトモに真正面から受け、男は、その場にひっくり返った。突然の出来事に、目を白黒させて私を見上げる。

「身体に流れる血が人と違うなんて、どうして分かるの！？ 人と違う能力があるからって、どうして呪われてると言うの！」

私の言葉に、咄嗟に反論できずに、男はおどおど辺りに目をやった。それから、その場に残っていた街人たちに向かって吼える。

「おい、何をしている、この凶暴な女と、そ、その女をどうにかしろ！」

「ちょ、凶暴で、失敬ね！」

私が顔に指を突きつけると、びっくりとその肥った身体が跳ねた。男の命令に、応える者はいない。困惑したように眉根を寄せ、それぞれの顔色を窺^{うかが}ったり、男から目を逸らしたりするばかりだった。

「その女は、異端だぞ、お前達も呪われるぞ！　いいのか！？」

その根拠のない脅しにも、誰一人動かない。

「お、おい……」

自分の味方となる人物がその場にいないということに、見るからに焦り始める。己に注がれる冷たい眼差しに、じりじりと後退^{あとずさ}りさえ始めた。

今にも逃げ出すかと思われたその瞬間を逃さず、バルドが声を掛ける。

「呪いの心配もけっこうですが、あなたには、優先して心配すべきことがあるはずです」

「な、何をだ、一体、何の話を」

「あんたの……息子よ」

私は思わず息子の前に「馬鹿」を付けそうになったけれど、さすがにそれは、今回は呑み込んだ。目を見開いた男に、無言でその居場所を伝える。

私たちから見た見たフ란ツが、どんなに酷い男だったとしても、肉親にしてみれば愛しい息子のはず。私の視線を追い、父親は、声にならない声を上げた。何度も足をもつらせながら、崩れ去った財産に駆け寄る。

その背に向かって、アンネリーゼがぽつりと呟いた。

「愛する人を失うということがどういふことか、これであなたにも分かったでしょう？」

泣きはらして既に濡れていたその頬を、もう一筋だけ、静かに涙が伝い落ちた。

第32話（後書き）

中途半端で切って気持ち悪かったので（自分が）、連日更新しました。

今、後日談のような部分を書いています。が、どうにも気に入らなくて、四苦八苦してます。

でも本当にあと少しを残すのみ。が、頑張りますっ！

第33話

全てが終わったあの一夜から、早くも三日経った。

劇場大崩壊という壮絶な事故にかかわらず、死亡者はおそらく一人だけであるという、ある意味奇跡とも呼べる結果だった。

出火した場所が劇場の一番奥に位置する控え室だったために、劇場のホール内にいた人々は反対側の出口に逃げることができたことと、バルドの治療があつたことが幸いだったらしい。

そんな中の、たった一人の不運な犠牲者は、フランツ。「おそらく」というのは、その姿が忽然と消えてしまったから。

まだ全ての瓦礫を片付け終わったわけではないけれど、アンネリーゼの証言から、フランツがいたと思われる場所を徹底的に搜索はされていた。なのに、いまだその身体は見つかっていない。

「エルゼが連れて行ったのかもしれないわね」と、カヤはぼつりと呟いた。まさかそんな非現実的なことがあるとは到底思えないけれど、それでも、私たちの誰も否定はしなかった。

私たちは、すっかり体力を取り戻したマティアスたちと、この街で別れることになった。

自分たちにとってこの街は辛い記憶ばかりを思い起こさせる。だから、少しでも早く立ち去りたい。そう言つて、彼らはその日の早朝に別れを告げに来た。

からりと気持ちよく晴れ渡った空の下、私たちは街の入口で、互

いに名残を惜しむ。

「本当に、なんて礼を言ったらいいか」

心の重荷を取り去ったように笑うマティアスに、私も笑みを見せる。

「私たちは、何もしてないわ。アンネリーゼだって、結局はあなたが助けたのよ」

それは謙遜でもなんでもなく、本当のこと。私たちが今回やったことと言えば、マティアスをあの館に連れて行った、たったそれだけなもの。

「エデルトリダ、バルド、セシル。ありがとう」

私たちを順に見やり、ほんのちよつとだけ気恥ずかしそうに、アンネリーゼが手を差し出した。それに私は、自分の掌を重ねる。

初めて会った時には、まさかこんな結末になるとは想像すらしなかった。きつと納得はできないまでも、彼女とフランスの結婚を見届けて、それで別れるとばかり思っていたのに。

今のアンネリーゼは、まだ少しばかり影はあるものの、それでも以前よりは遥かに柔らかい表情^{かお}を見せるようになっていた。

「もうあんな馬鹿な真似をしたらダメよ」

私の強い口調に、彼女は、はつきりと頷く。

「それに、自分を卑下しないで下さい。確かに、あなたやわたしの

ように魔導の能力を持つ人間の数は、極端なほど少ないかもしれない。だからと言って、自分が異質だなんて思わないで欲しいのです。『異端者』と言うのは、魔導を恐れた一部の人間が、魔導を使う一部の人間を一方的にそう決めつけ、押し付けた呼称に過ぎないのですから」

彼女の計画した復讐は、自分自身が「異端」という言葉のとおり
に忌むべき存在だと思っていたからこそ考え付いた方法だった。

彼女と同じ、いや、彼女以上の能力を持つバルドは、ずっとその
ことを気にしていたんだと思う。

弾かれたように顔を上げたアンネリーゼに、セシルが満面の笑み
で言う。

「ああ、言いたい奴には勝手に言わせとけばいい。人間なんて、他
人と違って当たり前だろ？ その違いが珍しいものだからって否
定されても、だから何だ、文句あるか！ って胸張って、堂々とし
てりゃいいんだって」

二人の科白に、アンネリーゼは咄嗟に返す言葉もなく、大きく目
を見張っていた。それからやっとで、「ありがとう」と囁く。今に
も泣き出しそうなほど、顔を歪めて。

私たちは、カヤとハンスにも、それぞれ別れを告げる。

カヤは、これから向かう予定の街をいくつか教えてくれた。ハン
スも、またどこかで会おう、と言って微笑んだ。

少しばかり馬を進めた彼らを見送る。

そこで私は、最後にもう一度だけ、アンネリーゼの元に走った。
振り向いて、マティアスの背を離して馬を下りた彼女に、声を落と
してこっそりと伝える。

「余計なお世話かもしれないけど。好きな人のためとは言え、反目している相手に土下座までできる人なんてなかなかいないわ。大切に
にして」

それにアンネリーゼは驚いたように目を丸くした。馬上のマティアスを見上げ、そして再び私に向き直ると、はにかんだ。

「ええ、きつとそうする。これからは、復讐のためじゃなく、彼のために歌うわ」

それから、何かを思い出したとしても言うようにとびきりの笑みを浮かべ、こそりと私に耳打ちする。

「私も、余計なお世話かもしれないけど。エデルトリダも素直になつて。でないと、他の女に彼を取られるわよ」

「――は!？」

「劇場の女の子たちの間でも、けっこう人気だったのよ。ボヤボヤしていたら、きつと後悔することになるわ。私が少し意味深に彼を見てただけでヤキモキするほどなんだもの、好きなんでしょう?」

悪戯いたずらつぽく片目をつむり、アンネリーゼは再びマティアスの手を取り、馬の背に乗った。私は呆然としたまま、離れて行く彼らを眺める。その姿が見えなくなる頃に、マティアスが最後に一度、大きく手を振った。私も、それに手を振り返す。

上げた手をそのまま追い風に吹かれる髪にやり、街の入口を振り返る。瞬間、バルドと目が合った。別に、これと言って、何かが変わったわけでもない。見慣れているはずの、相棒の姿。

なのに、私はなぜか、顔が熱くなるのを抑えられなかった。

第33話（後書き）

【番外編】

「私も、余計なお世話かもしれないけど。エデルトリダも素直になつて。でないと、他の女に彼を取られるわよ」

「――は！？」

「人気投票で、今、一位なのよ。まあ、私も、ただどね（勝ち誇った笑み）」

……そんなわけで、投票ありがとうございますっ！（土下座）

バルドへのコメントに笑ってしまいました！。嬉しいです（*^^*）

それにしても、色々と言われてますね、この人（笑）

と思つたら、今確認したら、なんとアンネリーゼが一位でした！なので、上のセリフを

「人気投票で、今、男性キャラでは一位なのよ。まあ、私が更に上だけどね（女王然とした、勝ち誇った上から目線の笑み）」

に変更したいと思います。

それにしても、まさかサブキャラが！（驚）奇抜な復讐プランが受けているのでしょうか？

次回から、ラブコメ突入いたします。

第34話

宿へと引き返す途中で、一歩前を行っていたセシルが突如、私を振り向いた。

「エディ、銃」

そして出し抜けに、手を差し出す。その意味がよく分からなくて、私は瞬きをした。

「え、何、まさか今ここで教えろってこと？」

「違うつて。貸してくれってこと。銃と、それからガンベルトも」

「なんで？ 自分があるじゃない」

「いいから」

私が怪訝な顔で首を傾げながらも言われた通りにすると、セシルはそれを自分の肩に掛けて、お得意のにやりとした笑みを満面に広げた。

「デートにコレは似合わないだろ？ もう仕事は済んだんだ、遠慮なく行つて来いって」

「……！ デートって！」

思いもしていなかったその単語に、私は思わず大きな声を出す。それに、どうせまたバルドにも否定されるだろうと考え、彼の顔色うかがを窺った。

あの晩バルドは、私たちが出かけたことをデートだとセシルに言われ、それを否定したのだから。

それを思つて身構えたけれど、彼の口から、予想外の答えが飛び

出した。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「へ!？」

あつさりとした意外な答えに、素つ頓狂な声を出す私を、セシルが促す。

「エディ、今日くらい蹴りは控えろよ」

言いながら、さつさと踵を返す。かと思えば立ち止まり、「あと、殴るのもな」と付け足した。私は慌てて叫び返す。

「あ、あんたも、二挺拳銃とか言つて、私の銃で遊ばないでよ!？」
「ちょ、子供扱いすんなつて! でもなんかカッコイイかもな、それ」

笑いながら足早に去るセシルの後ろ姿を眺めていると、バルドが隣りに立ち、私は顔を上げた。

「行きますか？」

「……うん」

どこことなく照れくささを感じて、私はそれをごまかすように、小さな声で答える。

二人並んで、華やかな街中を歩く。いつもと違って無言が何となく気まづかったのもあって、ふと、ぼつりと呟いた。

「あの晩、セシルにデートって言われて違うって言ったのはどうして？」

こうして約束を果たしている今となつては、どうでもいい些細なことかもしれない。けど、あのことで私は、バルドの気持ちがよく

分からなくなっていた。

だから、どうしても確認したかった。

「ああ、あの日は単に気分転換になればと思ったただけだったんです。それに、エデルトリダの性格から言っても、依頼を受けている最中に、そんな気にはなれないでしょう？」

「ええ、まあ、確かに」

——な、なら、そう言ってくれば良かったのに！

内心ではそう叫んだものの、そのもつともな答えに、心のどこかに燻っていた不安が消えるのを感じて、そつと頬を緩める。

やがて私たちがさしかかったのは、大きな店が軒を連ねる、活気に満ちた大通り。その端で、バルドが何かに気付いて足を止めた。

「ちょっと寄ってもいいですか？」

彼が示したのは、この通りにあるにしては比較的小じんまりとした、雑貨店だった。

見た目はきれいに整えられているけど、他の店が観光者向けの品物を扱うのに対して、こちらはそれよりも実用的な物を置いてある様子。

「いいけど、何か買わないといけない物とかあったっけ？」

店に向かいながら、それにしても、と私はこっそり溜め息を吐く。

バルドとは、いつも一緒にいるのが当たり前で。

だから、デートって言ったところで、よくよく考えると、結局い

つもと変わることもないのよね。こうした買い物だって、私たちに
とっては日常のことだし……。

なんだかこれって、微妙な気分だなあ。

ぼんやりと考えにふけっていると、店の主人に代金を払い終わっ
たバルドが私を呼んだ。

「エデルトリダ、これを」

なにげなく手渡されたそれに、固まる。それは、一冊の本。あの
アナとの闘いの時に破れてしまった、読みかけのタイトルだった。

「うきやああああああああッ!？」

「つて、ええっ!？」

気付いたら、私は自分でも何だかさっぱり理解できない悲鳴を上
げて、それを放り投げていた。

これまで、読んでいる本のことをバルドとセシルには、ひた隠し
にしていた。恋愛小説なんて似合わないって、絶対冷やかされるは
ずだもの!

そう思っていたのに、バルドはそれを、数ある中から選んだ。あ
まりにも予想外のこと激しく動揺して、咄嗟に出た行動がそれだ
った。

「あの、その反応って、どういう意味ですか？」

落ちたそれを拾い上げながら、バルドは複雑な表情で訊ねる。

「あつ、ごっつ、ごめん! びっくりしたから、つい!」

私は慌てて首を横に振って、必死に弁解する。

「なんでこの本だって知ってたの？ その、いつの間にか、バレてた？」

俯き加減に小さな声で尋ねると、彼は一瞬、首を傾げる。それからやっとで私の言っている意味が呑み込めたらしく、手の中の本を改めて確認した。

「ああ！ あれ、この本だったんですか！ なら、ちょうど良かったですね」

え？ と言うことは……

「知らないで選んだってこと？」

「はい。エデルトリダも、たまにはこういうものも読みたいんじゃないかと思っただんですけど。正解でしたね」

嬉しそうに言う彼を、私は、呆気に取られて見つめる。

それから、今度はちゃんと受け取ったそのの、見慣れた赤茶色の表紙に目を落とした。指先でそつと文字に触れて、微笑む。

「ありがとう、嬉しい。花とか、高価な宝石とかそういう物を貰うより、ずっと」

それは、心からの本音だった。

私のお礼に、バルドは満足そうに笑った。

「さて、これからどうしましょうか。行きたい所はありますか？」

私は少し考えてから、この街を出る前にしておきたいことが、ひとつあったことを思い出す。

差し出された手を取って、頷いた。

第34話（後書き）

あと二回の更新で、完結予定でいます。

今現在、ほぼ書き終わりましたので、「あ、やっぱり変えたい」とか予定外のことがない限りは、数日のうちにアップできると思います。もう暫くお付き合いしてやって下さいませ！。

第35話（前書き）

ラストまで、まとめて二話投稿します。

第35話

蠟燭に、火を灯す。

これは、エルゼへの手向け。

私たちが次に向かったのは、街にある教会のうちのひとつ。ちょうど礼拝が済んだ時間らしく、そこには誰の姿もなかった。

あの日、焼け落ちる劇場の中で、不可解な出来事があったとマテイアスは言った。

駆け付けたマテイアスの腕に逃れたアンネリーゼを、フランツは追って来た。そして彼女を取り戻そうと手を伸ばしたかと思うと、突如凍り付き、恐怖の声を上げたという。

それからアンネリーゼに驚愕に歪んだ形相を向け、「エルゼ、なぜお前がここに」と叫んだらしい。

それと同時に、二人とフランツの間に焼けた天井が崩れ落ちて、その後は私たちの知つての通り――。

もしかしたらフランツが見たものも、それに私たちが見たあの姿でさえも、極限の状況が見せる幻だったのかもしれない。

けれど、私たちは、何度も彼女に助けられた。あの晩のエルゼの正体は何であったとしても、私は彼女に、心からのありがとうを伝えたいと思う。

劇場跡に花を供えるよりも、私はこのほうがいいと考えた。だって、凄惨な事故現場よりもこの、小さいけれど暖かい光溢れる神聖な場のほうが、彼女に相応しいもの。

ぐるりと辺りを見回してから、祭壇前に立ち、優しい微笑みを浮かべる女神像を見上げる。その足元には、無数の蠟燭の光の束が捧

げられている。

「今から思い返すと、とんでもない数日だったわね」

瞬く間に過ぎたあの一週間を改めて思い起こし、私はバルドに同意を求めて呟く。

「ええ、歌姫の護衛のはずが、彼女を攫^{さら}うと言った側に付いたりして」

「かと思えば、今度はあの火事騒ぎだものね」

たくさんの怪我人を治した彼は、今やこの街の有名人となっている。

過去にあったエルゼの一件は、街人全員が望んだことではなく、有力者である支配人親子に付いていた人々が起こした惨劇だったらしい。

実際に手を下してはいないとは言え、止めることもできなかったことを悔やんでいるらしい人々が、その罪滅ぼしの意識もあるのか、私たちに必要以上に親切にしてくれていた。

それに、バルドに医師として残って欲しいという声も、たくさん上がっていたりもする。

「ねえ、この街に残りたい？」

半ば冗談、半ば本気で、訊ねてみる。即座に否定するかと思ったのに、相棒は、暫く考えた後に、真剣な表情で頷いた。

「それもいいかもしれませんね」

「……え？」

私は、その意味を考えて、固まってしまう。

だって、これまでずっと、バルドがいて当然と思い込んでいた。でも、別に彼と私は、仕事上での契約を結んでいるとか、そういうわけじゃない。

その治癒能力を金稼ぎに利用しようとした輩やからに追われていた彼を、私が助けたのがそもそもそのきっかけだった。それからお互いに何か取り決めたわけでもなく、自然と共に行動をするようになって、もう二年以上が経つ。

だから、この状況がずっと続くものだ、何の根拠もなく当たり前に考えていた。もしかしたら、別れることになるかもしれないなんて——今まで、考えもしなかった！

「だ、ダメっ！」

気付いたら、私は叫んでいた。あまりに真剣な声に、バルドは驚いた様子で目を丸くする。それから、慌てて言い繕う。

「いつもの冗談ですって。エデルトリダとセルが、もしかしたらどこかで怪我をしているかもしれない、なんて考えながら生活するのは、心臓に悪そうですから」

軽く笑いながら言うけれど、私はそれに答えない。

「えーと、どうしました？」

私の顔を覗き込むその目は、困惑を浮かべている。

「だめ、私……その、バルドがいないと困る」

爪先つまさきに目を落として、呟く。本を握り締めた手が、震える。

「だから、冗談ですって」

「違うの、今だけの話じゃなくて」

どう説明していいか分からなくて、言葉を探す。

アンネリーゼは素直になれって言ったけど、私は彼女のように真っ直ぐに気持ちを伝えることができない。それが自分でももどかしかった。とにかく、何とか伝えようと、たどたどしく言葉を紡ぐ。

「バルドが、アンネリーゼに惹かれてるのかもしれないって思った時、私、頭が、変になった」
「頭が、変？」

あああ違っつ！ これじゃ単に馬鹿になったみたいない方じゃない！

ひとり内心でパニックの私を知ってか知らずか、バルドが吹き出した。

ちょッ、笑うところじゃないってば！

「それなら、お互いさまです。わたしも、変になった。エデルトリダが、フ란ツの花嫁になると言っ た時に」

「……あ」

「式のことを考えたら、とても耐える自信がなかった。もし、その時になったら、飛び出していたかもしれないかった」

「その時って、式の始まり？」

「それもありますけど」

そこでバルドは、顔を顰^{しか}めて言い淀んだ。それから、躊躇^{ためら}いがちに言う。

「つまり、その、キスです」

そのたつた二文字の言葉に、瞬間、私の顔に血が上る。と、同時に、一気に血の気が引いた。アンネリーゼのことで頭がいっぱいだったとは言え、そのことを考えていなかった自分の愚かさに、今更ながら悪態をつきたくなる。

えーと、つまりその、あれ？ もし前日にあの事件がなかったとしたら、それはそれで、私はあのフランクと、キスしてたかもしれないってこと！？

何、この、どっちみち最悪な結末みたいな、「デッド・オア・アライブ」どころか「デッド・オア・デッド」な状況で！

い、いやああああああああッ！

「そこは全く考えてなかったんですね」

血相を変えて、頭を抱えて座り込んだ私に、バルドは呆れたように苦笑する。

「当たり前でしょ、だって、そこまでの余裕なんてなかったもの！」
「なら、まだ少しは良かった。それを分かっていて受けたのだばかり思っていましたから」

あの時あんなにバルドが怒っていたのは、てっきり、相棒である自分の立場をまるで無視されたように感じてのことだと思ってた。でも、そうじゃなかったんだ。それなら、あの剣幕にも納得できる。だって私も同じ立場になったとしたら、きっと同じくらい怒ると思うもの。

——って、あれ？ と言うことは、つまり。

「じゃあ、私はバルドにとって相棒っていうだけじゃなくて、ちゃんと女として見られているって思っているの？」

私の質問に、一瞬、彼は眉根を寄せる。

「男だとは思ってませんけど？」

「ち、違つ、そういう意味じゃなくて！」

もう、相変わらず、こういうことには鈍いわね！
私は勢いよく立ち上がって、バルドに詰め寄った。

「だから、好きだから嫉妬したと思っていいのかってこと！ 私が
そうだったのと同じで」

言葉を呑む。

咄嗟^{とっさ}に出してしまったそれは、引つ込めることはできない。私は、
たぶん今、喉まで赤くなっているはず。

「あの、それは……告白と受け取っていいんですか？」

まさか私の口からそれが出るとは考えていなかったんだと思う。
わずかに驚きを含んだ声が、問う。

「えっと、だから」

それに往生際悪く言い淀み、すぐに視線を外す。数秒たつぷり逡
巡した後、覚悟を決めて、真っ直ぐに彼を見上げる。

「……答えを、教えて」

バルドは一度大きく目を見張り、それからそつと微笑んだ。恥か
しさから思わず顔を背けようとしたら、それを遮るように、彼の太
きな手が私の両頬を包んだ。
私はゆるりと目を閉じる。

やがて、唇が重なった。

最終話

「で、次はどこに向かう？」

馬の背に跨り、街からだいぶ離れた所で、セシルが尋ねる。

私たちは、これからの目的地を決める前に、あの街を静かに後にして来た。周囲に広がる牧草を撫でる心地よい風に吹かれながら、整備された広い道を急ぐことなく進む。

正面から、こちらに向かって来た男女の二人連れとの通り過ぎざまに、「歌姫」と言う言葉が聞こえた。きっと、あの劇場を目当てに向かっているのだろうと思うと、心なしか気の毒に感じてしまう。だって、それは今はもう見る影もないのだから。

つい旅人を目で追っていた私は、セシルの「なあ」という呼び掛けに我に返った。

「そうね、とりあえずで出て来ちゃったけど。決めてなかったな」

私のどこか上の空の返答に、セシルは肩をすくめる。しばしの沈黙の後、急にバルドに向かって彼は訊ねた。

「エディは歌姫が夢で、俺は有名なガンナーが目標だけだよ。バルドにも、そういうのってなんかあんの？」

「なんですか、突然？」

「ちよつと気になっただけ。言えないことなら、いいや」

「言えないことって例えば、どのような？」

「例えば……世界征服とか？」

にやりとして揶揄するセシルに、バルドは相変わらずの真顔で、
ああ、と頷く。

「それって、本気でやろうと思ったら、絶対に自分一人の世代では成し得ない壮大な事業になりかねませんよ。まずは拠点入手に優秀な人材の育成、それに世界隅々まで広がる情報網が必要となるでしょうし。その前準備の段階だけで、自分は老衰死しそうですね」

「や、だからさ、真面目に検討しないで否定しろよ」

「セシルが有名なガンナーになった暁には、それを目指したいのかと思いますよ」

「んな面倒なこと、しねえよ」

セシルの素早い返答に、バルドは笑う。それからふと視線を手元に落とした。

「……言えないのではなくて、ないのです。わたしにはまだ、二人のように、しっかりとした目標はない。ただ、あの閉鎖された故郷を出て、外の世界を見たかった」

「バルドの故郷で、どんな所なんだ？」

「わたしの故郷は、長い間、外界から隠れて存在しています。その理由は、かつて大昔にあった異端狩りです」

その言葉に、私もセシルも息を呑む。今回の事件のきっかけにもなった異端狩り。その詳細を、私たちは知らなかった。

淡々とバルドは語る。

「わたしの故郷の者は皆、何かしらの魔導を扱うことができるのです。それは技術的な習得も必要としますが、何より重要なのは、身体に流れる血だと言われています」

身体に流れる血。

私は、あの劇場支配人の男が「呪われた血」と言っていたことを

思い出す。

「もう遠い昔の話ですが、わたし達の先祖はその能力を、求められれば人に貸し与えていました。十分に納得できる理由があれば、戦いに協力することもあった。他には、予言などを行っていた者もいました。かつては、そうやって他の国の人々と共存していたのです」

子供の頃に読んだお伽噺に、魔法使いがよく出てきたっけ。それは、単なる伝説じゃなかったのね。

私とセシルは、無言のまま、続きを待った。一度、間を置き、バルドは再び語り出す。

「けれど、始めのうちはその能力を有難がっていた人々も、いつしかその力を恐れるようになった。味方であるうちはいい、けど、もしそれが敵に回ったら？　そういった恐れは、あつという間に広がったといえます」

ぽつりとセシルが意見を挟む。

「自分にはない自分よりも強い力を、人間って、敬うと同時に怖がるもんな」

バルドは頷いた。

「それからです。世界を、混乱が支配した。わたし達の先祖は、次々に捕らえられ、殺されたと言われています。見分けるのは簡単でした。褐色の肌に加え、両手首に刺青を持つという身体的特徴がありましたから」

私は思わず、バルドの手首に目をやった。そこに彫られた、黒いバンゲルのようにも見える、不思議な紋様。

褐色の肌を持つ人なら、別に極端に珍しいということはない。砂漠が広がる地域に住んでいる民は、彼よりも更に浅黒い肌をしているのだから。

でも、その刺青は別。

私の視線に気付き、彼は、腕を軽く持ち上げて見せた。

「これは、意味のある模様なんです。魔導の種類ごとに定まった模様があり、それを習得した時に、その証として入れるものでして。あとは、伝統的な意味合いが強いですけど」

バルドの説明に、セシルは首を傾げた。

「俺はてつきり、呪文をド忘れしないように書いてあるんだと思ってただけど」

「いや、それはないですね。と言うか、もしそうだとしたら、手首だけじゃ足りませんって」

苦笑しつつもきっぱりと冷静に否定する。

「あれ、でも、アンネリーゼの肌は白かったわよ」

そこで浮かんだ私の疑問に、セシルも「そう言えば」と相槌を打つ。

どんな歌人も^{うたびと}適わない、聴く者を深く惹き付けるアンネリーゼの歌。まるでそれ自体が呪文であるかのようにだった。

けれど彼女の外見は、稀に見る美人であることを除けば、私たちと変わりはない。それに、その姉であるエルゼの、あの幻の姿も。

「アンネリーゼとエルゼは、外交があつた時代に生きた私の祖先の血を、継いでいたのでしょう。とは言っても相当昔の話ですから、肌の色の特徴は残っていないくて当然です。けれど、その能力は僅か^{わず}ながらも引き継いだんだと思います。時には、先祖返りすることもあるでしょうから」

「でも彼女は、魔導を扱う技術はないはずだわ。あなたの故郷で育

「つたわけじゃないもの」

「そうですね。だから、その能力は弱いものだった。わたしの危険察知と同じです。呪文を唱えなくても、無意識に働く能力です」

ああ、なるほど。そういうことが。

私たちが納得したのを確認し、バルドは再び話を元に戻す。

「——その虐殺の犠牲となった者の数は、数千とも数万とも伝えられています。正確な数までは今となつては分かりません。生き残った者達は身を隠し、外界との接触を絶つて命を繋ぎました。それが、わたしの故郷が世間に知られていない理由です。もしその場所を知ることができたとしても、街全体が不可視の魔導に守られているので、見つけることはまずできません」

そこで私とセシルは、一瞬、顔を見合わせた。きつと、同じことを不思議に思っている。

再び私が口を開いた。

「なぜ、そこを出ようと思ったの？ 外に出るのは、恐ろしくなかった？」

もしそれだけ長いこと誰も外に出たことがなかったのだとしたら、そこを飛び出すのは、極端に言えば死ぬ覚悟でもなければできないんじゃないかな。もしかしたら自分の身に「異端狩り」の危険が及ぶかもしれないというのだから、なおさらだと思う。

そして実際、私がバルドを初めて見た時には、彼は七人もの一団に追われていた。武器も持たないたった一人を大勢で追い詰めるなんて尋常じゃないと思った私は、半ば無意識に銃に手を掛けていたんだっけ。

バルドは故郷を思い出すように、遠くを見やる。

「わたしの故郷は四方を高い壁に囲まれ、その上、魔導によって守られている。けれど、それは同時に、自分達を閉じ込めている檻でもある。わたしにはそう思えるのです。先祖が受けた仕打ちを軽く考えるわけじゃない。けれど、外との繋がりを完全に絶ったまま恐れて暮らすのも、間違っている気がするのです。確かに、世の中は良いことばかりではない。けれど、反対に悪いことばかりでもないと思うのです」

言って、私とセシルに笑みを向ける。

「だから、わたしは故郷を飛び出した。それで良かったと思ってます。確かに、大変な目に遭いかけたこともあった。でも今は、こうして信頼できる仲間がいる」

私とセシルも、笑みで応える。

それだけで、私たちには十分だった。

ややあつて、突然セシルが弾む声を上げた。その顔は、いつも以上に活き活きと輝いているように見える。

「わかった！　なら、バルドが外の世界とその故郷の橋渡しになればいいんじゃないか？　それでいつかお互いの溝をなくして、また昔みたいに共存できるようにする。それを目標にしてさ」

そのあまりに壮大な提案に、バルドは驚いたように彼を見た。そのまま、呆気に取りられて固まっていたかと思うと、ふと、口角を緩ませる。

「それはまた、世界征服並みに時間がかかりそうですよ」
私も、そのことを考えてみる。

確かにそうだわ。「異端」を信じている人の根強い意識を変えるのは、一筋縄ではないかない。

それに、バルドの故郷の人々だって、誰もが彼のように外の世界を理解しようと、そして赦そうなどとは思ってはいないかもしれない。

それらを変えて行くには、相当な時間が必要となるはずだから。

バルドのもつともな意見に、上目遣いにそのことをじっくり検討してみたらしいセシルは、「ああ、そりゃまあ、そうだな」と苦々しく唸る。

けれど、バルドは否定したわけではなかった。でも、と、笑いがら続ける。

「もしそれが実現できたら、どんなに良いことか。そうですね、始めてみる価値はあるかもしれない」

それに私も頷いた。

「私たちも手伝う！ あの街に起こったような過ちを、繰り返さないために」

一部の人の偏見から、惨^{むじ}いやり方で命を奪われたエルゼ。

そのために、哀しい人生を歩むところだったアンネリーゼ。

彼女たちのような人物を、もう二度と出したいくないと思う。

「んじゃ、次の目標は、世界征服ならぬ世界平和ってことで！」

「それはまた随分と大きく出ましたねえ」

バルドの苦笑いをものともせずに、セシルは自信満々に答える。

「人間、実現できるって思うことは実現できるもんだし、できないって思うことはその通りにできなかつたりするもんだぜ？　だからどうせならこうドカンと、夢はデカいほうがいいって！」

相変わらずその年齢にはそぐわない迷言、もとい名言を残し、彼は一足先に馬を進ませた。

その後ろ姿を見送りながら、セシルの言葉を、バルドは噛み締めるようにゆっくりと反芻する。

「実現できると思うことはできる、ですか」

「夢はデカいほうがいい、なんて、ほんとセシルらしいというか」

それに私も続け、二人して声を上げて笑う。

気付くと前方に、数日前に訪れた港町が広がっていた。

地平線と空が混ざり合う一面の青の中を、帆を張った船が浮かんでいるのがまるで玩具おもちゃのように見えて、私は目を細めた。

頭上を飛ぶ海鳥の声に誘われながら、私と相棒は馬を並べて、セシルの後をゆっくりと追う。

ふと、アンネリーゼの歌声が聴こえたような気がして、空を見上げた。

彼女は今頃はきっと、この広い空の下どこかでひとりのために歌っているだろうと思い、私は微笑む。

あの煌びやかなホール、それに復讐ふしうという名の籠から解き放たれて――。

<
E
N
D
>

最終話（後書き）

終わりましたー！

ここまでお付き合い下さった読者様には、本当に大感謝です、ありがとうございます。

キャラクター投票に一票投じて下さった方々にも、重ねてお礼を申し上げます。

現在、アンネリーゼがぶつちぎりで一位を独走しています。

実は作者としては、嫌われるキャラだろうと思って書いていたので、本当に驚いています（笑）

「歌姫」は、書きたいと考えていたものがだいぶ書けた作品でした。

「嫌味な人物」とか「劇場大炎上」とか「ラブコメ」とか。キスシーンも何気に初挑戦でした。

ストーリーに係わる恋愛を書くのは全然平気なんですけど（マティアスとアン）、そうではないオマケ要素的な恋愛は、なんと言いますかこう……書いた後になってアップを躊躇うチキンですorz

「ここ、いらないんじゃない？」とかまで思ったり。

作者のそんな微妙な心境を反映してか、エデルトリダがものすごい乙女になったような気がします。

もし宜しければ、感想を頂けると嬉しいです。

今後の執筆の参考にさせていただきたいと思いますので、お願いします（^^）

今後また短編をアップするつもりでいますので、とりあえずこのまま、完結ボタンは押さないでおこうと思います。

では、本当にありがとうございましたー！

【NG集という名の番外編】

何度か出たボツネタを、NG集としてまとめてみました。

活動報告でこっそりとやってみたら、意外と好評でしたので、勢い余って本編に追加です（笑）

本編とは大いに流れが異なったりしますので、あくまでもコメディ版としてお読み下さい。

【第15話より】

エデルトリダに銃を突きつけられたマティアスが、彼女を攫うシーン。当初は、こんな展開でした。

Take 1, Action!

「悪いが、あんたにも一緒に来てもらおう」

瞬きをする間にも、片腕を私の胸に回し、軽々と抱え上げた。そしてそのまま、逡巡することなく、部屋を飛び出す。

そこで勢い余ってセシルとぶつかりそうになった。バルドから取り戻した銃を手にしたまま、セシルが驚愕の声を上げる。それを一瞥すらせず、足を一度たりとも止めずに、男は廊下を走り抜けて行く。

私はまるで荷物のように小脇に抱えられたまま、背後に首を捻った。バルドが、そしてその後ろを一瞬出遅れたセシルが、全力で追って来る。

私は、どうすべきか判断つかないでいた。今、この男を止めるのは簡単で、もう一撃足に向かって放てばいいだけなのに、それが躊躇われた。それをするには、「復讐」という言葉が引かなかった。それに、バルドが言っていた「この男とあの剣を操る女には、人を殺せない」ということも。

何よりここでこの男を捕らえ、フ란ツに差し出す義理もないように思えた。あのようなことがあった以上、依頼を律儀にこなすつもりなど、さすがに私も消え失せている。

ドレスの長い裾が床を掠め、逃げるのに邪魔になつたらしい。男は舌打ちして、私を両腕に抱え直した。私の上半身を後ろ向きに己の肩にまで引き上げ、胴と膝をしっかりと支える。それでも、やはり長過ぎるほどのスカートは多少の邪魔にはなっているようだった。けれどこちらとしては、お陰で追ってくる二人を確認しやすくなり、困惑したまま目を向けた。

気付くと、セシルが銃を構えようとしていた。けれど、相手は私を抱えている上に、お互いに全力疾走している状況で、なかなか照準を合わせられないでいる。

「セシル、撃つのはダメ！」

舌を噛みそうになりながら、私は叫んだ。一度では声が届かず、できる限り身を乗り出して、何度か繰り返す。途端、男が方向転換をしたせいで私はバランスを崩し、肩から背中の方へと落ちかけて、慌てて服を掴む。すると、脇腹に滲む赤が目に見え込んだ。

「おい、下手に動くと落ちるぞ」

「それならもつと丁重に扱って欲しいわよ！ あんたが抱えてるの

は、荷物じゃなくてレディなのよ!？」

私は不安定に揺られながらも身を起こし、相手の顔を上から睨み付けた。攫われようとしているのに逃れようとせず、仲間を止める私の行動に、男が怪訝な表情を一度だけ向ける。けれど目が合うと、また何事もなかったように逃走に集中する。

と、次の瞬間。

「——ッ!」

セシルの銃が、咆哮を放ったのが遠くで聞こえた。真横を掠めて行く弾丸に、私は思わず頭を抱え、男は鋭い舌打ちをする。

「……っ、ちょ、ええ?」

私は呆然と眩き、再び後方を見やる。すると、私の制止の声が届いていなかったらしいセシルが、ハンマー撃鉄に手を掛けているのが目に飛び込んだ。

「ちょっとー! 撃つなって言ってるでしょうにッ　!!」

セシルが引き金を引くよりも早く、今度は私の銃が軽い音を立てていた。

自分の背後で始まった突然の銃撃戦に、私を抱える男は、半ば悲鳴を上げかけていた。

「あんたたち、仲良いのか悪いのか、どっちだー!」

(……以下略)

【色んな意味で収集が付かなくなりそうだったので、カット
r z】

【第34話より】

バルドが、エデルトリダに本を渡すシーン。

Take 1, Action!

「エデルトリダ、これを」

なにげなく手渡されたそれに、固まる。それは、一冊の本。あの
アナとの闘いの時に破れてしまった、読みかけのタイトルだった。

「うきやあああああああああッ!？」

「つて、ええっ!？ 危なッ!！」

気付いたら、私は自分でも何だかさっぱり理解できない悲鳴を上
げて、それをバルドに向かって投げ付けていた。

これまで、読んでいる本のことをバルドとセシルには、ひた隠し
にしていた。恋愛小説なんて似合わないって、絶対冷やかされるは
ずだもの!

そう思っていたのに、バルドはそれを、数ある中から選んだ。あ

まりにも予想外のことに激しく動揺して、咄嗟に出た行動がそれだった。

「あの、本の角ってけっこうな凶器だって知ってます？」

顔面ギリギリでそれを受け止めたバルドは、こころなしに青い顔をして訊ねる。

（……以下略）

【さすがにこれを笑って許したら、どんだけM男なんだバルド！……と思い、カットorz】

Take 2 , Action !

「エデルトリダ、これを」

なにげなく手渡されたそれに、固まる。それは、一冊の本。あのアナとの闘いの時に破れてしまった、読みかけのタイトルだった。

「うきやああああああああああッ!？」

「つて、ええっ!？」

気付いたら、私は自分でも何だかさっぱり理解できない悲鳴を上げて、それを放り投げていた。

これまで、読んでいる本のことをバルドとセシルには、ひた隠しにしていた。恋愛小説なんて似合わないって、絶対冷やかされるはずだもの！

そう思っていたのに、バルドはそれを、数ある中から選んだ。あまりにも予想外のことに激しく動揺して、咄嗟に出た行動がそれだった。

「なんでその本だっけ知ってるの！？ キモい！」

「ちょ、酷ッ、そこまで言います！？ さすがに凹みますっで、それ！」

(……以下略)

【普通に喧嘩別れしてバッドエンドになるのでカットorz】
決め(?)のセリフは、バルドの「実家こきょうに帰らせていただきますッ
！」です。

……そんなわけでして、わりと苦労していた34話でした(^^;)

以上、NG集でした。

「人気投票御礼短編 バルド」(前書き)

人気投票一位記念のバルドの短編です！ お待たせしました！！
…… えつとですね、キャラの性格上、思い切り堅苦しい雰囲気にな
ってしまいましたので、口直し(?)に、この話のエデルトリダ目
線でのバージョンもただ今執筆中です(^^;)
たぶん近日中にアップできると思いますので、興味のある方はまた
宜しく願います。

「人気投票御礼短編 バルド」

馬の蹄が、強く地面を蹴る。

その首に縋り付くように身を低くしたまま、あぶみ鐙に掛けた両足に力を籠める。もう限界のスピードを既に出し切っている馬の脇腹を、そうと分かっていても、それでも何度も強く蹴った。

肩越しに背後を振り返る。

相変わらず消えることのない、全身に重く伸し掛かる「感覚」。

背後に迫る複数の影に、風に乗って耳に届く、囁し立てるような笑い声や罵声。

わたしは今、追われていた――。

事の発端は、遡ること二日前。

故郷を一人で飛び出してきたばかりのわたしは、旅の途中だったある一家と出会った。彼らの話によると、遠くに住む親戚の元を家族総出で訪れるところだと言う。

小さな馬車には、若い夫婦と、その子供の、まだ五歳になったばかりだという女の子が乗っていた。彼らはとても人当たりが良く、偶然行く道が重なったわたしにも親切だった。

その事故が起きたのは、その親戚が住むという小さな町に着いた時だ。前を注意せずに飛ばして来た馬の硬い蹄が、運悪く、その女の子の頭を掠めた。

最悪の事態は免れたものの、慌てて駆け寄った母親の腕に抱かれ

た女の子は、ぐったりとしていて誰が見ても危ない状態だった。
父親は医者を探して町を走り回ったが、そこにはその子を助けられるほどの技術を持つ人間はいなかった。

泣き叫ぶ夫婦と、蒼白な顔をしたその子供を、わたしは見捨てられなかった。

故郷を出て以来、能力を隠し、手首の入れ墨も袖で覆い、人目に触れないように注意していた。

けれどその時は、そんなことは些細なことに思えた。自分の正体を隠し通すことよりも、その子の命を救うことのほうが遥かに重要だった。

だからわたしは選んだ、治癒の魔導を使うことを。

背後で、何かが弾ける音がした。

驚いた馬が嘶き、パニックを起こしかける。それを何とか制御し、ひたすら前に向かって疾駆することに集中させる。

あれは、あの音は、確か「銃」という物だ。

息を切らしながらも目の端で確認すると、再び火花が散った。ただし、上空に向かって。追手は、わたしをここで殺すつもりはないらしい。けれど、もし捕まったらどうなるのだろうか？ それこそ今すぐに死んだほうがましだと思っような目に遭わされるかもしれない。

刹那、脳裏を過つたのは、祖先である人々が辿ったという末路――。それを思うと、背筋を冷たい汗が落ちるのを感じた。全身が張り、口の中が一気に乾く。

その危険性を全く考えずに故郷を出たわけではなかった。多少のことは覚悟の上での決断だった。

けれど、それが現実のものとなってしまうかもしれない局面にこうして立たされると、その決心すら甘かったように感じてしまう。

あの時、人前で魔導を使ってしまったのは迂闊だったかもしれない。それでも、あの子供を見殺しにすることもできなかった。一体どうすれば良かったのだろうか？

「……ッ！」

再び前を見据えた瞬間、それに気付く。心臓が止まりそうになった。

馬に乗った人影がひとつ、わたしの行く手に立ち塞がっている。その人物は、素早く腰のそれを抜き放つ。銀色が、太陽の光を反射する。

咄嗟^{とつさ}に手綱を引き絞るべきか、ほんの僅かな間だけ逡巡した。

「止まらないで、こっちまで走って！」

まるでわたしの考えを読んだように、声が促す。

瞬間的にその人物を信用したというわけではなかった。

ただ、故郷を出てから感じるようになった「感覚」が、その人物は「危険ではない」ということを告げていた。だから走った。「彼女」に向かって、真っ直ぐに。

タン、と、軽い音が響いた。続けて、二発、そして三発。

「彼女」が放ったそれは正確に、そして確実に追手の数を減らしてゆく。

六発目が放たれると同時に、わたしの馬は、彼女の横を走り抜けた。そこで手綱を強く引く。全力疾走していた馬は勢いをすぐには落とせず、後ろ足で立ち上がり、嘶いた。いななそれを何とか落ち着かせると同時に、「彼女」を振り返る。

真っ先に目に飛び込んだのは、頭上の太陽の光をいっぱいを受けて輝く銀色の髪だ。

その細い肩越しに追手のいた方向を確認すると、残った一人が慌てて逃げて行くところだった。

伸ばしていた腕を下ろし、「彼女」がゆっくりとこちらに身体を向ける。驚いたことにそれは、綺麗な少女だった。

故郷を出てから初めてわたしは白い肌を持つ人を見た。けれど彼女は、これまで会った人々の誰よりも「白」という言葉のイメージが似合う。それは、彼女の輪郭を縁取る髪の色のためでもあるかもしれない。

深い青の瞳が、一度瞬きをし、それからずっと細められる。

固まってしまっていた自分にやっとで気付き、とにかく礼を言わなければ、と慌てて口を開いたところで、少女が先に言葉を発した。

「まったく、あんたのせいで、弾倉がすっかり空になっちゃったじゃない！」

彼女から飛び出した、あまりにも予想外の第一声に、思わず啞然としてしまう。それは、明らかに喧嘩腰とも取れる口調だった。

外見と内面のイメージの差に若干戸惑いつつも、わたしは彼女の

言葉を反芻する。

「弾倉？」

聞きなれない単語に、思わず首を傾げた。まだ呼吸は落ち着かない。

彼女は、わたしのその反応に苛ついたように眉を吊り上げる。けれど、すぐに大きな溜息と共に、手に持ったままだったそれを軽く一回転させて、腰に収めた。流れるようなその動作に、つい目を奪われてしまう。

「ていうか、あんた一体何をして、あんな武装した大勢に追われてたのよ？ どうかの組織から足抜けでもしてきたの？ それにしてはまあ、そんなタイプの人間には見えないけど」

叩きつけるような、そして早口の彼女のセリフに、わたしは呼吸を整えながらも何とかついてゆこうと必死になる。

「そ、組織？ 足抜け？」

「ちよつと、大丈夫？」

「はい、あの、助けてくださって、ありがとうございます」

「大丈夫って、そういう意味じゃなくて、私の言ってる意味が分かってるのかってこと！」

「あ、そっちですか？」

「そっちですかって、ああ、もう、なんかペースが狂うつたら！」

大袈裟な動作で空を仰ぎ、彼女は再び盛大な溜息を吐いた。

「いえ、組織とかそういうことではないんです。そうではなくて、わたしの」

慌てて言い繕いながらも、そこで、言葉を飲み込む。

彼女は自分を助けてくれた恩人だ。しかし、真実を言ってしまったのもいいものだろうか？

そこでわたしは、じつと目の前の人物を覗う。彼女はジリジリとした様子ではあるものの、続きが語られるのを辛抱強く待っている。彼女を信用すべきか否か、迷ったのはほんの一瞬だった。

直感というものなのかもしれない。不思議なことに、彼女を信用しても大丈夫だという安心感が全身を包んでいた。

「——わたしの持つ能力が、追われた理由です」

「能力？　どんな？」

「魔導です。先日、怪我をした人を治癒したところを見られてしまったようでした」

眉ひとつ動かさず、彼女はわたしを見据えたまま、何かを考えている様子だった。ややあつて、慎重に選んだらしい言葉が、その口から紡ぎ出される。

「……あんたもしかして、妄想癖とか虚言癖とかある？」

自分の直感は信用ならないかもしれない、と、すぐに思い直してしまうところだった。

そう言えば、彼女を信用してもいいとは思ったけれど、彼女が信用してくれるかどうかまでは考えていなかった。

あまりに盲点を突いた問いに対し、どう答えるべきかこちらが悩

んでいる間にも、彼女は素早く手綱を操っていた。

「まあとにかく、今後は変な人間と付き合わないように気を付けなさいよ」

「ええと、はい、そうですね、そうします」

別に付き合いがあつたわけではないけれど、それを彼女に言つたところですねりと納得はしてくれない気がしたので、とりあえず頷いた。

軽い速足で離れていくその背をしばらく見送ってから、わたしも自分の馬の腹を再び軽く蹴る。

辺りは起伏の激しい草木のまばらな土地だった。左右に迫つた崖の間をゆつくりと、馬の自由に任せて歩かせる。

そうしながらも、自分の幸運と、あの少女のことをぼんやりと考へた。

彼女は、一人で旅をしているのだろうか？ 外見からすると、年齢もわたしより下のようだった。なのに、あの神業と言つても過言ではないほどの「銃」の腕――。一体、どのような人物なのだろうか？ …… そういえば、名前も訊く暇もなかった。二度と会うこともないかもしれないとは言え、せめてそれくらい訊ねれば良かった。

そのことに気づき、今更ながらに、既に遠く離れたであろうその姿を振り返る。
すると。

「うわ！」

「な、なによ！？ レディの顔見てうわって、失礼ね！」

予想外なことに、そこに彼女がいた。しっかりと目が合うと、気まずそうに顔をしかめる。

「あんだ、なんで付いて来るのよ？」

「それって普通、自分よりも先を行っている相手に言うことじゃないですよ。あなたこそ、なぜ？ さつき反対側へ行きましたよね？」

苦笑いをしながらも問うと、彼女の頬が、みるみる赤く染まった。

「か、勘違いしないでよ、あんだに付いて行ってるわけじゃないんだからね！ さつきはすっかりしてただけ。元々私もこっちに行く予定だったんだから！」

相変わらずその言葉や口調はいちいち人に突っ掛かるようではあるけれど、それはどこか無理をしている子供の様子に似ていると、わたしはふと思った。そう、まるで、精一杯背伸びをして、強がっているような――。

わたしが口角を緩めると、彼女の、髪と同じ色の柳眉が僅かに上がる。

「あの……名前を訊いてもいいですか？」

少しばかり藪から棒とも取れるその問いに、彼女は、一瞬、きよとした顔になる。けれどすぐに淡い笑みを浮かべて、柔らかな声音で答えた。まるで歌うような抑揚が、ふわりと心地よく鼓膜を打つ。

「エデルトリダよ。あんたは？」

「アーチーバルドです」

「そう。ちょっと珍しいわね。バルドって呼ばれてるの？」

「そうですね。ほとんどの知り合いに」
「ふうん」

彼女、エデルトリダの眩きの後、沈黙が満ちる。二頭の馬の蹄が地を蹴る音のみが、辺りに響く。

エデルトリダは、相変わらずわたしの後ろをゆつくりと進んでいる。かと思うと、急にスピードを上げ、わたしの横を駆け抜けた。

「じゃあね、バルド！」

明るく笑い、それから軽く、その華奢な手を振る。わたしも、手を振り返そうと思った。なのに、そうはしなかった。

「——エデルトリダ！」

気付くと、彼女を大きな声で呼び止めていた。その名を叫んで驚く。無意識だった。耳に飛び込んだ自分の声で、そうしたこと気が付いた。

呼び止められた彼女は、当然のことながら不思議そうに瞬いて、こちらをじっと見つめる。

「なに？」

「いえ、あの」

なにと問われても、答えようがない。自分でも、どうしてそうしてしまったのか分からなかったのだから。

ただ、これで彼女に二度と会えないのは嫌だと、それだけをはっきりと感じていた。だからわたしは言う。

「行き先が同じなら、もう少し、一緒に行きませんか？」

それに対しての答えは、暫しの沈黙だった。

ほんの少し何かを考えているようだったエデルトリダは、ふいに表情を和らげる。そして頷いた。

「そうね、いいわ、たまには話し相手がいるのも悪くないし」

これが、わたしと相棒であるエデルトリダとの出会いだった――。

< E N D >

「人気投票御礼短編 バルド」(後書き)

と、とりあえずバルドの一人称に挑戦してみましたっ(滝汗)

キャラが真面目タイプなので、シリアス寄りな感じに……。ていうか、本編のノリが微塵もないって orz

バルドは「ですます」な口調ですが、それを地の文でやるとさすがに違和感があったので、こういう形になりました。

もしイメージを壊してしまっていたら……すみません、いつそのことなかったことにして下さい！(土下座)

「おまけ短編 エデルトリダ」(前書き)

バルドの短編の、エデルトリダ視点です。
セリフと展開は全く同じになります。

「おまけ短編 エデルトリダ」

始めに耳に入っただのは、銃声だった。

自分もガンナーであることから聞き慣れているそれに、私は無意識のうちに反応していた。

今いるのは、茂る草木が極端に少なく、岩肌がむきだしになっている山間やまあいに伸びた一本道。その音は、背後から聞こえて来た。そして、それはまだ止むこともなく続いている。

「……」

私は、少しだけ考えた後、馬首を回めくらせた。来た道を引き返す。その尋常じゃない物音は、どんどん近付いてきている。

間違いない。誰かが追われてる！

馬を止めて、その体で道を塞ぐようにして、遙か先を見据えた。やがて先頭に、身を低くして馬を駆る人影が現れた。そしてその背後に迫る複数の影も。

先頭の人物ただ一人が追われているのは、一目瞭然だった。その手には、武器となるようなものは納められていなかったから。

その後を追っている輩が、威嚇でもするかのように、銃を上空に向かって放つ。この、明らかに結果の分かっているレースを楽しんでいるらしい。すぐにでも捕まえられそうな相手をわざと追い詰めて、いたぶっている。そんな様子だった。

——全く、趣味が悪いつたら。

別に、追われているその男を助ける義理も何もない。

でも、私は半ば無意識のうちに腰の銃に手を掛けていた。追われているのが明らかに凶悪なお尋ね者とかなら、放置していたかもしれない。けれど今回は、一見しただけでも様子がそれとは違うと分かる。

それに、進行方向からいっても、どっちみちいつかは私とすれ違う。あんな暴走する一団に追い抜かれて、全身埃まみれになるのもごめんだもの。

顔をこちらに向け、私に気付いたらしい逃亡者に、声を張り上げる。

「止まらないで、こっちまで走って！」

あの男からしたら、突然目の前にもう一人の脅威が立ち塞がったように見えたはず。だから、叫んだ。 ついでに「そこで止まったら追っ手に捕まるどころか、その前に他の馬に轢き殺されてきつとお終いだけど」とかも思っただけど、口に出すと長いから、心の中だけに止めておいた。

そこまで考えたかどうかは分からないけど、とにかく、その男は止まらなかった。私は、握り締めた銃の撃鉄ハンマーに指を掛ける。そして、放った。

一、二、三、四……と、声に出さずに、衝撃を唇だけで数える。私の弾丸は、追っ手の腕や手綱を貫く。突然走った痛みや、切れた手綱に身体を支えを失い、次々と追っ手の男たちは落馬していった。そのまま馬に蹴散らされたり、命からがら逃げ出したり。最後に残った一人は、その様子に驚き、慌てて逃げ出した。

ちょうど弾丸が切れたところだったこちらとしても、大助かりだった。あの位置からじゃ、弾込めをしてもう一度放つには、ギリギリの時間とも言える距離だったもの。

私は、背後に回っていた逃亡者の男を振り返る。

ずつと馬を飛ばし続けて来たんだと思う、その黒い髪も服も乱れてぐしゃぐしゃで、肩で大きく息をしていた。この辺りではあまり見ない肌の色をしている。

まさか、その程度で追われてたなんてこともないとは思うけど……。

「まったく、あんたのせいで、弾倉がすっかり空になっちゃったじゃない！」

私の当然の科白^{セリフ}にも、どこか呆けたような表情をするばかり。やっとで口を開いたと思ったら、ただ短く、私の言葉を反芻しただけだった。

「弾倉？」

弾倉という単語すら知らないということは、この男は、あの追っ手のように銃の使い手じゃないってことよね。

私はひとつ大きな溜息を吐いて、手に持ったままだった銃をホルスターに収めた。

「ていうか、あんた一体何をして、あんな武装した大勢に追われたのよ？ どうかの組織から足抜けでもしてきたの？ それにしてはまあ、そんなタイプの人間には見えないけど」

「そ、組織？ 足抜け？」

「ちょっと、大丈夫？」

「はい、あの、助けてくださって、ありがとうございます」

「大丈夫って、そういう意味じゃなくて、私の言ってる意味が分かってるのかってこと！」

「あ、そっちですか？」

「そっちですかって、ああ、もう、なんかペースが狂うつたら！」

なんだろう、この掴みどころのない性格と言っかなんというか……。

私は思わず空を仰いでいた。

「いえ、組織とかそういうことではないんです。そうではなくて、わたしの」

私の様子に焦ったらしく、男は慌てて説明をする。かと思えば、突然、そこで言葉を飲み込んだ。そして何やら考え込む様子で、じつとこちらの顔色を窺っている。

私はとりあえず、おとなしく待った。やがてゆつくりと、続きが語られた。

「——わたしの持つ能力が、追われた理由です」
「能力？　どんな？」

戦闘能力ではないことは確かなはずよね。だとしたら、頭を使うタイプの特殊能力かもしれない。

そう思い、私は訊ねる。

けれど、返ってきた答えは。

「魔導です。先日、怪我をした人を治癒したところを見られてしまったようでした」

……あまりにも現実離れしたものだ。私は思わず閉口してしまつた。

こういう場合って、どう反応するべきかしら？ ああ、そうだが、これよ、これ。

「……あんたもしかして、妄想癖とか虚言癖とかある？」

言つて、その問いに対する答えを、私は期待して待つことはなかった。だって、それで「はい」と言うような人間なんて、まずいないと思うもの。

「まあとにかく、今後は変な人間と付き合わないように気を付けなさいよ」

手綱を操りながら忠告すると、相変わらずのんびりとした口調で男は頷いた。

「ええと、はい、そうですね、そうします」

それを軽く聞き流しながら私は、再び馬を進ませた。

ヘンな男だった、とぼんやりと考える。

ほんのちよつと特殊な外見を除いては、これと言って狙われるような理由があるようには思えない。あんな大勢に追われる人間なんて、これまで会ったことがあるのは、高額な懸賞金を懸けられたお尋ね者だけだった。

魔導？ とか言つてたけど、そんなのは、伝説とかお伽噺でしか聞いたことがない。常識で考えたら、そんなことを言うなんて、頭が茹だつてるとしか思えないけど……。

でも、もし、もしも。

もし、それが本当だとしたら？ だとしたら、あの状況にも説明はつく。そんな人間が実際にいたとしたら、どんなことになるかだつて、簡単に想像はできる。大金を生み出す道具として利用されるのが、きつとオチだと思うもの。

けど、まさか――。

そこまで考えたところで、私はふと、そのことに気付く。

……あれ、私、こつちじゃなくて、反対側の街に向かつていたんじゃないかつたつけ？

のんびりボケボケとしたあの雰囲気、いつの間にやら自分まで影響されていたみたい。慌てて手綱を引き、方向転換をした。軽い速足で来た道を引き返すと、すぐにあの男の後ろ姿に追い付いてしまった。

さつき別れたばかりで追い越して行くのもあまりにも間が抜けている気がして、つい、そこでスピードを緩めてしまう。

どうしようかと考えていると、ふいにその顔がこちらを振り返った。気まずいことに、そこでばつちりと目が合ってしまった。

「うわ！」

すると一言、本気で驚いた様子で叫ばれてしまった。

「な、なによ！？ レディの顔見てうわって、失礼ね！」

思いもしなかった反応に、私は声を荒げる。

「あんた、なんで付いて来るのよ？」

「それって普通、自分よりも先を行っている相手に言うことじゃないですよ。あなたこそ、なぜ？ さっき反対側へ行きましたよね？」

——い、一番訊いて欲しくなかったことを！

私は、自分でも顔が赤くなるのを感じた。

「か、勘違いしないでよ、あんたに付いて行ってるわけじゃないんだからね！ さっきはうつかりしてただけ。元々私もこっちに行く予定だったんだから！」

これは本当のこと。

でもまさか、考えることに気を取られてつい反対方向に行ってしまった、なんて我ながらあまりに間抜け過ぎて、口が裂けても言えなかった。

私のヤケとも言えるその返事に、男の口元が緩む。何となくそれが癢かゆに触ふって、私は眉を上げて見せた。

「あの……、名前を訊いてもいいですか？」

私のその様子にめげる様子もなく、名を尋ねられた。予想外の展開に、私は一瞬だけ間の抜けた表情になってしまう。

ほんとに、何と言うか、変な男。……でも、嫌いじゃないかもしれない。自分でも意外だと思うけど。

「エデルトリダよ。あんたは？」

「アーチャーバルドです」

「そう。ちょっと珍しいわね。バルドって呼ばれてるの？」

「そうですね。ほとんどの知り合いに」

「ふうん」

見た目も珍しいけど、名前も初めて聞くものだった。どこか、遠い国から来たのかもしれないなあ。

またしてもぼんやりと考えながら、バルドと名乗った男の後をゆつくりと付いて行っている自分に気付く。

私、何してるんだろう？ これ以上のことを知ったって仕方がないのに。どうせすぐに別れるのだから。

そう考えてふと我に返り、軽く馬に合図した。そして前に行くバルドを素早く追い抜いた。

「じゃあね、バルド！」

言って、手を振る。バルドも、そうするかのように見えたけど、上げかけたその手が止まり、代わりに私の名を呼んだ。

「——エデルトリダ！」

私はそれに、反射的に馬を止めていた。助けた時と同様に、別にそうする義理もなかった。そのまま馬を進めたって一向に構わないはずだった。

なのに、自分でも不思議なことに、そうはしなかった。

「なに？」

「いえ、あの」

訊ねると、彼は曖昧に言い淀む。けれど、それは一瞬だった。

「行き先が同じなら、もう少し、一緒に行きませんか？」

その口から出た思いもしない誘いに、私は少しだけではあるけれど、内心で驚いていた。そしてそのことを考えてみる。

もしかしたら、エデルトリダという名前を一度でしっかりと覚えているあたりに、好感を持ったのかもしれない。

この長い名前を初めて聞いた相手からは、「エディ」と勝手に略されたり、良くて、もう一度訊かれたりするのが常だから。

気付いたら私は、はっきりと頷いていた。それも、淡く微笑んで。

「そうね、いいわ、たまには話し相手がいるのも悪くないし」

こうして出会った彼にまさか惹かれるようになるなんて、この時はまだ、微塵も想像すらしなかった――。

< END >

【番外編】 第1話（前書き）

いつも拙作を読んで下さり、ありがとうございます！

このお話は、『歌姫の結婚』の少し後のエピソードです。

長さも内容も第三部というほどのものではないので、こちらに続けてアップしました。

またお暇な時にでもお付き合い頂けたら嬉しいです（^^）

「番外編」 第1話

「おい、エディ。今この町の酒場に、凄腕ガンナーのエディがいるって聞いたぜ？」

見るからに何もない町の散策から戻ったセシルの報告に、当然のことながら私とバルドは顔を見合わせる。だって、『私』なら『ここにいる』のだから。

周囲を流れる川と果樹畑に囲まれた、のどかな田舎町を夕刻に見つけた私たちは、その一軒しかないという宿で一晩を過ごすことにした。

通された部屋にひたすら籠っているのも退屈だと言って、セシルはすぐに宿を出て行った。そしてわずかな時間の後に戻って来たと思ったら、どうにも腑に落ちないといった表情で私をまじまじと見て、やっとで口にしたのが先ほどの科白^{セリフ}だった。

「それ、どういうこと？ 私、酒場になんて行ってないわよ？ ねえ、バルド」

「ええ、エデルトリダはずっとここにいましたよ。聞き間違いではないのですか？」

半信半疑な私とバルドに、セシルも意味が分からない、と肩を竦めて見せる。

「んー、エディだけなら聞き間違いってこともあるかもしれないけど

どさ。凄腕ガンナーのエディって、そこんとこ全部聞き間違えるなんてさすがにしないと思うけど」

「凄腕ハンターのエディとか」

と、バルド。

「まあ、この町じゃそっちのほうがいてもおかしくない感じだけだな」

「凄腕ガンナーのレディとか」

と、今度は私。

「いや、それだって結局エディのことっぽくねえ？ 自分のこと堂々とレディだなんて言う女、そうそういないっての」

言いながらも私の足が届かない場所へと避けたセシルを軽く睨むと、彼得意の満面の笑みで返された。

……最近、こちらの行動の先を読むようになってきたなあ。九割がたは、うまく躲かされているような気がする。

それはまあさておき、私は大きな溜息を吐く。

「ここでこうして三人揃って首捻ってたって、何も分からないわよ。その酒場に行ってみましょうか。ちょっと気になるし」

その提案に、二人は即座に揃って頷いた。

『そいつ』は、町はずれのこじんまりとした酒場で馬鹿騒ぎをしていた。

外まで漏れる大声で笑うその人物の周囲は、精一杯ご機嫌を取ろうとする大勢の人々で溢れかえっている。

どん、とそいつが勢いよくテーブルにグラスを置く——と言うか叩き付けると、山と盛られた料理の皿の数々が跳ね、ぶつかり合っ
て耳障りな音を立てる。そのうちの一枚が滑り落ちて、床に派手に
食べ物が散らばっても、落とした本人はお構いなしの様子。

代わりに傍に控えていた店の主人らしき男が自らそれを片し、
『すぐに代わりの一品をご用意しますから』と、その科臼^{セリフ}すらまとも
に聞いていない相手にへらへらと媚びへつらっている。

「あれ、ですか？」

その光景を目にするなり、バルドが眉間に皺を寄せた。

「あれが、ガンナーエディ？」

私の隣で、セシルもあきれたように言い、口をへの字に曲げる。

「ちよつとちよつと、おじさん」

私は入口の傍にいた一人を捉まえ、呼び止めた。人の良さそうな丸っこい顔をしたその中年の男性は、突然見知らぬ相手に話しかけられて目を丸くする。

「あの店の真ん中にいる人って？」

「お嬢ちゃん、他所^{よそ}から来た旅人さんかね？ あのお方はなあ、かの有名なガンナーエディだよ！ この町一番の金持ちの家に、先日、強盗が押し入ってね。そいつをエディさんがものの見事に捕まえて下さったんだ。今やこの町の英雄だよ」

「……そうなの。ありがとう、いいことを聞いたわ」

私は曖昧に頷き、再び視線をその男に向ける。

そう、男。

不本意ながらも、私の通り名である『エディ』。本名はエデルトリダであるけれど、これもまた不本意ながら、そこまでは世間に広まっていない。だからここにいる人たちも、『エディ』は『男』だと当たり前信じているようだった。

「へえ、びつくりだな」

中年の男性が群衆の中に消えてから、セシルがしみじみと漏らす。

「こんな小つさいのどかな町に、強盗が狙うほどの金持ちなんかがいるなんてな」

「びつくりするところはそこですか？」

バルドがすかさず突っ込む。

「そうよ、それよりもあの男よ。なんで私の名を語っているのかしら？」

「本人に訊いてみるか？ 本物だつて名乗つてさ」

にやりとセシルが笑みを広げたところで、輪の中心にいたそいつとしっかり目が合ってしまった。思わず身構えた私に、その男はその場から尊大に手を振って見せる。

「こりゃいい、また綺麗なお嬢さんが俺の噂を聞きつけて会いに来てくれたみたいだな！ いいぜ、サインでも熱い抱擁でも、何なら

キスだつて、あんたくらい美人ならサービスしてやるぜ？」

それに私が素早く『気持ち悪い』と答える途中で、バルドが私の手を取り、無言で自分の傍らに引いていた。

私は結果的に『きもッ！』と短く叫んだと同時によろけて、慌てて彼の腕に掴まっていた。ちらりとバルドの横顔を見上げると、怖いくらいに無表情で、私の名を語る偽物を見据えている。

「あなたには、既にお相手がいるようですが？」

淡々とした、温かみの籠らない硬い声音で、バルドは言い放つ。その男の首に腕を絡ませてべったりとくっついていた女が、『そうよお』と鼻にかかる甘ったるい声を出し、真っ赤な紅をひいた唇を尖らせた。

「アタシがいるじゃない。どこが不満なのお？」

身体をくねらせてしなを作り、豊満な胸を強調するように男の身体に押し付けて、その無精髭の生えた顎を指先でつつく。

あー……もう、なんかあまりにアホらしくて、帰りたくなってきた。

「ちえ、なんでえ、男付きかよ。残念だ」

意外にもあつさりと身を引いた男を、私はじつくりと観察する。人懐っこそうな笑みを浮かべているその顔は、一見する限り、黙って他人の名を語るような人間とは思えない。年齢はきつと、二十をちよつとは越えた辺り。長めの黒髪を、大ざっぱに纏めている。かなりがたいの良い筋肉質の身体は傲慢なのかもしれない、シャツ

からこれ見よがしに厚い胸板を覗かせていた。

「あんたが、あの有名なガンナーエディ？」

私はゆつくりと、一語一語を噛み締めるように言う。

「おうよ、俺がエディだ！ ある国じゃ誤って縛り首になりかけた王子を助け、またある国じゃ有名な歌姫の護衛を仰せつかったんだぜ！？」

テーブルの上の、フォークが突き刺してあるソーセージ並みに太い親指で、誇らしげに己を示して男は笑う。

『よく知ってるじゃん』とセシルが半ば呆れ気味に呟く。

「そう、でもおかしいわね、私はそのどちらに関わったのは、女のガンナーだったって聞いたけど？」

挑むような口調、そして射るような視線を真つ直ぐに向け、相手の出方を窺う。今や、辺りは水を打ったように静まり返っていた。私と男の間を、たくさんの視線が忙しく行き交う。

私の挑発に、男は酒のグラスを片手に、ぽかんと間の抜けた表情をするばかり。空で傾いた器から、蜂蜜色の泡と液体が零れ落ちるのにも気付いてすらいらない様子で固まっている。

かと思えば――。

「ぶははははッ！ 女か、そりゃ面白い！」

突如、辺りの張りつめた空気を揺るがすような野太い声を爆発させた。つられて、固唾を呑んで成り行きを見守っていた人々までが笑い出す。

「お嬢さん、あんたは銃を知らないな？ 女の細い手でこいつを撃つてみる、次の瞬間には手の甲が手首とくつついて、とんでもないことになっちまうぜ」

言いながら、椅子の背もたれに掛けてあつたホルスターから引き抜いたのは、その熊のような手にぴったりの大きさの銃だった。私が愛用しているものの、倍以上の大きさはあるんじゃないかと思う。男がそれを高く掲げて見せると、周囲から大袈裟すぎるほどの感嘆の声が上がった。

私は答える代わりに、ただ大きく一歩前に進み出た。バルドの身体の陰に隠れていた腰の銃を示すように立ち、その場の全員の目を意識しながら告げる。

「私は、銃を知ってる。それを扱うことの重みも」

そう、私は、十分すぎるほどに知ってる。だから、今この場ではそれを抜かなかった。だって、そんな軽々しく扱うようなものじゃないもの。少なくとも、私の銃は。

私とは全く逆の主義を持っているらしい男は、おどけたように太い眉を踊らせ、口角を引き上げた。

「女が、銃を知ってるって？ つか、そんな玩具みたいなのが、銃？」

それから唐突に、ふ、と真面目な面持ちになる。

「お嬢さん、悪いことだと言わない。女にや銃なんて無骨なもんは似

合わない。どうせ凶器を持つなら、せいぜい調理用の刃物で満足するこつた。そんで、好きな男に旨い飯でも食わせてやるんだ。そのほうが未来も明るいつてもんだ」

淡々と諭すように言い、『好きな男』でバルドを顎で示し、それから再び私たちの存在などすっかり忘れたかのように、周囲を巻き込んでの大騒ぎを始めた。

男の胸に頬を摺り寄せた女が、金色の巻き毛を掻き上げ、勝ち誇ったような微笑みをこちらにくれる。だから私も笑って見せた。

ただし、口元だけで――。

「番外編」 第2話

私たちは、その後すぐに宿に引き返した。

あの酒場にいたところで、気持ちのいいものじゃない。無言で踵を返した私を、二人も止めはしなかった。

歩き始めてしばらくは誰も口を開かなかったけれど、やがてぼとりとバルドが誰ともなしに呟いた。

「随分とふざけたことを言う男でしたね」

どことなく気まずい沈黙が破られたことに安堵したかのように、セシルがいつもの明るい声を上げる。

「ああ、全くだ。エディに包丁を握らせたら、銃を持たせるより恐ろしいってことを教えてやりたかったぜ。あの味は、弾丸に勝る凶器だっての」

「そうですか？ 辛めの味付けはわたしの故郷でも多いものでしたから、普通に食べられますけど」

「や、お前は味覚が人とちょっとズレてるから……って、あー、エディ？」

二人のふざけた口調の会話にも反応せず、相も変わらず己のつま先を見つめたまま黙々と早足に先を進む私の背に、セシルが恐る恐るといった口調で声をかけた。

「まったく、腹が立つたらないわ！」

ぴたりと歩みを止めて、地面を睨んだまま吐き捨てるように呟く。

「私が銃を知らないですって!？」

「なあ、なんであそこで名乗ってやらなかったんだよ？」

先ほどとは打って変わって真面目な面持ちをしたセシルの問いに、ずつと悶々とした怒りに囚われていた私は、やっつとで冷静さを取り戻す。

くるりと身を翻し、左手を腰に当てた姿勢で、彼の鼻先に右手の人差し指を突き付けた。

「あの場で私が本物だと言って、誰が信じるの？ 更にバカにされるのがオチよ」

「そうですね。あの様子からして、あの男がこの町の人を助けたのは事実なのでしょう。そしてそれを実際に目にした人々が、突然現れたエデルトリダが本物だと聞いたとしても、簡単に受け入れるとは思えませんね」

眼前に迫った私の指を握って自分の鼻からゆっくりと離しつつ、セシルは困ったように顔を顰めた。

「じゃあ、どうするんだ？ このまま放っておくのかよ？」

それに対し、私は迷うことなくすぐさま首を横に振る。

「それはできない。例えていることが人助けだとしても、人の名を語るなんて許せることじゃないもの」

あの男が自慢げに私たちの功績を口にした時、脳裏に浮かんだのは、これまでに会ってきた人たちの笑顔だった。

国に伝わる伝承に運命を翻弄された双子の弟王子リカードと、彼

を助けるために、自らを身代わりにして処刑台にまで登って見せた兄のフレデリク王子。

復讐に囚われていた歌姫アンネリーゼに、身を挺して愛する彼女を救ったマティアス。

彼らの苦しみとか喜びとか、そういうこと全てをあいつは知らない。知っているのは起こった出来事の上辺だけ。

そんな人間に、まるで自分の身を飾りたてる勲章かなにかのように、彼らのことを軽々しく口にしてほしくない。

「……あいつが一人になる時を待つ。そこを捉まえて、どういうつもりか聞いたですわ」

「つまり、しばらくこの町に滞在して、あの男を見張るということですね」

「そうね」

バルドに頷いて見せると、セシルも納得した様子で大きく顎を引いた。そして真顔で短く言う。

「つまり、ストーカーするってことだな」

「ちょ、変な言い方しないでよ！それにさっきの話だけど、ちゃんと聞いてたわよ。私の料理に文句つけるなら、今度鍋いっぱい作ってセシルにだけご馳走するからね！」

私のこの脅し文句に、セシルの顔からこれまでにないほど血の気が引く。前に無法者に撃たれて死にかけてた時よりも青く見えるのは、気のせいだと思いたい。

「それ何の拷問！？普通、『文句言うなら二度と作ってあげないからね』とか言うところじゃねえ！？」

「それじゃ逆に喜ばせるだけじゃない」

私のしれっとした科白に、バルドが『ごもつとも』と苦笑した。

——けれど、私の計画は、なかなか実行に移せないまま三日が過ぎた。

と言うのも、あの偽者の男はさすがにこの町では有名人で英雄扱いなだけあって、ひとりきりになることがほぼ皆無に等しかったから。

寝泊まりしているらしい『この町一番のお金持ち』とやらの家から出る時だって、連れもなく歩くのは、扉から門までのたった数十歩の距離だけ。私たちが近付くよりも数倍素早く、この町にしては大きめなその家の前で待ち伏せしていたらしい誰かが声を上げて駆け寄り、その隣を陣取る。

そんな様子を目にしたのも何度目か既に分からなくなった頃、セシルが大袈裟に声を上げ、これもまた大袈裟なほどに髪をがしがしと掻いた。

「だあーもう！　また先を越された！」

セシルほどじゃないにしろ、バルドも困惑気味に溜息を吐いて肩を竦める。

「なかなか捉まえられませんかえ」

私も眉を寄せて、小さく首を振った。

「ここまでチャンスがないなんて、想定外だわ！」

家から出てきた男と、その手を取ってはしゃぐ小さな女の子の姿を、身を潜めていた木の陰から眺める。まだ男の胸までも背の届かない女の子は、精一杯背伸びして、握りしめた花冠を差し出している。

私はその様子に、内心首を傾げた。

この三日間、ずっとあの男の後を追っているけれど、その行動は本当に『お人よし』と言ってもいいほどのものばかり。話しかければ誰にだって笑顔で応え、困っている人がいれば、すぐに飛んで行って手を貸す。そんなことが何度もあった。

昨日なんて、高い木に登って下りられなくなっていた子猫を助けてと頼まれて、すぐさま自分も木に登ってそれを下ろしてやった。あの花冠の女の子は、無事だった子猫をその小さな両手に受け取って、顔をくしゃくしゃにして喜んでいた子だった。

つまるところ、私の名を語っているということ以外では、本当に『良い人』にしか見えなくて——だからこそ、なおさらどう考えたら良いのか分からずに混乱していた。

それは、セシルもバルドも同じだったらしい。

「あいつ、どうもわけがわかんないんだよなあ。始めはエディの名を使って、威張り散らして豪遊三昧してるのかと思ったけど、そうでもなさそうだしさ」

「そうですね。これまでの行動を見ていて、ちょっと思ったんですけど……」

バルドはそこで一度言葉を切る。その視線の先には、受け取った

花冠を頭に乘せて、女の子に言われるままにどこかに引つ張って行かれる男の後ろ姿があつた。

「こうして待ち伏せしなくても、ただ普通に『町の人達には内密の話があるから一緒に来てほしい』と言えば、案外すんなり済むような気がしませんか？」

その提案に、私とセシルは揃って弾かれたようにバルドを見上げる。それからたつぷり数秒後に、全く同じタイミングで口を開く。

「「……ああ！」」

——そう言えば、そういう方法もあつたわね。

「番外編」 第3話

「え？ 俺に話があるって？」

女の子に手を引かれた男を呼び止めると、そいつは、ほんの少しだけ困ったように眉を下げた。

けれど、その理由と言うのがまた私たちとしては肩すかしを食らうようなもので。

「うーん、後でもいいか？ 今日、この子の家に行くことになってな」

「家に？」

「エディお兄ちゃんに、うちの猫を見せるって昨日約束したの！ 可愛いだよ、子猫が四匹もいるの」

弾んだ声で話す女の子に笑みを返す男の姿に、私たちはやはり困惑してしまう。あまりにも、あの晩とのイメージが違う。

「そうなの。じゃあ、その後でもいいわ。私たちは宿にいるから、来てくれるかしら」

やつのことでそう返すと男が答えるよりも先に、女の子が私のスカートを引いた。

「お姉ちゃんも、それ持ってるの？」

そう言って示したのは、腰のホルスター。

「エディお兄ちゃんのファンなの？」

一瞬でその場の……と言っか、厳密に言えば私たち三人の周りの空気が固まったのを感じた。私は、にっこりと微笑んで見せる。言うことは決まってるもの。

「そうよ」

まさかの私の返答に、セシルが思わず何かを叫びそうになっていた。だから私は、更に言葉を重ねる。

「こつちのお兄ちゃんもなの。だから、有名なガンナーエディに、ぜひ詳しくお話を聞きたいの。でも後でね。あなたのほうが、先に約束してたんだものね」

身を屈めて顔を覗き込んで言うと、女の子は嬉しさに頬を紅潮させ大きく首を縦に振って、『エディお兄ちゃん』に抱き付いた。そうして楽しげに去って行く二人を見送り、私は軽く息を吐く。

「否定しないんですね」

こちらの声が届かない距離にまで十分間が開いたところで、バルドが私を振り向いた。

「私だって否定したいところだけど、でもあの子の表情、見たでしょ。あんなに信じ切って憧れているのを、何も壊すことはないわ。まだ子供だもの」

「まあそりゃ分かるけど、なんで俺まで？」

釈然としないとも言いたげに、けれど苦笑したセシルに、私も肩をすくめてただ笑う。

「とにかく、あとは宿で待つだけですな」
「そうね。約束通り、ちゃんと来てくれればいいけど」

私のその心配は取り越し苦労だった。男は、日も暮れかけた夕刻に、ちゃんと訪ねて来た。

「さてさて！」

迎え入れたバルドが後ろ手に部屋の扉を閉めるなり、男は声を上げ、ぐるりと私たち三人を見回す。その顔には、相も変わらず楽しそうな笑みが貼り付いている。

「で？ 俺に話して？」

「あなたは何者ですか？」

単刀直入に、バルドが問う。

「ああ？ そりゃ、どういう意味だ？ 知ってるだろ、俺は」

大袈裟に眉を顰めて見せた男に、腕を組んで壁に寄りかかっていたセシルが畳み掛ける。

「かの有名な、ガンナーエディ？ なら、エディの本名を知ってるか？」

「エディはエディだろ、本名で……」

今度は、窓辺に立った私が口を開く。

「エデルトリダよ、それを略してエディって呼ばれてるの。だから世間では、ガンナーエディは男だと思い込んでいる人が多いわ、あんたみたいに。でも実際は違う。エディは、私よ」

その場に、耳が痛くなるほどの沈黙が落ちる。まるで時が止まったかのような感覚。こじんまりとした部屋、私とセシルとバルドの中央に立った男の顔から、浮かべていた笑みが一瞬で消えた。全く考えの読めない無表情で私をまじまじと眺める。

そして――。

「――ッ！」

相手の指先が腰の銃に掛かるよりもずっと早く、私は銃口をその顔面に突き付けていた。

それに、セシルも。

額とこめかみに狙いを定められ、男が鋭く息を呑んだのを感じた。極限まで張りつめた空気が微かに震える。

かと思えば、降参だとしても言うように両手を上げて、廊下にまで響き渡る大声で笑い始めた。それに合わせて広い肩が大きく揺れる。

「なるほどな、確かに銃の腕は相当なようだ、まだあんたが本物だとは信じられねえが、これは認めるよ、俺はエディじゃない」

随分あっさりと白状され、私たちはお互いにお互いの顔を窺った。

男に注意深い視線を向けていたバルドは、『大丈夫だ』と私に目だけで頷く。

私は静かに銃を下ろした。セシルもそれに倣って、再びゆっくりと壁に背を付ける。

「なら、訊いてもいいわよね。なぜ嘘を？ 何の目的でエディを名乗ってるの？」

「あー……別に悪気があったわけじゃないんだ。たんに成り行きと云うか」

まだ緊張を解かない私たちとは逆に、軽い世間話をするように、男は首を二、三度振った。そして誰に勧められるまでもなく、傍にあったベッドに腰を下ろす。まるで慣れた自分の部屋にいるかのようになりラックスしている。

銃を持つ人間に囲まれているというのに、その大胆さと言うか神經の図太さに、私は内心で呆れ、顔を顰めた。

「俺がコソ泥を捕まえた時、腕だけで押さえ付けて銃は使わなかった。だが、こののどかな町だ、普段こんな事件が起こることもないらしくてなあ。あつと言う間に、話が大きく膨らんで広がっていた。銃を持っていただけで、かの有名な『ガンナーエディ』じゃないかって思われちゃったらしくてな。気付いた時にや、そういうことになってたってわけさ」

「てことは、町の人達の勘違いが理由ってことか？」

セシルが若干首を傾げて問うと、男は口角を引き上げて頷いた。

「まあ、簡単に言えばそうだな。だからさ、そう思われてるならそれでいい、ここではそういうことにしておこうって思ったんだ。相手は世間に名を馳せている有名人だ、今更小さな武勇伝が増えたと

「ところで問題はねえだろう？」

「ちよ、そんないい加減な！　なんで否定しないのよ？」

「あの異様に盛り上がった群衆を鎮めて説明するだなんて、面倒だったからな。まあいいか、ってな」

——ちよ……ッ、面倒って！

私の目が吊り上ったところで、バルドが訊ねる。

「なら、あの夜の酒場での言動も芝居だったということですか？
随分なことを言ってくれましたけど」

これには男はきょとんと間の抜けた表情をする。

「酒場で？　俺、何か言ったか？　……いや、そうか、またか。悪い、俺はいつも酒を飲むと記憶がスパッと抜け落ちちまうんだよなあ」

失った記憶を必死に引っ張り出そうと、男は顎に手を当てて、何やらブツブツと口の中で呟き始めた。私はその様子に、もはや怒る気も消え失せかけていた。

なんと言つかこう……必死になって事の真相を突き止めようとしていた自分のほうが馬鹿らしく思えてくる。

こちらのそんな心境も知る由もなく、男はひとしきり唸った後、ひとつ大きな溜息を吐いた。

「ダメだ、やっぱり思い出せねえ！」

派手な仕草で頭を抱えたその姿に、セシルがげんなりとした顔でぼそりと漏らす。

「……酒は飲んでも飲まれるな、っての」

「番外編」 第4話

その時、突然廊下の方から騒がしい足音が響いた。階段を駆け上がって来たかと思えば、私たちの部屋の扉をがむしゃらに叩く。

「エディ兄ちゃん！ 大変なんだ、助けて！！」

尋常ではないその叫びは、まだ高い声音の、少年のもの。

すぐさまバルドが扉を開くと、振り上げた拳を落とす勢いそのままに、男の子が部屋に転がり込んだ。床に倒れこみそうになったその子供を、バルドの腕が咄嗟に支える。

「マーク？」

ベッドに腰掛けていた男が名を呼ぶ。

「どうしたんだ、そんなに慌てて。一体なにが」

「マーシャが、マーシャが……」

ここまで全力で走って来たらしく、マークと呼ばれた男の子は咽せながらも必死に言葉を絞り出す。声から想像できたとおり、まだ十歳にも満たないような少年だった。

「あの子に何かあったのか！？」

こくと大きく頷いて、マークは握り締めていたものを広げた。それは手紙だった。くしゃくしゃになった紙面に素早く視線を走らせた男の顔から、さっと血の気が引く。

「なに、何があつたの？」

ただならぬ雰囲気、思わず私は勢い込んで訊ねていた。

「マーシャ……マークの妹が、誘拐された」

「なんですつて!？」

「誘拐!？」

「でも、何で? なんのために？」

セシルの問いの答えも、しっかりと記されていたらしい。

「要求は『ガンナーエディ』だ。ここに記された場所に来い、と書いてある」

私とバルドとセシルは一瞬顔を見合わせた後に、額を寄せ合うようにしてその手紙を覗き込む。

そこには短く『子供の命が惜しければ云々』というお決まりの短い脅し文句と、場所の指示が殴り書きされているだけだった。

「マーシャってもしかして、あんたに猫見せるってはいでたあの子？」

「ああ、んで、このマークはその子の兄だ」

半分涙目で俯いたマークの頭に手を置き、男はわしわしとその髪をかき混ぜた。

「よし分かった、安心しろ! 俺がサクツと妹助けてやつからな!」
「エデルトリダ、わたしたちも」

バルドの言葉に、私はもちろん大きく頷いた。

「えっと……え、エディ、私たちも行くわ」

そう言えば、この男の本当の名前をまだ聞いていなかった。でも今はそれどころじゃない。

マークの前ということもあり、私はそいつを『エディ』と呼んだ。不本意だし、ものすごく違和感で背中がムズムズするけれど。

私の申し出に、エディ——ややこしいから、エディカッ（仮）は、驚いたように目を丸くする。何か反論しようとしたのを、私は片手を上げて制した。

「ダメなんて言わせないんだからね、絶対に！」

人の名前を勝手に名乗ったことを、まだ許したわけじゃない。それに、犯人が『ガンナーエディ』を呼び出しているのなら、私にだって無関係じゃないもの。こんな脅迫状を見てしまった以上、そのマーシャという子の無事な姿を見るまでは、安心だってできない！

「けど、この手紙を書いた奴が用なのは、俺じゃ」

「ゴチャゴチャ言うなら蹴るわよ」

「蹴るってなに、撃つじゃなくて!？」

説明か何かを求めるように、エディ（仮）はセシルとバルドに目をやった。二人は途端に無表情を装い、ふい、と同時に明後日の方向に顔を背ける。

その様子にエディ（仮）は少しだけ逡巡した後、釈然としない表情で曖昧に頷いた。

「わ、わかったよ。一緒に行こう！」

その誘拐犯が指定した場所は、町から少し離れた所にある廃屋だった。

マーク曰く、昔そこに人間嫌いの男が一人で住んでいたらしいけれど、その家主が亡くなってからはずっと空き家になっているとのことだった。

それはまあいいとして、その廃屋へは、私たち三人とエディ（仮）の四人で向かうことにした。

「あそこね」

馬で町から僅かな距離を走った後、その影が前方に姿を現した。街道からだいぶ外れた、周囲を林に囲まれた昼間でも薄暗い場所に、ひっそりと佇んでいる。

風が梢を揺らす微かな音しかないこの空間、それを乱す蹄の音に相手も気付いたかもしれない。馬を離れた位置に置いた私たちは、息を殺して慎重にその廃屋へと近付いた。

遠目からでもその荒れようは酷く目に映ったけれど、近付いて見たら更に予想以上に建物が傷んでいるらしいことが分かった。

木造の小さなそれ——家と言うよりも粗末な掘っ建て小屋——は、長いこと手入れされることもなく風雨に晒され続けた結果だと思うけど、朽ちかけて今や半分傾いてしまっている状態だった。

「ほんとにこんなとこにいんのかよ？」

それをしげしげと眺めたセシルが眉根を寄せて、小声でぼそりと洩らす。

「でも、ここしか廃屋はないって話でしたよね」

「おーい！ 聞こえるか？」

突如隣で響いた大声に、私たちは揃ってびくりと全身を震わせた。

「ちょ、何やってんのよ、エディ（仮）！」

「何って、犯人を呼び出そうと……てか、なんだその『カッコカリ』って」

「あんたの本名知らないんだもの、だからよ、エディ（仮）！」

私の隣で、セシルが髪をかきながら口を挟む。

「もう面倒だから（仮）だけでよくねえ？」

「おおい！ よかねえよ！ それ既に人間の名前ですらねえだろうが！」

「それどころじゃありませんよ！ 誰か来ます、気を付けて下さい」

いつの間にかエディ（仮）の件で大騒ぎになっていた私たちを、バルドの鋭い一声が止める。私とセシルはすぐに息を呑み、廃屋を見据えて、身体を緊張させた。

「……？ 誰の姿も見えねえが」

呑気に掌を額に翳して呟いたエディ（仮）に、バルドが真剣な表情を崩さずに、再び注意を促す。

「黙って下さい、（仮）！」

「って、お前もかよ!？」

やがてゆっくりと暗い廃屋の中から姿を現したのは、あの小さな女の子じゃなかった。その人物は一度大きくよろめいて、今はもう扉を失った入口の柱に、それすらもやっという仕草で身体を預けた。

細い肢体に金色の巻き毛、そして豊満な胸を強調した深紅の衣服の、とにかく全てがやたらと派手な印象の女――。この緑と茶色の自然色の空間で、その姿はかなり浮いた存在に見える。

そして私たちは、その顔に見覚えがあった。

「あれ？ あの女って、酒場にいた……」

セシルが呟いて、銃から手を離す。

腐れかかった壁に力なく縋り付いた女は、私たちの姿を認めると、虚ろな視線をゆるゆると彷徨わせた。それがエディ（仮）に結ばれた途端、くしゃりと今にも泣き出しそうな面持ちになる。

「嬉しい、エディ、助けに来てくれたのね!? アタシ、おかしい男に捕まって無理矢理ここに連れて来られたのよ、それから小さな女の子も中にいるわ」

そして弱々しく言い、ふらりと一歩前に踏み出す。

「二人とも無事か!」

安堵の息を吐いて、女の元に駆け出しそうになったエディ（仮）を、バルドが素早い動作で引き止めた。

「だめです、行ってはいけません！ あの人……！」

「は？ 彼女がどうかしたか？」

服を背後から掴まれたエディ（仮）がバルドを振り向いた刹那――
|。

辺りに乾いた銃声が轟いた。

「番外編」 第5話

静かな林の中、『コオオン』という撃鉄ハンマーが落ちた音が余韻を残し、木霊する。気付けば、エディ（仮）が激しい音をたてて、後方に倒れていた。

「ッ、おい、大丈夫か（仮）！」

セシルが叫んで、振り返る。女が背後に隠し持っていたライフルを放つのと、それを狙って私が引き金を引くのはほぼ同時だった。

「あつたー……お前、もうちつと手加減しろよ」

バルドに襟首を掴まれて思い切り地面に引き倒されたエディ（仮）が、後頭部をさすりながら齒の隙間から唸った。

危険を感じての咄嗟のバルドの行動だったけど、結果的には、それは必要のないことだったみたい。女が狙いを定めた弾は軌道を大きく外し、遙か頭上の小枝を撃ち落としていたのだから。

そして、私の放った弾丸は。

「遅いわよ」

当然のように、女の手から長いその銃身バレルを弾き飛ばしていた。私は、言って微笑む。

女の顔が先ほどとは一変して、憎悪に歪んだ。かと思えば、それは次の瞬間には、勝ち誇った笑みへと取って代わる。

腕を背後に伸ばしたかと思うと、あの女の子の小さな身体を自らの盾のように前面に突き出した。そのか細い首もとに、鋭利な刃物を押し当てる。

私たちはその状況に弾かれたように息を呑む。

「マーシャ！」

がばりと身を起こしたエディ（仮）が叫んだ。

呼ばれた女の子は、恐怖に目を見開いて、ただただ小刻みに震えるしかできないでいる。

「たかが子供一人を助け出すのに、そんなに大勢でなけりや心もとなかったの？ 情けない男ね、ガンナーエディ！」

「人数なんてどうだっていいだろ、要求通りに俺が来たんだ、マーシャを離せ！」

今にも走り出しそうな勢いで、エディ（仮）が声を荒げた。けれど、それに女は眉ひとつ動かさずに、鋭い双眸をずっと細める。

「まだよ、まだ、アタシはあんたに用がある」

「用だつて？」

「あんたに捕まえられた男は、アタシの相棒だつたんだ。盗みで捕まった人間が受ける罰を知ってる？ 腕を取られるのよ！」

そのことを、私は知っていた。実際に街の路地裏で、手首から先を失った腕で膝を抱えている男を見たことだつてある。

でもそれは、盗みは盗みでも、よっぽどのことをしてきた人間に与えられる罰で。だから、この女の相棒である男は、きっとそれなりのことをしてきたってことなんだろうと思う。それがまさかこんな田舎で捕まることになるなんて、本人だって微塵も考えていなかったんじゃないかな。

一瞬の間の後、再びエディ（仮）が語気も鋭く、はねかえすよう

に叫んだ。

「それを俺に哀れめつてのか？ 自業自得じゃないか！」

「あんたに哀れんでもらったところで、また腕が生えてくるわけじゃないからね。だから、代わりに交換しようじゃない？ この子の命と、あんたの利き腕を」

「……なッ！」

思いもしない交換条件に、私たちは言葉を失う。エディ（仮）は、唇を噛み締めて、自分の右腕を庇うようにして一步後退る。けれど。

「分かった。それでマーシャを解放するなら、そうしよう」

「ちよ、ちよっと待ってよ！」

私が制止の声を上げると、女は手元の短剣をこれ見よがしに、位置は変えないまま握り直した。びっくりとマーシャの身体が大きく弾んで、その真つ白い頬を恐怖から流れた涙が伝う。

私たちを無言で制し、エディ（仮）は女の張りつめた精神を刺激しないように意識してか、緩慢な歩みで二人の元へと進んだ。

「さあ、持ってけよ」

太い腕を、女の前に差し出す。女が薄く笑い、短剣をマーシャの首から離れた刹那——エディ（仮）が、腰の銃を左手で抜いた。

素早く女の肩に銃口を押し当てる。けれど、その行動は女の不可解な笑みをますます広げさせただけだった。撃鉄が墜ちる音が、確かに聞こえた。なのに、何も起こらない。

思い当たる節に、私は目を見開いた。

まさか、まさか……！

「弾切れ!？」

——ガンナーとして、有り得ない失態だわ!

その状況に一番狼狽えたのは、当然のことながら、空の弾倉の銃を持つ本人だった。己の顔の高さまで手の中のそれを持ち上げ、愕然とする。

「な……! 弾込めしてから一発も使ってねえはずなのに!？」

「お馬鹿さんね。あの晩、鼻の下を伸ばして油断しきってたあんたの目を盗んで、アタシが全部貰っておいたのよ」

慌てふためく相手を前に、乾いた声でクスクスと女が笑う。

「でも、馬鹿な男はキライじゃないわ。可愛げあるもの。……じゃあ、交換成立ね？」

赤い唇が、ぐつと引き上げられる。

エディ（仮）は、その体格には不似合いなほどの素早さで、後方へと大きく地面を蹴った。女がそれを追うようにして身を乗り出し、落ちかけた日の光を鈍く反射させる短剣を、大きく振るう。地面に突き放されたマーシャが金縛りから解放されて、やっとのことで喉の奥から掠れた悲鳴を上げた。

「エディお兄ちゃん!」

半ば習慣的に撃鉄に指を掛けていた私の隣で、セシルが鋭い舌打ちをしたのが聞こえた。

「おい、受け取れ！」

その言葉と共に身体を大きく弾ませてエディ（仮）に向かって投げたのは、彼の銃。それは激しく回転しながら、空に大きく弧を描いた。

私とバルドは、その瞬間を瞬きせずに見守った。上半身を捻った男の手に、セシルの黒いリボルバーがまるで吸い込まれるように収まる。それをくるり、と素早く一回転させて、彼は眼前に迫った女に向き直り。

そして——重い銃声が、辺りに響き渡った。

「マーシャー！」

町に戻った私たちをその入り口で真つ先に出迎えたのは、マークとその両親だった。エディ（仮）の鞍の前に座っていたマーシャは、馬から下ろしてもらうなり、転がるように駆け出す。

「エディさんがまた助けて下さったぞ！」

「いや……その、実はだな、俺は」

しどろもどろになりながら、エディ（仮）は、困ったように頭を手をやり、ちらりと肩越しに後方を振り返る。

「そうね。さすがよね、ガンナーエディ」

微笑んで頷くと、エディ（仮）は目を丸くした。慌てて何か反論しようとしたけれど、英雄の凱旋に盛り上がった人々に瞬く間に取り囲まれ、そのまま町の中へ引つ張られて行ってしまった。

確かにあの状況で否定するというのは、大変な作業かもしれない。英雄熱に浮かされた人々は、こちらの話など全く聞いていない様子なのだから。

「エディ、いいのかよ？ あのままです」

私たちはその場に取り残される形になり、嵐のように過ぎ去った群衆の熱気にセシルが呆れたように訊ねる。

「いいわよ、別に、この町でだけなら。あの子のために、腕を差し出したことに免じて、今回だけは許すわ」

あの時の行動が例え計算した上でのことだとしても、それでも彼の口調は嘘でもなんでもなく、本気だったと私は思うから。

「けれど、セシルだってあの時、手助けしたじゃありませんか？」

バルドがからかうような口調で問う。

エディ（仮）が追い詰められた時、私たちのいた場所からだって放った弾丸は届くはずだった。なのに、セシルはそうしなかった。敢えて自分の銃を、あの男へと投げて寄越した。

それは、たぶん。

「エディお兄ちゃんを信じてるマーシャのために、あいつの顔を立てたのよね？」

それは図星だったらしい。言い当てられたセシルは『う……まあ』

と曖昧に言い淀んで、視線を私たちから大袈裟に逸らした。

その顔が少しばかり赤かったのは、決して私の気のせいではないと思う。

【番外編】 第5話（後書き）

す、すみません、「次回で終わります」とかって活動報告で宣言しておきながら、終わりませんでした……（、旦那；）

思った以上に長くなってしまったので、もう一話分だけ伸ばします
orz

「番外編」 最終話

その夜、私たちはあの酒場で盛大なもてなしを受けた。主役はもちろん、エディ（仮）。

私はその場を笑顔で過ごした。もちろんそれは建前上とかじゃない、心からのもの。セシルは少しかり粃然としないとも言いたげな顔をしてテーブルに頬杖を付いていたけれど、いつの間にか背後に迫っていたエディ（仮）に絡まれて、なおかつ強いお酒を勧められ、そのまま騒ぎの渦中に引きずり込まれて行ってしまった。

バルドは私の隣に座り、中央で大騒ぎする主役を眺めて、相も変わらず派手なその泥酔っぷりにほんの少し眉を下げて笑っただけだった。

だから私も何も言わずに微笑んで、彼の肩に頭を預けた。

「なんか頭がガンガンする……」

明るい灰色の愛馬に跨り、その太く逞しい首に身体を伏せたセシルがぼやく。

「無理して強いのを飲むからよ」

「しばらくは仕方ないですね。走らないで、ゆっくり行きますか」

私たちは翌朝、町を出ようとその入り口まで馬を引いて来ていた。二日酔いに苦しむセシルは『もう一日この町で休んでから行きましょうか?』というバルドの提案にもゆっくりと首を横に振り、自

力で鞍によじ登ったものの、身を起こすのも辛いというような状態だった。

潰れた喉から絞り出しているような唸り声に、私も一度肩をすくめてから、あひみ鐙に足を掛ける。

「おーい！ 待ってくれ！」

慌てるような大声と共に駆けつけたのは、エディ（仮）。セシルの倍以上は飲んでいたはずなのに、もうすっかりした晴れやかな顔で、その足取りもきびきびしていた。

恐るべし、酒豪。と、私は口の中だけで呟く。

「何も言わずに行くなんて冷たいなあ」

「だって、あんた朝まで飲んでたから、今ごろは大イビキかと思つて」

「あんなのは飲んだうちに入らないって。けど、なんでか変な感じに頭が痛えんだよな、どこかにぶつけたのか？」

「ああ、それはエデルトリダが蹴」

「調子に乗りすぎて椅子から転げ落ちたのよ」

バルドの答えを遮り、私は素早く言葉を重ねる。

あの後、またしても人格の変わったエディ（仮）にバルドとの仲を冷やかされた私は、遠慮なく足を振り上げていた。

レディにあんなプライベートなことを訊くなんて、失礼だったらしいもの！

「私たちは、もう行くわ。あんたは、まだこの町にいますでしょ？」

「ああ、あと数日はな。あの女泥棒を然るべき人間に引き渡した後には、また流れ者のガンナーとして他に向かうさ。ここじゃそうそう仕事はないからな」

「そう」

私は頷いて、あの女のことを思い出す。

泥棒の片割れの女は、エディ（仮）の放った弾丸に倒れた。とは言っても、肌を少し掠めただけ。けれど肩に散った鮮やかな赤にパニックに陥った女を、エディ（仮）は易々と片手で制したのだった。その女は今、町はずれの小屋に縛り上げられて閉じ込められている。近くの街から、罪人を預かる立場の人間が来て無事にそこを離れるまでは、エディ（仮）が町に留まるということになっていた。馬に合図を出す前にふとそのことを思い出して、私は訊ねた。

「ところであんた、本当の名前は？ 商売仲間なら、聞いたことがあるかもしれないわよね」

私の質問に、彼は一瞬だけ間の抜けた表情になる。まだそれを口にしていなかったことを、どうやらすっかり忘れていたらしい。

それから太い親指で、己の胸を指して答えた。

「俺はエドワードだ」

「エドワード？」

「それなら、あなたも『エディ』じゃないですか。（仮）を付ける必要もなかった」

「ああ、だけど俺は別人である『エディ』を名乗った。この町を出たら、ずっと自分自身のままの『エディ』でいようと思う。……許してくれるか？ 本物のガンナーエディ？」

私の名を語った偽者（ニセモノ）のエディは、口角を引き上げて、馬上の私を見上げた。それは、私が自分を許すということを疑っていないからこそ出た余裕の笑みだった。

相変わらずのそのお調子者っぷりに、私もちよつとばかりわざと

らしく首を傾げて見せる。

「あら、信じる気になったのね？」

「ああ、噂で聞いたことをぼんやりと思い出してな。ガンナーエデイは、足蹴も半端じゃねえって話」

「はあ！？ ちょっと、何よその噂！」

まさかの返答に、思わずまた足を出しそうになったのをぐっと我慢しながら私は叫んだ。ここでそれをやってしまったら、実証してしまうことになるもの！

途端にセシルの声で『ぶふっ』と押し殺したような笑いが聞こえて、素早く振り返る。けれど彼はさっきまでと変わらずに、馬の首に組んだ腕に顔を埋めていた。

私が手を腰に片眉を引き上げたところで、ふと、今度は軽い足音が響いた。それはエドワードの姿を探していたらしいマーシャのものであった。

彼の元に着くなり、嬉しそうにはしゃいだ声を上げて、その分厚い身体に跳ねるようにして強く抱き付く。

「ずいぶんと好かれたようですねえ」

その微笑ましい光景に、目を細めたバルドがのんびりと言つと、マーシャは花が綻ぶように顔を輝かせた。

「うん、エディお兄ちゃん大好き！ マーシャね、大きくなったらエディお兄ちゃんのお嫁さんになるの」

「よ、嫁！？」

これにはさすがにエドワードも目を剥く。

「良かったわね、エディ。可愛い彼女ができて」

「えっ、いやいやいや、ちょっと待て、いくらなんでも歳の差有り過ぎだろう!？」

おかしいほどにわたたと慌てるエドワードに、全身で自分を否定されたと感じたらしいマーシャの笑顔が、みる間に萎んでゆく。エドワードのシャツの裾を両手でぎゅっと掴み、潤んだ瞳で見上げる。

「エディお兄ちゃん、マーシャがキライ？」

「や、嫌いとかそういうことじゃなくてだな？ その、マーシャにはそのうち年齢的にも相応しい相手が」

何とか言い聞かせようと必死になるけれど、マーシャの表情は晴れるどころか、ますます泣き出しそうに歪んだ。眉間に深い皺が寄り、両の口角が大きく下がる。

つつけばすぐにでも涙を溢れさせそうなその様子に、とうとうヤケを起こしたとも言わんばかりに、エドワードが叫ぶ。

「わかった、わかったから泣くな！ その、なんだ、お、大きくなったらな！」

途端に、マーシャの顔にいつぱいの笑顔が戻った。

「うん！ エディお兄ちゃんは、マーシャのダンナさまね！」

再びセシルから『ぶふっ』と聞こえたけれど、今度は私もバルドもそれにつられ、声を上げて笑った。

私たちは、そのまま町を後にする。エドワードと、彼にぴったりと身を寄せたままのマーシャに見送られ、ゆっくりと馬を進めた。セシルの頭痛が治まるまでは、このまま並足で行くしかないみたい。

「よく落ちませんね」

相変わらず馬の首に上体を伏せたまま、手綱すら自然と揺れるに任せているセシルに、バルドは本気で感心しているようだった。

「あー、俺とコイツは息ぴったりだから……って、話すと気持ち悪い……」

セシルはほんの少し顔を上げたものの、抑揚なく言って、そのまま口を閉ざした。

「エドワードに対抗しようとなんかしなくて、断れば良かったのよ。あれは底なしだわ」

私の言葉にも、微かに手を持ち上げて何やら意思表示をしようとしつつも、そのままパタリと力なく落としてしまう。手綱だけではなく、腕までがまるで無機質な物のように、空に重々しく揺れる。よく見ると、鐙につま先すらかけていない。

まったくもう、『酒は飲んでも飲まれるな』なんて、誰の言葉だったかしらね？

時々年齢にそぐわないような大人びたことを言うけれど、やっぱりまだ世話の焼ける弟のような気がして、私はこっそりと口元を緩めた。

「ところで、道はこつちで合ってるのよね？」

それから、そのことを改めてバルドに確認する。

あの町に寄ったのは、元々は一晩の宿を求めていることだった。それがまさか、もう一人の『ガンナーエディ』と会って、あんな一件に巻き込まれることになるなんて思いもしなかったけれど。

私たちは、バルドの故郷に向かっていている途中だった。そしてそこまでの道筋を知っているのは、当然のことながら彼しかない。

誰の目にも映ることがないという、不思議な力で守られた、魔導を扱う人々の暮らす閉鎖的な町。それは、鬱蒼と茂る森の中に隠れて存在しているという。

文字通り人目を避けて隠れ住んでいるのだから、それも当然と言えば当然のことなんだろうと思うけれど、それでは辿り着くのでさえも一筋縄ではいかなそうな気がしてしまう。

けれど私たちは、そこを目指すことを決めていた。

『バルドが無事だということを、きつと心配しているはずの家族や友人に伝えるために』と言う私に続けて、彼は、『それに村の人々にも、外の世界のことを恐れずに知ってもらうために』と、穏やかな声にも固い意志を滲ませて、そう言ったのだった。

私の確認の問いに、バルドはしっかりと頷いた。

「はい、大丈夫です。このまま暫くは、この広い街道沿いに進みましょう」

それから、全身の力が完全に抜けてしまっている様子のセシルを、一度見やる。

そして短く付け加えた。

「できるだけ、ゆっくりと」

途端に静かな寝息が辺りに響き始め、私たちは顔を見合わせて弱々しく笑う。

——ああ、これはなんだか本当に、長い旅路になりそうだわ。

> E N D <

【番外編】 最終話（後書き）

軽い気持ちで始めた番外編でしたが、毎度の如く、予定していたよりも倍ほど長くなりました（^^;）

ここまでお付き合い頂き、感謝です！ ありがとうございます（* > < *）

ラストがそれっぽくない中途半端な終わり方してますが、この流れの通りに、またそのうち第三部を書きたいと思ってたりします。その目処が付きましたら、ここでお知らせしたいと思いますので、完結ボタンはとりあえず押さないままにしようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9797j/>

歌姫の結婚 【レディガンナーは歌う/Stage 2】

2011年10月8日11時27分発行